

学位請求論文

天台智顛の「四種四諦」について

仏教学専攻

JIWENJIE

目次

凡例	4
----	---

序論

はじめに	5
一、本研究の目的	6
二、智顛の四諦をめぐる先行研究	6
三、本論における諸文献の採用及び考察の対象	8
四、本論の各章大意	9
五、本研究の意義	11

第一章、智顛の『次第禪門』における二種四諦

はじめに	13
第一節、『次第禪門』における四諦と四弘誓願	14
・『次第禪門』の四諦について	15
・諸師の四弘誓願について	18
・四諦と四弘誓願の関係	23
第二節、菩薩の禪波羅蜜における四諦と四弘誓願の位置	24
第三節、小結	31

第二章、『法界次第』における二種四諦

はじめに	33
第一節、『法界次第』について	34
第二節、『法界次第』の「四諦」について見方	37
1、四諦について	37
2、四諦十六行と生法二空の関係について	43
3、四弘誓願における四諦	47
・四諦と四弘誓願の関係	47
・四諦と化法四教の関係	52
第三節、小結	55

第三章、『四教義』の「四種四諦」について

はじめに	57
第一節、『勝鬘經』における四諦説の思想基盤	59
第二節、『涅槃經』における四諦説の思想基盤	66
第三節、智顛における「四種四諦」説	74
第四節、小結	82

第四章、『涅槃經集解』と天台智顛の四諦解釈

はじめに	84
第一節、『涅槃經』「聖行品」と『涅槃經集解』「聖行品」における四諦の解釈	84
第二節、『法華玄義』における「四種四諦」	93
・生滅四諦	93

・ 無生四諦	96
・ 無量四諦	97
・ 無作四諦	99
第三節、小結	100

第五章、天台智顛における「如来蔵」思想

はじめに	102
第一節、智顛の「如来蔵」思想に関する先行研究	103
・ 「如来蔵」を中道仏性とした研究	103
・ 智顛の心具論における「如来蔵」義の研究	104
第二節、四種四諦における「如来蔵」の意味	106
・ 智顛における大乘小乗の四諦義	107
・ 無生・無量・無作の四諦に見られる「如来蔵」と「仏性」	109
第三節、『四教義』における別教の「如来蔵」	114
・ 五聖行・四種四諦・五十段階の対応	115
・ 五十段階における「如来蔵」	116
第四節、小結	119
結論	120
参考文献	124

凡例

・本文と引用文で用いる漢字の字体は、新字とする。

・本論文で用いる略号は次の通りとする。

『大正蔵』：『大正新脩大蔵経』（大蔵出版）

『法華経』：『妙法蓮華経』（『大正蔵』第9巻）

『勝鬘経』：『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』（『大正蔵』第12巻）

『涅槃経』：『大般涅槃経』（『大正蔵』第12巻）

『瓔珞経』：『菩薩瓔珞本業経』（『大正蔵』第24巻）

『法華義記』：梁・法雲撰『法華経義記』（『大正蔵』第33巻）

『法華玄義』：隋・智顗撰『妙法蓮華経玄義』（『大正蔵』第33巻）

『集解』：『大般涅槃経集解』（『大正蔵』第37巻）

『次第禅門』：隋・智顗撰『积禅波罗蜜次第法門』（『大正蔵』第46巻）

『法界次第』：隋・智顗撰『法界次第初門』（『大正蔵』第46巻）

序論

はじめに

「四諦」に対する解説は、仏教思想史の中で、常に重要な課題として論じられている。なぜならば、釈尊によって初めて説かれた教説の内容であり、二乗と大乘に共通して取り上げられる課題だからである。印度の大乘仏教が中国に至った後の南北朝時代には、印度仏教が中国的な仏教に転換されてきた。また中国文化を滋養した中国仏教にもなった。この時代の中国仏教は百花斉放の盛況があらわれている。智顛はこのような時代背景を踏まえて、自分自身の仏教教判体系を成立させた。

ところで、「四諦」という教えも、中国の教相判釈の成熟を伴って、意味内容が拡大している。そこで智顛の「四種四諦」という考え方は、智顛が自分自身の教判思想のもと、当時主流だった仏教思想を統合している。特に「空」・「中道」・「第一義諦」・「仏性」・「如来蔵」などの概念使用は、基本的に全ての仏教思想を取り込んでいる。「四種四諦」という考えは一日にしてならず、智顛の自己研鑽にしたがって徐々に形成されたものである。そこで、智顛の「四種四諦」は、どのような成立過程を経ているのか、どのような意味範囲で「空」・「中道」・「第一義諦」・「仏性」・「如来蔵」の教えを扱っているのか。これは智顛の仏教思想を理解する上で、最も重要な問題となっている。

一、本研究の目的

本研究の目的は、上記の問題意識を持って、より詳しく問い詰めていきたい。具体的に言えば、前期時代の智顛には、「四種四諦」という考えをあまり見出せない。「四種四諦」は智顛の後期時代の作品で常に言及していることである。それでは前期時代の智顛は、どのような四諦に関する思索をしていたのか、また後期時代の「四種四諦」との接点は何であろうか。これらの疑問を抱えて、本論は前期時代から後期時代にかけて智顛が思索した「四諦」の意味を考察することを目的とする。

二、智顛の四諦をめぐる先行研究

智顛の四諦に関する先行研究は、「四種四諦」の成立根拠という疑問点をめぐる研究になっている。しかし、智顛自身は「四種四諦」の所依經典を『大般涅槃經』としている。「四種四諦」の成立根拠という疑問より、智顛の四諦解釈がどのように変化しているかを考察した研究は少ないと言える。以下では現在まで智顛の「四種四諦」を中心とした代表的な研究を整理しつつ、それぞれの研究視点に注目していく。

鹽入（1964）は、智顛の著作における苦集道滅という四諦の次第の取り扱い方を問題点として智顛の四諦を論じている。鹽入（1964）によると、智顛は『瓔珞經』の四弘誓願、『中論』の四諦品、智顛自身の三観思想などの考え方にしたがって苦集道滅という四諦の次第を説いている。

『法華玄義』における智顛の「四種四諦」についての考えは、『涅槃經』の「聖行品」に基づいている。鹽入氏（1964）は智顛の「四種四諦」の經証を『涅槃經』とする以外、『勝鬘經』と『思益經』があると示してい

る。また鹽入氏（1964）は「四種四諦」の名称が『勝鬘經』から出ていると指摘している。さらに「四種四諦」の内容は『思益經』で説かれる天台の「四種四諦」に近いと考えられている。

加藤（1990）は、「四種四諦」の名相が見られる經典、智顛以前の諸師の「四種四諦」、智顛の二種四諦から「四種四諦」という三点から、智顛の「四種四諦」を論じている。智顛の「四種四諦」の教義内容は、『涅槃經』の聖行品だけではなく、『思益經』や『中論』で述べている四諦を含有している。さらに智顛以前の「四種四諦」を大小二乗の分類によって、法と行の二方向から検討していた。智顛は智顛以前の諸師の四諦を加えて、『勝鬘經』の四諦名称と『涅槃經』の教義を採用してから、自身の「四種四諦」を形成した。また、加藤は天台の「四種四諦」として成立するまでの過度期的な所産として『法界次第初門』の二種四諦があることを指摘している。『法界次第初門』の二種四諦は、有作四諦と無作四諦である。化法四教に対して、有作四諦は藏教通教の教えである。別教円教の四諦は無作四諦である¹。加藤の見解では、二種四諦が「四種四諦」として形成された時点において、「四種四諦」から化法四教が成立する証拠がある。

斎藤（1991）は加藤の研究を踏まえて、『四教義』と『法華玄義』では、「四種四諦」を典拠とした智顛の『勝鬘經』の四諦の扱い方が違うと指摘している。この前提により斎藤は、智顛が円融思想を展開させていく上で『勝鬘經』の四諦は歴別的な四諦であり、『涅槃經』の四諦は真実の四諦であると推察する。さらにもう一つ考えられることは、『法華玄義』で智顛は、「有師解」を批判するため、『勝鬘經』の四諦の取り方は『四

¹ 鹽入の論文でも同様に理解されている。

教義』と違っている²。

以上では、智顛の四諦に関わる先行研究をまとめた。最初に述べたように、これらの先行研究はすべて「四種四諦」の成立根拠を出発点として考察を行なっている。智顛の最初の四諦解釈から「四種四諦」の考えまでは、どのような思想変遷があるかについては、十分な研究がなされていない現状である。また当時の仏教に対して、智顛がどういう問題を持っているかということに対しては、あまり触れていない。このため、智顛の前期時代から後期時代までの「四諦」の意味を考察することは、非常に重要な課題になっている。

三、本論における諸文献の採用及び考察の対象

前期時代の智顛は『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』の四諦説を援用している。後期時代の智顛は『大般涅槃経』の四諦説を援用している。これによって、本論で扱う経典は、『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』と『大般涅槃経』という大乘経典である。

² 斎藤（1991）の論文でこの時期、智顛の「四種四諦」と類似する説が出され、その説と明確に区別するため、『法華玄義』で「四種四諦」の根拠を『涅槃経』と示し、また「有師解」を批判している。筆者の管見では、智顛の『勝鬘経』に対する態度は、『四教義』から『法華玄義』まで変わってない。違う視点から『勝鬘経』を採用しているからである。『四教義』の時、智顛はまず自分自身の「四種四諦」の根拠を『涅槃経』と指している。さらに、『涅槃経』に基づいた「四種四諦」の意味を持って、諸経の四諦説を判別しようと試みる。『勝鬘経』の四諦説は当時よく注目される四諦説であるから、自然に智顛の判別範囲に所属する。『法華玄義』の時、智顛は「有師解」を批判しているが、『勝鬘経』の四諦説を批判するわけではない。「有師解」の『勝鬘経』の四諦は四種類の四諦の意味にならないと智顛が考えている。

また、智顛の著作は、前期著作である『釈禪波羅蜜次第法門』・『法界次第初門』と後期著作である『四教義』・『法華玄義』がある。『釈禪波羅蜜次第法門』・『法界次第初門』の中には、「四種四諦」の体系があまり見えないが、小乗と大乘の二種類の四諦の特徴が見られる。これによって、本論の第一章・第二章では、智顛の前期時代に対して、小乘法と大乘法の「四諦義」を中心として考察する。『四教義』・『法華玄義』の中に、智顛は「空」・「中道」・「第一義諦」・「仏性」・「如来蔵」などの概念を扱って、「四種四諦」の意味内容を広げている。したがって、本論の第三章・第四章・第五章では智顛の後期時代に対して、「四種四諦」の意味範疇を中心として考察する。

四、本論の各章大意

本論文は五つの章によって構成する。以下では各章の内容を紹介しておく。

第一章、智顛の『次第禪門』における二種四諦

第一章では、まず、『次第禪門』において智顛の「二種四諦」を指摘する。そこで「二種四諦」は四弘誓願を持つ菩薩の四諦と四弘誓願を持たない二乗の四諦ということである。次に、四弘誓願の問題を持って、智顛以前の諸師及び智顛はどのような誓願思想を持っているかを確認する。さらに、智顛が指摘されている菩薩の禪波羅蜜における四諦と四弘誓願に関する位置を考察する。

第二章、『法界次第』における二種四諦

第二章では、『法界次第』の「二種四諦」について検討する。『次第禪門』より『法界次第』の「二種四諦」は智顛の化法四教という考え方が見出される。従来『法界次第』は、『次第禪門』と同じく禪修の入門書とされている。しかし、両書の文体は異なっている。これによって、本章ではまず、『法界次第』の文体について考察する。さらに、『法界次第』において、智顛は大小乗四諦に沿って、四諦の意味を述べているが、大乘菩薩の四諦は四弘誓願を持っている以外、化法四教の思想に対応している。したがって、最後に前期時代の智顛はどのように四諦を化法四教に対応させているかを検討する。

第三章、『四教義』の「四種四諦」について

第三章では、まず『四教義』の「四種四諦」において、智顛が採用した『勝鬘師子吼一乘大方便方広経』と『大般涅槃経』の四諦説に注目する。智顛はどのように両経を受容しているのか。また、両経を確認する上で、智顛自分自身の「四種四諦」の意味を解明する。

第四章、『大般涅槃経集解』と天台智顛の四諦解釈

智顛の「四種四諦」は空に関する解説がある。智顛以前の中国南北朝時代の南地涅槃宗は、すでに四諦の意味を空とする解釈をしている。第四章では、智顛には涅槃宗の諸師からの影響があるのかという疑問を持って、智顛と涅槃宗の諸師の四諦解釈を比較しながら、智顛自身の「四

種四諦」の特徴を求める。

第五章、天台智顛における「如来蔵」思想

『四教義』の「四種四諦」において、智顛は「仏性」と「如来蔵」の言葉を扱って、「四種四諦」のそれぞれの意味範囲を定義している。智顛にとって「仏性」と「如来蔵」はどのように理解されているか。これについて、第五章ではまず現在までの先行研究を確認する。さらに、「四種四諦」の範疇をめぐって、「仏性」と「如来蔵」の使用状況に注目して、「仏性」と「如来蔵」に対して、智顛の理解を明らかにする。また後期時代の智顛は化法四教に配当する「四種四諦」において、「仏性」と「如来蔵」を別教の修行段階の指導方針としている。したがって、本章の最後では、別教の修行段階において、「仏性」と「如来蔵」の意味を検討する。

五、本研究の意義

天台智顛は天台宗の創宗者として日中の仏教研究界で非常に有名な人物であり、彼の思想に関わる研究成果も豊富にある。しかし、智顛の思想に関する研究はまだ検討すべき箇所が残っている。「四種四諦」の研究はその残っている課題の一つである。その理由は、四諦に対する解説は、全仏教の共通の課題であり、大小乗仏教・宗派仏教のすべてが討議している教えだからである。智顛の「四種四諦」を研究すると、智顛の思想を解明するだけでなく、智顛以外の研究領域も知ることができる。また智顛の「四種四諦」の研究によって、当時の仏教界に対して、智顛は

どのような問題意識を持っていたかが見える。その問題に向かって、智顛はどのような実践対策を行なっていたかが分かる。智顛の前期著作では、『次第禪門』・『法界次第』・『六妙門』は四諦を禅修の観法として常に論じている。智顛の後期著作では、『四教義』・『摩訶止観』・『法華玄義』・『維摩玄疏』は、「四種四諦」を単独な課題として繰り返して述べている。したがって、四諦の問題は、智顛の仏教思想において重要であったといえる。

第一章、智顛の『次第禪門』における二種四諦

はじめに

佐藤(1961)は智顛の著作を前期時代と後期時代に分けている³。その前期時代に代表される著作には、『釈禪波羅蜜次第法門』(以下『次第禪門』と略称する)、『法華三昧懺儀』、『六妙法門』、『覺意三昧』、『方等三昧行法』、『法界次第初門』(以下『法界次第』と略称する)、『小止観』がある⁴。智顛の前期時代の思想体系における四諦説の特徴は「二種四諦」と言える。「二種四諦」の意味内容を検討すると、重層的な意味合いと二つの「二種四諦」が見られる。一つは二乗と菩薩に対する「二種四諦」であり、もう一つは、化法四教に対する「二種四諦」である。こうした二つの「二種四諦」は、どのような判教の標準を持っているのであろうか。また、智顛の二つの「二種四諦」は、どれほど経論の影響を受けているのか。これらの疑問点は、智顛の「四種四諦」の研究に対する重要な手がかりである。

本章では、『次第禪門』と『大智度論』を考察文献とし、二乗と菩薩の「二種四諦」の意味内容がどのようなものであるかを検討していく。二乗と菩薩の「二種四諦」は、『次第禪門』に説かれている四諦義である。禪波羅蜜を実践するという点では、菩薩と二乗という修行者に関して、四弘誓

³ 佐藤(1961)、智顛の前期時代は、大蘇山時代・瓦官寺時代・天台隱棲時代の三時期がある。

⁴ 佐藤(1961)。

願を持つ菩薩の四諦と四弘誓願を持たない二乗の四諦が説かれている。

『大智度論』は、智顛の菩薩の禪波羅蜜の所依論典である。以下、まず『次第禪門』における四諦と四弘誓願の関係を考察し、さらに、智顛が理解した『大智度論』の菩薩の禪波羅蜜はどのようなものであるかを考察する。

第一節、『次第禪門』における四諦と四弘誓願

『次第禪門』における四諦解釈は、智顛が円熟期に教相判釈を立てる前の四諦説であり、円熟期に教相判釈を立てた後の四諦説に対して、智顛が若い時にどのように四諦を理解したかを示している。また、『次第禪門』の四諦説の特色として、智顛が『瓔珞經』の四弘誓願を四諦と関連付けていることが挙げられる。しかし、『瓔珞經』の中に、何故四弘誓願を四諦と関連付けるのかは説明されていない。智顛は『般若經』と『大智度論』の示唆に基づいてその原因を追求している。このため、初期の頃から智顛にとって『瓔珞經』は、四諦について考える上で重要な經典であった。『瓔珞經』以外では、智顛は『法華經』と『般若經』と『大智度論』の教えを受け入れて、四諦と四弘誓願のつながりを示している。

本節では四弘誓願と四諦をどのように関連付けているかを、智顛以前と、智顛と同時代の仏教者の思想を比較しつつ明らかにする。さらに、智顛が引用する『般若經』と『大智度論』の教えが、四弘誓願と四諦と、どのような関係があるのかを考察する。

・『次第禪門』の四諦について

章安灌頂（560－632）の『隋智者大師別伝』によれば、陳の光大二年（568）より大建七年（575）まで八年間にわたって、智顛は瓦官寺で『大智度論』と『次第禪門』を講学していたとされる⁵。しかし、この時、『次第禪門』はまだ文書化されていないと考えられる⁶。また、『次第禪門』は、智顛の前期時代における実践坐禅の指南書物である。『次第禪門』は、智顛の後期時代の『摩訶止観』とほぼ同様の十大章という形式で構成される⁷。『摩訶止観』には、智顛が南岳慧思（515－577）から三種止観を相承したと記述されるため、後世の天台学者は、『次第禪門』を三種止観の漸次止観と考えている⁸。『次第禪門』の大きな課題は、菩薩が禅波羅蜜を実践することである。菩薩の禅波羅蜜には、二つの要点があり、発菩提心の相（四弘誓願と四諦）を示すことと⁹、菩薩が禅波羅蜜を修学す

⁵ 『隋智者大師別伝』「若説次第禪門一年一遍。若著章疏可五十卷。若説法華玄義并円頓止観半年各一遍。若著章疏各三十卷。此三法門皆無文疏。講授而已。大莊嚴寺法慎私記禪門。初分得三十卷。尚未刪定而法慎終国清寺。」（『大正蔵』50巻, 95b）『隋智者大師別伝』「停瓦官八載講大智度論。説次第禪門。」（『大正蔵』50巻, 192c）

⁶ 『次第禪門』の成立年代については、佐藤(1961, 12)に分析されている。

⁷ 『次第禪門』の十大章は、一修禅波羅蜜大意、二积禅波羅蜜名、三明禅波羅蜜門、四辨禅波羅蜜詮次、五简单禅波羅蜜法心、六分別禅波羅蜜前方便、七积禅波羅蜜修証、八顛示禅波羅蜜果報、九從禅波羅蜜起教、十結会禅波羅蜜帰趣である。『摩訶止観』の十大章は、一大意、二积名、三体相、四摂法、五偏円、六方便、七正観、八果報、九起教、十旨帰である。

⁸ 三種止観：漸次止観・不定止観・円頓止観である。『次第禪門』を漸次止観に属するが適切であるかどうかは、再検討しなおす必要がある。なぜなら、『次第禪門』の中に、『摩訶止観』の三種止観と似ている三種の入道相が示されているからである。

⁹ 『次第禪門』「今明菩薩修禅波羅蜜。所為有二。一者簡非。二者正明所為。（中略）第二正明菩薩行人修禅波羅蜜大意。即為二意。一先明菩薩発心之相。二正明菩薩修禅所為。」（『大正蔵』46巻, 476a-476b）

る時、具体的な行為である菩薩道（修禪）を示すことである¹⁰。

『次第禪門』の四諦と四弘誓願は、まず菩薩の発菩提心に関する記述箇所を示される。智顛における菩薩の菩提心について、「菩提心とは、即ち是れ菩薩、中道正觀を以て、諸法実相を以て、一切を憐愍し、大慈心を起こし、四弘誓願を發す。¹¹」と示される。さらに、智顛はこの四弘誓願を詳細に説明するために、『法華經』の四句と『瓔珞經』の四諦に関連する四弘誓願を取り上げる。『次第禪門』は次のとおりである。

四弘誓願とは、一には未だ度せざる者を度せしむ。亦た衆生無辺誓願度と云う。二には未だ解せざる者を解せしむ。亦た煩惱無数誓願断と云う。三には未だ安んぜざる者を安んぜしむ。亦た法門無尽誓願知と云う。四には未だ涅槃を得ざるに涅槃を得せしむ。亦た無上仏道誓願成と云う。此の四法は、即ち四諦に対す。故に、『瓔珞經』に云く「未だ苦諦を度せざるには、苦諦を度せしむ。未だ集諦を解せざるには、集諦を解せしむ。未だ道諦を安んぜざるには、道諦を安んぜしむ。未だ滅諦を証せざるには、滅諦を証せしむ」と¹²。

これによれば、智顛が四弘誓願について考え出したことは、以下のよ

¹⁰ 『次第禪門』「第二正明菩薩行人修禪所為者。菩薩摩訶薩。既已發菩提心。思惟為欲滿足四弘誓願。必須行菩薩道。（中略）我今住何法門。修菩薩道。能得疾滿如此四願。即知住深禪定。能滿四願。」（『大正藏』T46, 476c4-c13）

¹¹ 『次第禪門』「菩提心者、即是菩薩以中道正觀、以諸法実相。憐愍一切。起大悲心。發四弘誓願。」（『大正藏』46卷, 476b12-b14）

¹² 『次第禪門』「四弘誓願者、一未度者令度、亦云衆生無辺誓願度。二未解者令解、亦云煩惱無数誓願断。三未安者令安、亦云法門無尽誓願知。四未得涅槃令得涅槃、亦云無上仏道誓願成。此之四法。即對四諦。故『瓔珞經』云。未度苦諦令度苦諦。未解集諦令解集諦。未安道諦令安道諦。未証滅諦令証滅諦。」（『大正藏』46卷, 476b17-b20）

うに三種の四弘誓願となる¹³。

① 『法華経』の四句に示されているものである¹⁴。

未だ度せざる者を度せしむ。

未だ解せざる者を解せしむ。

未だ安んぜざる者を安んぜしむ。

未だ涅槃を得ざるに涅槃を得せしむ。

② 仏教思想の中に一般的に見られる四弘誓願である¹⁵。

衆生無辺誓願度。

煩惱無数誓願断。

法門無尽誓願知。

無上仏道誓願成。

③ 『瓔珞経』に示されている四弘誓願である。

未だ苦諦を度せざるには、苦諦を度せしむ。

未だ集諦を解せざるには、集諦を解せしむ。

¹³ これについて、先行研究の中に、ローズ（2012）で二種の四弘誓願と指摘している。青木（1995）で三種の四弘誓願と指摘している。

¹⁴ 四句：『法華経』「未度者令度。未解者令解。未安者令安。未涅槃者令得涅槃。」（『大正蔵』9巻, 19b11-b13）

¹⁵ 関口（1969, 159-162）では、この四弘誓願の創称が智顛に帰すると結論されている。

未だ道諦を安んぜざるには、道諦を安んぜしむ。

未だ滅諦を証せざるには、滅諦を証せしむ。

以上のように、智顛の四弘誓願の解釈には、『法華経』の四句と、智顛がまとめた四弘誓願の語句と、『瓔珞経』の四諦についての語句が組み合わされている。しかし、なぜ智顛が『法華経』の四句を大乘菩薩の四弘誓願と関連付けて説くのかということに加え、四諦と四弘誓願の間にもどのような関係があるのかは明らかになっていない。以下、この二つの問題点について検討していきたい。

・ 諸師の四弘誓願について

「未だ度せざる者を度せしむ」などの四句は、『法華経』巻三の薬草喻品に説かれているが、青木（1995）によれば、実は多くの大乘経典の中に広く説かれている¹⁶。筆者の見解では、これらの大乘経典に説かれる四句は、同様の意味を持つが、文字が多少異なることがある。ここにおいて、智顛が引用した「未だ度せざる者を度せしむ」などの四句は、『法華経』の四句と全く同じであるから、『法華経』からの引用であることは疑うべくもない。また、青木（1995）が指摘するように、多くの大乘経典でこのような四句が説かれているが、どの経典でもこの四句は四弘誓願と名付けられていないため、中国においてこの四句がどのような経緯で四弘誓願と認められるようになったのかは、いまだに明らかになっていない。この問題に関して、後期の著作である『法華玄義』とはいくら

¹⁶ 青木（1995）で『道行般若経』・『大品般若経』・『六十華嚴経』・『大般涅槃経』・『大集経』等にも見出されると示している。

かの関連が見られるが、前期の思想である『次第禪門』において、智顛が何に発想を得て、また、何を根拠としてこの四句を四弘誓願と名づけているのかは不明瞭である。ただし、智顛以前と、智顛と同時代の人は、『法華経』の「未だ度せざる者を度せしむ」などの四句を四弘誓願と呼んでいる。そこで、智顛と智顛以外の仏教者の四弘誓願の解釈の違いを確認したい。また、「未だ度せざる者を度せしむ」などの四句を四弘誓願とする経証は、智顛以前と智顛と同時代においては基本的に『涅槃経』『法華経』『瓔珞経』によって論じられている。以下に説明する。

『涅槃経』の四句

未だ脱せざる者を脱せしめ。未だ度せざる者を度せしめ。未だ涅槃せざる者に涅槃を得しめ。一切の諸の恐怖ある者を安慰すべし¹⁷。

『集解』の僧宗

僧宗曰く、十善四（四：慈・悲・喜・捨）等は是れ要行、四弘誓は是れ要願なり¹⁸。

『集解』の宝亮

宝亮曰く、別に経ありて四弘誓を四諦に配するを明かすなり。謂く未だ苦を度せざれば、苦諦を説きて度せしむ。未だ縛を免れざれば、集諦を説きて解せしむるなり。未だ涅槃せざれば、滅諦を説きて会せしむ。未だ安んぜざれば、道諦を説きて安んぜしむるなり。其の心曠きが故に弘

¹⁷ 『涅槃経』の四句：北本『大般涅槃経』卷三、寿命品「脱未脱者。度未度者。未涅槃者令得涅槃。安慰一切諸恐怖者。」(『大正蔵』12卷, 380b)

¹⁸ 『大般涅槃経集解』「僧宗曰、十善四等是要行、四弘誓是要願也。」(『大正蔵』37卷, 416a16-a17)

と名づく、必ず能く行ずるが故に誓と名づくるなり¹⁹。

『法華経』の四句

未だ度せざる者を度せしむ。

未だ解せざる者を解せしむ。

未だ安んぜざる者を安んぜしむ。

未だ涅槃を得ざるに涅槃を得せしむ²⁰。

『法華義記』の法雲

第一に「大衆中に於いて而も是の言を唱う」従り以下は、先に如来に十号の徳あるを明かす。第二に「未だ度せざれば度せしむ」従り下、四弘誓の徳を明かす。第三に「今世・後世如実に之を知る」従りは、此れ三達の徳を明かす²¹。

『法華義疏』の吉蔵

「未だ度せざれば度せしむ」より下は、第四に内徳を挙げて以て雲に合す。内徳の中に、前に四弘誓を明かすは、此れ如来出世の意を述べるなり。如来の世に出づる所以は、良に昔に四弘誓有るに由る。是の故に今十号の人の世に出現するを明かすなり。故に肇師云く、僧那（弘誓の音

¹⁹ 『大般涅槃経集解』「宝亮曰、別有経明四弘誓配四諦也。謂未度苦者説苦諦令度。未免縛者説集諦令解也。未涅槃者説滅諦令会也。未安者説道諦令安也。其心曠故名弘、必能行故名誓也。」(『大正蔵』37卷, 416a19-a23)

²⁰ 『法華経』「未度者令度。未解者令解。未安者令安。未涅槃者令得涅槃。」(『大正蔵』9卷, 19b)

²¹ 『法華義記』「第一、從於大衆中而唱是言以下、先明如来有十号之徳。第二、從未度者令度下、明四弘誓之徳。第三、從今世後世如実知之、此明三達之徳。」(『大正蔵』33卷, 648c17-c20)

釈) を結ぶに始心に於いてし、終に大悲を以て難に赴く。即ち此の文意なり。『瓔珞經』に云く、四諦に約して四弘誓願を立つる。未だ苦海を度せざれば願いてこれを度せしむ。故に未だ度せざれば衆生を度せしむるを集諦と為すと云う。煩惱、業縛をして願いて解脱せしめんが為の故に、未だ解せざる者をして解せしむ。未だ道諦を安んぜざれば安んぜしむ。未だ滅諦を得ざれば、涅槃を願いて之を得せしむ。前の二は即ち是れ大悲の願、後の二は即ち是れ大慈の願なり²²。

智顛以前、「未だ度せざる者を度せしむ」などの四句を四弘誓願と呼ぶ文献について、青木(1995)は『大般涅槃經集解』(以下『集解』と略称)の僧宗(438-496)と宝亮(444-509)、『法華義記』の法雲(467-529)を取り上げて、「未だ度せざる者を度せしむ」などの四句を四弘誓願であるとした最も早い文献は、中国成立の經典の『菩薩瓔珞本業經』であると結論づける。しかし、『集解』の僧宗と宝亮、『法華義記』の法雲がどのように詳細に理解しているかには触れられていない。以下、『集解』の僧宗と宝亮、『法華義記』の法雲の見解を簡単に説明する。

『集解』の僧宗と宝亮は、『涅槃經』の四句を根拠として、「未だ度せざる者を度せしむ」などの四句を四弘誓願と理解している。元々『涅槃經』の中に、如来長寿の業の問題点でこの四句が説かれている。如来は菩薩道の際に、四弘誓願を発すことを原因として、如来長寿の業を成就

²² 『法華義疏』「未度者令度下第四、拳内德以合雲。内德之中、前明四弘誓者、此述如来出世意也。如来所以出世者、良由昔有四弘誓。是故今明十号之人出現世也。故肇師云、結僧那於始心終大悲以赴難。即此文意也。『瓔珞經』云、約四諦立四弘誓願。未度苦海願令度之、故云未度者令度衆生為集諦、煩惱業縛願令解脱、故云未解者令解。未安道諦者令安。未得滅諦涅槃者願令得之。前二即是大悲願、後二即是大慈願也。」(『大正藏』34卷, 561a15-a25)

する。

『集解』の僧宗は、『涅槃經』四句の以前の十善・四無量心を「要行」と考えて、『涅槃經』の四句を「四弘誓」と考えて、菩薩の「要願」と理解している。

『集解』の宝亮は、『瓔珞經』の四諦を配する四弘誓願を取り上げて、四弘誓願を発す心が廣大であるから、「弘」と名付け、必ず四弘誓願を実践することを「誓」と名付ける。

『法華義記』の法雲と『法華義疏』の吉蔵（549-623）は、『法華經』の四句を根拠として、「未だ度せざる者を度せしむ」などの四句を四弘誓願と理解している。

『法華義記』の法雲は、如来が二種の功德を持っていると考える。十名号の功德と、四弘誓願の功德がある。四弘誓願の功德は、『法華經』の四句の内容を目指す。

智顓と同時代の吉蔵は、『法華義疏』の中で、法雲と同様に理解している。如来は十名号と四弘誓願の内徳を持っている。『法華經』の四句は四弘誓願を明かすことであるから、如来が出世の意を述べている。また、吉蔵は僧肇の「涅槃無名論」の話と『瓔珞經』の四諦を配する四弘誓願を引用して、『法華經』の四句を菩薩の「大悲願」と「大慈願」として理解している。

以上のように、智顓以前と智顓と同時代での「未だ度せざる者を度せしむ。」などの四句を四弘誓願とすることは、他の仏教者にも認められていることである。智顓の前期時代はこのような影響を受けた可能性が高い。その故に、『次第禪門』の中で、智顓は『法華經』の四句を大乘菩薩の四弘誓願として説いていると考えられる。また、智顓以前と智顓と同時代の仏教者は、『瓔珞經』の四諦を配する四弘誓願を引用しているが、

四諦と四弘誓願の明確な関係は見出せない。

・四諦と四弘誓願の関係

智顗は三種の四弘誓願を記述した後、特に『瓔珞經』の四弘誓願について、二乗と菩薩の理解が異なることを示している。『次第禪門』の該当箇所は次のとおりである。

而して此の四法は、若し二乗の心中に在れば、但だ諦の名を受くのみ。其れ理を縁し、審実にして謬らざるを以ての故に。若し菩薩の心中に在れば、即ち別して弘誓の称を受く。所以は何ん。菩薩は四法、畢竟空寂なりと知ると雖ども、而も衆生を利益する為に、善巧方便す。此の四法を縁し、其の心は、廣大なるが故に名づけて弘と為す。慈悲憐愍にして、此の法を志求するに、心は金剛の如く、制心は不退不没なりて、必ず成滿を取る、故に誓願と名づく。行者は、若し能く此の四願を発すことを具足すれば、善く四心を知ることとは、一切心を摂し、一切心即ち是れ一心なり、亦た一心を得ずして、而も一切心を具して、是れを清淨菩提心と名づく²³。

『瓔珞經』の四諦を説く四弘誓願は、二乗の心において、四諦の道理

²³ 『次第禪門』「而此四法。若在二乗心中、但受諦名、以其縁理審実不謬故。若在菩薩心中、即別受弘誓之称。所以者何。菩薩雖知四法畢竟空寂、而為利益衆生、善巧方便。縁此四法、其心廣大、故名為弘。慈悲憐愍、志求此法、心如金剛、制心不退不没、必取成滿、故名誓願。行者若能具足發此四願、善知四心、摂一切心、一切心即是一心、亦不得一心而具一切心、是名清淨菩提之心。」(『大正蔵』46卷, 476b21-b29)

だけ修学し、衆生を助ける四弘誓願を発さない。菩薩の心において、衆生を助けるため、四諦の道理に沿って修学する。このような菩薩の心は、二乗より広大であるから、「弘」と名付けられる。また、菩薩は慈悲憐愍の心を持って四諦の道理を志し、金剛のような心で不退不没にして、必ず成満になれるから、「誓願」と名づけられる。

智顛は『瓔珞經』の四諦を説く四弘誓願にあって、菩薩の四諦の特徴を強調する。すなわち、菩薩の四諦は、常に四弘誓願を発すことを伴う。四諦は二乗と菩薩の共通の教えであるが、二乗は四諦の教えを修了した後に寂滅涅槃に止まる。一方、菩薩は仏になる道を歩むため、四諦の教え以外に衆生を助ける四弘誓願を起さなければならない。すなわち、二乗と比較すれば、菩薩の四諦は四弘誓願と結びつけられるという新しい展開を持つ。要するに、四諦と四弘誓願が関係付けられているのは、二乗の教えと区別するためであり、二乗と比較した上で菩薩の教えの特徴を示すことになる。

これまでに菩薩は禅中で二乗と同様に四諦の教えを観察することを明らかにした。また、菩薩は禅中に四諦を観察するだけでなく、四弘誓願を発さなければならない。すなわち、菩薩にとって、四諦に対して再び検討の問題がなくなったが、四弘誓願を円満することは実践的な行為である新しい問題となっている。次の節に検討しよう。

第二節、菩薩の禅波羅蜜における四諦と四弘誓願の位置

四諦という教えは、本来初期仏教で四果聖者が四禅定の中で修行の対境として観察する。大乘仏教では、禅中に四諦の教えを観察することを踏襲して、二乗と菩薩の共通の教えとして認めている。智顛は、この思

想を受け継いで、菩薩の四諦に四弘誓願という願心を追加した。しかし、四諦の問題点に着目すると、四諦を四弘誓願に配当することについては、智顛が『瓔珞經』の教証を使用する以外、何故四弘誓願を発すのかを詳細に説いていない²⁴。『次第禪門』の「第二明菩薩行人修禪所為」という課題によれば、菩薩の四諦は四弘誓願を受けた後の禪波羅蜜へと展開する働きを示している。

以下「第二明菩薩行人修禪所為」の意味内容に基づいて、なぜ菩薩は四諦を観察している禪境に、四弘誓願を発さなければならないのかを検討する。『次第禪門』の該当箇所は次のとおりである。

菩薩摩訶薩は、既已に菩提心を発す。思惟して四弘誓願を満足せんと欲するが為に、必ず須く菩薩道を行ず。所以は何ん。願有りて而も行無し。人を彼岸に度せんと欲するに、肯えて船筏を備えざるが如し。当に知るべし常に此岸に在り。終に度を得ず。病者の薬を須むるに得て服さざるが如し。当に知るべし病者必ず定めて差えず。貧の珍宝を須めるも見て取らざるが如し。当に知るべし常に弊にして窮乏す。遠行せんと欲するも涉路せざるが如し。当に知るべし此の人は所在に至らず。菩薩は四弘誓を発して、四行を修せざるも、亦た復た是くの如し²⁵。

²⁴ 加藤（1983）によると、慧思の『諸法無諍三昧法門』は四弘誓願を禅法の一つとしている。

²⁵ 『次第禪門』「菩薩摩訶薩。既已発菩提心。思惟為欲満足四弘誓願。必須行菩薩道。所以者何。有願而無行。如欲度人彼岸。不肯備於船筏。当知常在此岸。終不得度。如病者須薬得而不服。當知病者必定不差。如貧須珍宝見而不取。當知常弊窮乏。如欲遠行而不涉路。當知此人不至所在。菩薩発四弘誓。不修四行。亦復如是。」（『大正蔵』46巻、476c）

菩薩は四弘誓願を起した後、必ず菩薩道を行わなければならない。すなわち、四弘誓願を円満することは、菩薩道に向かって実践的に行うこととなっている。そこで智顗は、四弘誓願を菩薩の願心とする。菩薩道を菩薩の実践体験として考えている。さらに、どのように四弘誓願を伴って菩薩道に向かって実践するかが、以下のように示されている。

復た是の念を作す、我れ今、何れの法門に住して、菩薩道を修して、能く疾かに此の如きの四願を満ずることを得んやと。即ち深き禅定に住すれば、能く四願を満ずることを知る。何を以ての故に、六通・四弁無きが如き、何等の法を以ってか而も衆生を度せん。若し六通を修せば、禅に非ざれば発こさず。故に『経』に言わく、「深く禅定を修して五神通を得ん」と。煩惱を断ぜんと欲せば、禅に非ざれば智ならず。禅より慧を発し、能く結使を断ず。定無きの慧は、風中の灯のごとし。法門を知らんと欲せば、当に一切の功德・智慧並びに禅中に在ることを知るべし。『摩訶衍論』に云うが如し。「若し諸仏成道し、転法輪を起し、般涅槃に入る。あらゆる種々の功德、悉く禅中に在り。」と。復た次に菩薩は無量義処三昧に入れば、一心に万行を具足し、能く一切無量の法門を知る。若し無上仏道を具足せんと欲するに、禅定を修せざれば、尚お色・無色界及び三乗の道を得ること能わず。いかに況んや、能く無上菩提を得るをや。当に知るべし、無上妙覚を証せんと欲せば、必ず須く先ず金剛三昧に入るべしと。而も諸仏の法は乃ち現在前す。菩薩は、是くの如く深心に思惟して審らかに禅定は能く四願を満ずることを知る²⁶。

²⁶ 『次第禅門』「復作是念、我今、住何法門、修菩薩道、能得疾満如此四願。即知住深禅定、能満四願。何以故、如無六通四弁、以何等法而度衆

菩薩は禪波羅蜜という法門で菩薩道を修行して、四弘誓願を円満することができる。ここで智顛は次のように示している。菩薩道とは、ますます広がっている意味を持っている。ここで智顛は菩薩道を禪波羅蜜ということに絞っている。すなわち、禪波羅蜜の中に、四弘誓願を円満することができる。なぜなら、禪波羅蜜によって、六通と四弁という功德が得られる。菩薩は六通と四弁を持って衆生を助けることができる²⁷。したがって、四弘誓願を円満することもできる。さらに、智顛は『法華経』と『大智度論』に基づき、菩薩の禪波羅蜜（定）から智慧と成仏の功德を全て成就すると示して、もう一度禪波羅蜜より四弘誓願を実現すると結論づける²⁸。

さて、智顛は問答の形によって、禪波羅蜜を通じてどのように四弘誓

生。若修六通、非禪不発。故『経』言、深修禪定、得五神通。欲断煩惱、非禪不智。從禪発慧、能断結使。無定之慧、如風中灯。欲知法門、當知一切功德智慧並在禪中。如『摩訶衍論』云。若諸仏成道、起轉法輪、入般涅槃。所有種種功德、悉在禪中。復次菩薩入無量義処三昧、一心具足万行、能知一切無量法門。若欲具足無上仏道、不修禪定、尚不能得色無色界及三乘道。何況、能得無上菩提。當知欲証無上妙覺、必須先入金剛三昧。而諸仏法乃現在前。菩薩、如是深心思惟審知禪定能満四願。」(『大正蔵』46巻, 476c11-c25)

²⁷ 六通：神足通・天眼通・天耳通・他心通・宿命通を言う。智顛は『次第禪門』を説く時期、同じ『大智度論』を講学しているから、『大智度論』の影響を多少受けている。『大智度論』巻二十八によれば、菩薩は禪波羅蜜で慈悲心を持って、衆生のため、神通力を修する。原文は次の通りである。『大智度論』巻二十八「問曰、神通有何次第。答曰、菩薩離五欲得諸禪有慈悲故、為衆生取神通、現諸希有奇特之事、令衆生心清浄。」(『大正蔵』25巻, 264b14-b17)

²⁸ 『法華経』巻一「又見菩薩、勇猛精進、入於深山、思惟仏道、又見離欲、常處空閑、深修禪定、得五神通。」(『大正蔵』9巻, 136a20-a22)『大智度論』巻二十八に取り上げた「経、菩薩摩訶薩欲住六神通、当学般若波羅蜜。」と「経、菩薩摩訶薩欲勝一切声聞辟支仏智慧、当学般若波羅蜜。」については、禪・定・三昧ということに沿って説明している。ここで智顛が理解した菩薩の禪波羅蜜の発想は見られる。

願の実現を解釈しているのか。『次第禪門』の該当箇所は次のとおりである。

問うて曰わく、「菩薩は、若し四弘誓願を満足せんと欲せば、応当に遍く十波羅蜜を行ずべし。何ぞ独り禪定を讚むることを得んや。」と。答えて曰わく、「前の四は義劣なり、後の五は禪に因る。今、則ち中に処して而も説く。所以はいかん。菩薩は禪を修すれば、即ち能く増上の四度を具足す。下の五も亦た然り²⁹。

設問は、菩薩が四弘誓願を満たしたいならば、十波羅蜜を修さなければならぬ³⁰。どの理由で禪定ということを持って賛嘆するのかという問いである。

智顛の答えは、十波羅蜜の布施・持戒・忍辱・精進という四波羅蜜の意味が禪波羅蜜より深くない、禪波羅蜜でその四波羅蜜の意味を収めて

²⁹ 『次第禪門』「問曰、菩薩、若欲満足四弘誓願、応当遍行十波羅蜜。何得独讚禪定。答曰、前四義劣、後五因禪。今、則処中而説。所以者何。菩薩修禪、即能具足増上四度。下五亦然。」(『大正蔵』46巻, 477a7-a10)

³⁰ 十波羅蜜：佛馱跋陀羅訳『六十華嚴経』巻二十五「十波羅蜜者、菩薩以求仏道所修善根、与一切衆生、是檀波羅蜜。能滅一切煩惱熱、是尸波羅蜜。慈悲為首、於一切衆生、心無所傷、是羸提波羅蜜。求善根無厭足、是毘梨耶波羅蜜。修道心不散、常向一切智、是禪波羅蜜。忍諸法不生門、是般若波羅蜜。能起無量智門、是方便波羅蜜。求轉勝智慧、是願波羅蜜。諸魔外道不能沮壞、是力波羅蜜。於一切法相如实説、是智波羅蜜。」(9巻, 561b-561c)。菩提流支訳『大宝積経』巻一百一十五「云何為波羅蜜義、所謂明示超過一切声聞独覺所行故、广大円満如来智故、於有為無為不執著故、如實了知生死過故、諸未覺者悉令覺故、得如来無尽法蔵故、得無礙解脱故。以布施度脱諸衆生故。以持戒円満本誓願故。以忍辱具足端嚴相故。以精進究竟諸仏法故。以禪定出生四無量故。以般若滅除諸煩惱故。以方便積集諸仏法故。以願能令仏法円満故。以力能令衆生浄信故。以智具足如来一切智故。得無生法忍故。得不退轉地故。浄治仏刹故。成熟衆生故。於菩提道場円満一切如来智故。」(『大正蔵』11巻, 649b8-b19)

いる。また、後の慧・方便・願・力・智という五波羅蜜は全て禪波羅蜜によって成就する³¹。

智顛が述べたような禪波羅蜜の展開は『大智度論』にも語られている。

問うて曰く、是の三昧は即ち是れの三昧門なりや不や。答えて曰く、三昧は即ち是れ三昧門なり。問うて曰く、若し爾らば何を以てか、但だ三昧を説かずして、而も復た三昧門を説くや。答えて曰く、「仏の諸三昧は無量無数なること、虚空の無辺なるが如し。菩薩は云何んぞ尽く得んや。菩薩は是を聞けば心則ち退没せん、是を以ての故に仏は三昧門を説いて一門の中に入りて無量の三昧を摂す。衣の一角を牽けば、衣を挙げるに皆な得るが如し。亦た蜜蜂の王を得れば、餘の蜂を尽く摂するが如し。復た次に展転を門と為す。持戒清浄にして、一心に精進し、初夜・後夜に勤修し、思惟して五欲の楽を離れ、心を一処に繋げ、是の方便を行じて、是の三昧を得るが如し。是を三昧門と名づく。(中略)禪波羅蜜の義の中に、諸の三昧を分別して広く説くが如し。復た次に尸羅波羅蜜は是れ三昧門なり。何を以ての故に、三支は是れ仏道なればなり。所謂戒支・定支・慧支なり。清浄なる戒支は是れ定支の門にして能く是の定を生じ、定支は能く慧支を生じ、是の三支は能く煩惱を断じ、能く涅槃を与ふ。

³¹ 『次第禪門』「如菩薩発心為修禪故。一切家業。内外皆捨。不惜身命。寂然閑居。無所慳吝。是名大捨。復次菩薩。為修禪故。身心不動。閑閉六情。開無從入。名大持戒。復次菩薩。為修禪故。能忍難忍。謂一切榮辱皆能安忍。設為衆惡來加。恐障三昧。不生瞋惱。名為忍辱。復次菩薩。為修禪故。一心專精進。設身疲苦。終不退息。如鑽火之喻。常坐不臥。撰諸乱意。未嘗放逸。設復經年無証。亦不退没。是為難行之事。即是大精進也。故知修禪因縁。雖不作意別行四度。四度自成。」(『大正藏』46卷, 477a10-a20)

是を以ての故に尸羅波羅蜜及び智慧、三昧の近門と名づく。余の三波羅蜜は是れ門の義と雖も遠門と名づく³²。

『大智度論』において、「禪波羅蜜の展開」は三昧、すなわち三昧門であり、仏が説いた三昧は無量無数であるから、三昧門の表現で、一つの三昧門に一切の三昧が収められる。次に、仏は尸波羅蜜（持戒）の例をとって、尸波羅蜜を三昧門の一つとし、持戒・禪定・智慧の三つの波羅蜜を三昧門の近門として示している。後の布施・忍辱・精進の三つの波羅蜜は、三昧門の遠門と見られる。

智顛は十波羅蜜の禪波羅蜜を三昧門として、禪波羅蜜から十波羅蜜を引き出す。『大智度論』は六波羅蜜の尸波羅蜜を三昧門として、尸波羅蜜（持戒）から六波羅蜜を引き出す。両者は同様の論証方法である。智顛の時代までに、般若系の經典において十波羅蜜という表現は言明されていないが、十波羅蜜の意味は多少見える。中国宋代に至った際、法賢訳『仏説最上根本大樂金剛不空三昧大教王経』は、十波羅蜜である布施・持戒・忍辱・精進・禪定・慧・方便・願・力・智を示している。智顛が述べた十波羅蜜は、『六十華嚴経』や『大宝積経』などに依ると予想することができる³³。智顛は六波羅蜜という表現を使用しないが、『次第禪門』

³² 『大智度論』「問曰、是三昧即是三昧門不。答曰、三昧即是三昧門。問曰、若爾者何以、不但説三昧、而復説三昧門。答曰、仏諸三昧無量無数、如虚空無辺、菩薩云何尽得。菩薩聞是心則退没、以是故仏説三昧門入一門中攝無量三昧。如牽衣一角、拳衣皆得。亦如得蜜蜂王、餘蜂尽攝。復次展転為門。如持戒清浄、一心精進、初夜・後夜勤修、思惟離五欲樂、繫心一処行是方便、得是三昧。是名三昧門。（中略）如禪波羅蜜義中、諸三昧分別広説。復次尸羅波羅蜜是三昧門。何以故、三支是仏道、所謂戒支・定支・慧支。清浄戒支是定支門能生是定、定支能生慧支、是三支能断煩惱能与涅槃。以是故尸羅波羅蜜及智慧名三昧近門。余三波羅蜜雖是門義名遠門。」（『大正蔵』25巻、268c-269a）

³³ 大嶋（2020）：智顛が述べた十波羅蜜は『十住経論』等の影響と想定

の經典引証に対する態度から見ると、「禪波羅蜜の展開」の発想は『般若經』と『大智度論』を基盤にしている。

第三節、小結

以上智顛の『次第禪門』における二種四諦について考察した。智顛以前と、智顛と同時代の仏教者が『瓔珞經』の四弘誓願を採用していることは、『集解』の諸師が四弘誓願を菩薩道と関連して説明していることを示している。それに対して、法雲と吉蔵は四弘誓願を如来の功德として理解している。智顛は『集解』の諸師と同様に四弘誓願を菩薩道として理解しているが、この菩薩道に関する意味内容を禪波羅蜜に反映させている。また、智顛は以前の先蹤と同様に、『法華經』の四句を四弘誓願として、『瓔珞經』の四諦と四弘誓願の関係を捉えた。しかし、『次第禪門』において、智顛は智顛以前と智顛と同時代の仏教者の見方に対して、二乗と菩薩の四諦を区別することを重視している。

智顛の前期時代の『次第禪門』では、四諦の新しい展開として、二乗と菩薩の区分を前提とした二種の四諦解釈が見られる。また、『次第禪門』では、菩薩の四諦は、四弘誓願を起きることと緊密な関係になる。このような視点に立つと、智顛の後期時代で化法四教に配当する四種四諦に対して、『次第禪門』における四諦解釈には、二乗と菩薩という二種に区分される四諦が見られ、智顛の四諦解釈の最初期の形態を確認することができる³⁴。

される。

³⁴ 化法四教：蔵教・通教・別教・円教である。四種四諦：生滅四諦・無生四諦・無量四諦・無作四諦である。二乗の四諦は生滅四諦である。菩薩の四諦は、四種四諦の中にすべて見られるが、修行段階によって四種

『次第禪門』の四諦解釈では、菩薩は禪中に四諦を觀察する時、四弘誓願を起さなければならない。さらに、四弘誓願を実現しようとする菩薩道を歩みながら、禪波羅蜜を修することに帰結する。すなわち、菩薩の四諦は四弘誓願を受けてから、菩薩道である禪波羅蜜へ展開する働きである。

類を分けている。

第二章、『法界次第』における二種四諦

はじめに

『法界次第』における「二種四諦」は、『次第禪門』以上に、智顛の早期時代の判教思想の四諦解釈が見られる。なぜなら、『法界次第』には、藏教・通教・別教・円教という化法四教にしたがって、藏教・通教と別教・円教の「二種四諦」を分けているからである。藏教と通教の四諦は有作四諦であり、別教と円教の四諦は無作四諦である。このような四諦説は智顛の『次第禪門』の中には見えない。智顛の後期著作によれば、「四種四諦」と化法四教の間は緊密な関係がある。それゆえ、「二種四諦」が智顛の早期判教の中でどのような位置を占めているのか、ということについて検討しなければならない。

以上のように、本章では、智顛の初期判教における、『法界次第』の「四諦」に関する見方を考察していく。まず、『法界次第』はどのような書物であるのかということについて考察する。さらに、『法界次第』の中の四諦に関する記述を整理し、智顛の初期判教の「二種四諦」は何を表しているのか、また、他の仏教概念にどのように関連しているのかということについて検討する。

第一節、『法界次第』について

智顛の『法界次第』は巻上・巻中・巻下の三巻があり、全称『法界次第初門』と呼ばれている。『法界次第』は一般的に智顛の『次第禪門』後の著作であると考えられている³⁵。『法界次第』と『次第禪門』の共通点は、『大智度論』の影響を受け継いでいることである。また、『法界次第』に見られる多くの仏教用語は『大智度論』の論説を拠り所としている。『次第禪門』との差異は、『法界次第』が仏教辞典のような書物であり、仏教概念を解説することを主に重視し、修道実践の側面を中心として説明することが少ない。

『法界次第』を、禅修の書物とする場合が多い³⁶。しかし、『法界次第』を読むと、禅修の著作というより、智顛の後期時代の『法華玄義』のような「教相門」の書物であろうと筆者は考えている。前期時代の智顛は、実践的な修道論を求め、全仏教の教えを禅修指南のような書物に整理した。『法界次第』に至った時、智顛のスタイルは、実践禅法より、理論教法の整理に転換していることが見受けられる。以下、二点から検討したい。

第一には、『法界次第初門総序』によると、最初智顛は三種の意図を持って、七巻三百科の『法界次第』を書く予定であったが、三巻のみの『法界次第』を書き上げた。『法界次第初門総序』には、以下のようにある。

天台山修禅寺の沙門釈智顛、輒に経に依り論に附して、法界次第

³⁵ 佐藤(1961,240)。

³⁶ 従来の研究では、智顛の教学を「止観門」と「教相門」に分類している。『法界次第』は種々な禅法に関する名相を理解するために、智顛が書いた入門書である。

初門三百科を撰し、裁いて七巻と為す。新学に流伝するに、略して三意と為す。一には經を読み論を尋ね、法門を見るに随いて、名数に於いて迷うこと有る者を脱せしめんが為なり。二には未だ聖教の制する所、法門浅深の次第を解せざるものの為なり。三には三觀を学ぶ者の為なり。当に此の諸法の名相義理を以て、一一に心を歴として而も転作せば、則ち觀解に礙無く、觸境に迷わず。若し一念心中に於いて一切仏法に通達せば、則ち三觀は自然に了了分明なり。故に此の三百科の名教を出だし、仍当に名の下に略して体相を弁ず、始めて三巻を得たり³⁷。

智顛が『法界次第』を書いた目的は三つである。まず、經典及び經典の注釈書である論を読む際、様々な法門と名相に迷っており、これらの迷いを脱するためである。第二に、聖教（仏法）が所制する法門は深淺の順次があり、その深淺の順次を明らかにするためである。第三に、空假中という三觀を学ぶ人のためである。このうち、智顛は特に第三の目的に重点をおいて論じている。

上記に述べた三つの目的は、いずれも仏教教理に対して迷わないように『法界次第』を書く。『法界次第』を禅修の書物と見做すことは、三觀を学ぶ人のためであるという記述から推測することができる。三觀は坐禅中の觀法のひとつとしている。

³⁷ 『法界次第』「天台山修禅寺沙門釈智顛、輒依經附論、撰法界次第初門三百科、裁為七卷。流伝新学、略為三意。一為読經尋論、随見法門、脱有迷於名数者。二為未解聖教所制、法門浅深之次第。三為学三觀之者。当以此諸法名相義理、一一歴心而転作、則觀解無礙、觸境不迷。若於一念心中通達一切仏法者、則三觀自然了了分明也。故出此三百科、名教仍当。名下略辨体相、始得三卷。」(『大正蔵』46巻, 664b5-b13)

第二には、智顛以前、及びほとんど同じ時代に、『法界次第』と似たような著作が作られているが、これについて佐藤哲英氏は次のように指摘している。

智顛とほとんど時代を同じくした浄影慧遠（五二三－五九二）の大乗義章は（１）教法聚^{三科}（２）義法聚^{六十科}（３）染法聚^{六十科}（４）浄法聚^{百三十三科}の二百二十二科があるが、述作の当初には（５）雑法聚もあって合計二百四十五科からなっていたと言われる。この大乗義章は慧遠がその生涯をかけて心血を注いだ著作であり、諸名目を五分類して増数的に配列し解釋したものである。かかる佛教百科辭典的な著作は慧遠以前にも作られたようで、續高僧傳をみると北魏の道辯には小乗義章六卷、四十卷があって、諸經論の名目を法數の次第に配列してその要義を述べたものであったらしいから、慧遠の大乗義章も恐らくこれらに範をとって集大成したものではないか思う。このように南北朝時代には北地の諸學者によってほぼ同一類型の百科辭典的著作が出されているが、智顛もまたかかる北地佛教の影響をうけて、法界次第初門三百科の著作を思い立ったのであろう³⁸。

このように、佐藤氏の『法界次第』について、同時代の北地仏教の影響をうけている可能性が高いことを指摘している。道辯の『小乗義章』は『大正蔵』の中に収められておらず、どのような体裁の著作かもわからない。慧遠の『大乗義章』は、周知のように、広く研究されている仏教書物であり、一般的に仏教用語を解説する論書と認められている。ま

³⁸ 佐藤（1961, 226）

た、『大乘義章』は、慧遠の四宗教判によって、諸仏教の法門を大小乗の優劣があるものと示している。智顛の『法界次第』においても、常に大小乘法を区別しながら、諸法の名相の深淺意味を解釈している。

智顛の『法界次第初門総序』と佐藤氏の記述によって、諸法の名相を解釈する『法界次第』を、禅修の書物とすることは、難しいと思われる。

第二節、『法界次第』の「四諦」について見方

『法界次第』における四諦解釈は、基本的に巻中の下・巻下の上の間に集められている。巻中の下・巻下の上の構成は、四諦・四諦十六行・生法二空・三十七品・三解脱（三三昧）・三無漏根・十一智・十二因縁・四弘誓願・六波羅蜜・四依・九種大禅・十八空・十喩という十四科がある。その十四科のうち、四諦に関する名目は、四諦十六行・生法二空・四弘誓願である。

筆者は三つの枠組みで『法界次第』の四諦解釈を整理してみたい。第一には、四諦について総説する。第二には、四諦十六行と生法二空の関係を説明する。第三には、四弘誓願における四諦を説明する。それより智顛の四諦解釈がどのような順番で展開しているのかを検討していきたい。

1、四諦について

『法界次第』によると、諸々の無漏禅の中に各々の四諦の観慧がある。四諦科の前の三十二科に現れた「禅相」は、「理」（深い真理）を隠して「事」（現象のこと・目の前のこと）を顕すことである。これらの「禅相」

は、すべて四諦の観法を持っているが、「事」の意味によれば、様々な「禅相」の名称が立てられる³⁹。「禅相」の名称は、「諦」の意味から立てられたものではない⁴⁰。

四諦の本来の意味は、声聞たちの聞慧から生起した四諦の智慧である。すなわち、四諦の教えを通して、隠れている深い真理を理解することができる。『法界次第』において、智顛は「教」と「理」という両面から、四諦の教えの「審実不虛」の意味を説明する⁴¹。

また、因果関係の順によれば、先に因を示し、後に果を示すが、四諦では先に果を示し、後に因を示すということになる。すなわち、四諦の順番は、生死の果である苦諦と出世間の果である滅諦を先に語り、生死の因である集諦と涅槃の因である道諦を後に語るということである。

智顛は「審実」を四諦の諦理としているが、苦諦・集諦・滅諦・道諦に対する「審実」の意味は、指している内容が異なっている。

これに関し、智顛は四諦をどのように理解しているのかについて検討する。

苦諦について

苦とは逼悩を以て義と為す。一切の有為心行は、常に無常・患累の為に逼悩せらる、故に名づけて苦と為す。苦に三種有り、一には

³⁹ 前の三十二科は全て「禅相」ではない、「戒相」・「煩惱相」・「名色、五陰、十二入、十八界」などの仏教「名数」もある。

⁴⁰ 『法界次第』「但上来所説。諸無漏禅中。乃禅禅悉有四諦観慧。彼既明禅相。則隠理顕事。従事以立名。是以雖有四諦観法。而不従諦得名。」（『大正蔵』46巻, 680a20-a23）

⁴¹ 「教」と「理」の両面によって、全ての諦理を真実とする観察するということである。

苦苦、二には壊苦、三には行苦なり。今三苦を明かさば、別有り通有り。別とは、三苦即ち別にして三受に対す。苦受は苦縁に従り生ず。情覚是れ苦なり。即ち苦苦なり。楽受は楽を壊す時、苦を生ず。即ち是れ壊苦なり。不苦不楽受は、常に無常のために遷動す。即ち是れ行苦なり。若し三苦を通論すれば、即ち三受は通じて三苦有るなり。三受の心は即ち是れ苦なり。通じて苦縁に従り生ずるが故なり。通じて是れ苦苦なり。三受の心は、通じて壊相と為す。所壊するが故に通じて是れ壊苦なり。三受の心は、通じて是れ起没にして運動にして不停の相なり。故に通じて是れ行苦なり。若し三受の心は、若しは別、若しは通、これ苦なる者に非ざること無し。当に知るべし、苦は是れ審実にして而も有る。故に諦と名づくなり⁴²。

苦諦の苦に関し、「通」と「別」の両面から論じる場合がある。「通」として論じると、苦苦・壊苦・行苦という三苦がある。「別」として論じると、三苦は、苦受・楽受・不苦不楽という三受に対応して、全て苦ということである。

苦諦の諦理は、三苦と三受に対して、通として論じても、別として論じても、いずれも苦ということである。苦の真実を求めるものである「審実」にしたがって、苦ということを知ることができる。

⁴² 『法界次第』「苦以逼惱為義。一切有為心行。常為無常患累之所逼惱。故名為苦。苦有三種。一苦苦。二壊苦。三行苦。今明三苦。有別有通。別者三苦即別對三受。苦受從苦縁生。情覺是苦。即苦苦也。樂受。樂壊時生苦。即是壊苦。不苦不樂受。常為無常遷動。即是行苦也。若通論三苦。則三受通有三苦也。三受之心。即是苦。通從苦縁生故。通是苦。苦三受之心。通為壊相。所壊故通是壊苦也。三受之心。通是起没運動不停之相。故通是行苦也。若三受心。若別若通。無非是苦者。當知苦是審實而有。故名諦也。」(『大正藏』46卷, 680b1-b12)

集諦について

集とは招聚を以て義と為す。若し心、結業と相応すれば、未来に定めて能く生死の苦を招聚す。故に名づけて集と為す。集に三種の業有りて、一切業を摂す。一には不善業、即ち十不善なり。二には善業、即ち十善なり。三には不動業、即ち十二門禪なり。(中略) 若し此の煩惱は前の業と合すれば、則ち未来に定めて能く三界の死生苦果を招聚す、即ち是れ集諦なり⁴³。

集諦の集は、十不善業・十善業・不動業という三種類の業からなるということである。

集諦の諦理とは三界に輪廻する生死の因であり、三界に輪廻する生死の現象(果)を引き出すことができる。

因果関係によれば、苦諦は世間に輪廻する苦果であり、集諦は世間に輪廻する原因である。

滅諦について

滅無を以て義と為す。結業は既に尽き、則ち生死の患累無きが故に名づけて滅と為す。若し見思無漏の真明を発し、三十四心を具して結を断ずれば、則ち三界の九十八使、皆滅す。煩惱結使滅するを

⁴³ 『法界次第』「集以招聚為義。若心与結業相応。未来定能招聚生死之苦。故名為集。集有三種業、攝一切業。一不善業。即十不善也。二善業。即十善也。三不動業。即十二門禪也。(中略) 若此煩惱与前業合。則未来定能招聚三界死生苦果。即是集諦也。(『大正蔵』46卷, 680b13-b21)

以ての故に、三界の業も亦滅すなり。若し三界の業煩滅すれば、即ち是れ滅諦なる有余涅槃なり。因滅するの故に果滅するなり。此の報身を捨てる時、後世の苦果は永く相續せざるを、無余涅槃に入ると名づく。真の滅度なり。滅の理は不虛なるが故に、名づけて諦と為す⁴⁴。

滅諦の滅とは、生滅がなくなることを意味とする。煩惱と業はなくなり、生死の憂患もなくなる。

滅諦の諦理には二種類あり、三界内の有余涅槃の滅諦と三界外の無余涅槃の滅諦である。三界内の滅諦が三界内の九十八使の見思煩惱を滅すと、三界内の業がなくなり、有余涅槃に入る。三界内の有余涅槃に対して、三界外の無余涅槃の滅諦がある。三界外の滅諦は、三界内の生死と報身を受けず、無余涅槃の修行道に行く。真実の意味での滅諦の諦理は、無余涅槃に入ることを指す。

道諦について

道は能通を以て義と為す。正道及び助道なり。是の二は相扶して能く通じて涅槃に至るが故に名づけて道と為す。正道とは、三十七品・三解脱門を実観す。縁理の慧行、名づけて正道と為す。(中略) 助道とは、得解の観中の種々諸々の対治法、及び諸々の禪定なり。皆是れ助道なり。(中略) 復た次に正道とは、謂く見諦・八忍・八智・

⁴⁴ 『法界次第』「滅以滅無為義。結業既尽。則無生死之患累。故名為滅。若癸見思無漏真明。具三十四心断結者。則三界九十八使皆滅。以煩惱結使滅故。三界業亦滅。若三界業煩滅者。即是滅諦有余涅槃也。因滅故果滅。捨此報身時。後世苦果。永不相續。名入無余涅槃。真滅度也。滅理不虛。故名為諦。(『大正藏』46卷, 680b22-b28)

十六心なり。九無礙・九解脱・十八心を思惟す。真の無漏慧なり。名づけて正道と為す。其の余の方便対治、諸禪三昧、及び三十七品、三解脱等、皆是れ助道なり。此の二道は相扶して能く涅槃に通じ、審実にして不虛なり。即ち名付けて道諦と名づくなり⁴⁵。

道諦の道には正道と助道の二種がある。正道とは、「理を縁じる慧行」によって、三十七品・三解脱門などを観察することである。助道とは、「解を得る観中」によって、種々の対治法及び諸々の禪定を行うことである。

道諦の諦理とは、正道と助道にしたがって涅槃に入ることができることである。

『次第禪門』と比較すると、『法界次第』の四諦解釈では、苦諦・集諦・滅諦・道諦に対応する具体的な意味内容があり、明確に説明されており、智顛独自の分類法が見られる。特に滅諦については、三界内の有余涅槃と対比させ、三界外の無余涅槃を展開している。智顛は『次第禪門』において、二乗と菩薩の四諦を区別する態度を明確にしている。『次第禪門』の四諦は、二乗と菩薩に対して、三界内外の教えがあることを指摘している。ここで、三界外の教えが何であることを智顛は示していないが、この時期の智顛は、三界内外の見解をもっている。

従来、四諦に言及する際、四諦十六行を四諦の基礎的な意味として言

⁴⁵ 『法界次第』「道以能通為義。正道及助道。是二相扶能通至涅槃。故名為道。正道者、実観三十七品・三解脱門。縁理慧行、名為正道。(中略)助道者、得解観中、種種諸対治法。及諸禪定。皆是助道。(中略)復次正道者、謂見諦・八忍・八智・十六心。思惟九無礙・九解脱・十八心。真無漏慧。名為正道。其余方便対治。諸禪三昧。及三十七品。三解脱等。皆是助道。此二道相扶能通涅槃。審実不虛。即名道諦也。」(『大正蔵』46卷, 680b29-c9)

われることが多い。『法界次第』の中で、智顓も同様に四諦十六行を説明している。しかし、四諦十六行について、智顓は基本的な初期仏教の四諦十六行の意味に沿って解釈しており、智顓独自の考え方は見出されない。

また、智顓は四諦十六行について述べた後、四諦十六行を用いて生法二空を解釈しているが、そこでは智顓の考え方が見られる。つぎに、四諦十六行と生法二空の関係を考察する。

2、四諦十六行と生法二空の関係について

四諦十六行に関し、苦諦には無常・苦・空・無我という四つの意味があり⁴⁶、集諦には集・因・縁・生という四つの意味があり⁴⁷、滅諦には尽・滅・妙・離という四つの意味があり⁴⁸、道諦には道・正・跡・乗という四つの意味がある⁴⁹。生法二空とは、衆生空と法空ということである。

『法界次第』において、智顓は四諦十六行にあって、生法二空を弁別

⁴⁶ 『法界次第』「苦諦下四行。一無常行者、觀五受陰、因縁生、新新生滅。故無常也。二苦行者、觀五受陰、若無常即是苦、為無常之所逼也。三空行者、觀五受陰、一相異相無故、空即是空。四無我者、觀五受陰中、我我所法不可得故無相、是為無我行也。」(『大正藏』46卷, 680c23-c28)

⁴⁷ 『法界次第』「集諦下四行。一集行者、觀煩惱有漏累和合、能招苦果、故名集行。二因行者、觀六因生苦果、故名因行。三縁行者、觀四縁生苦果故名縁行。四生行者、還受後有五陰、故名生行。」(『大正藏』46卷, 680c29-681a3)

⁴⁸ 『法界次第』「滅諦下四行。一尽行者、觀涅槃種種苦尽故名尽。二滅行者、觀涅槃諸煩惱火滅故名滅。三妙行者、涅槃一切中第一故名妙。四出行者、觀涅槃離世間生死法故、名為出也。」(『大正藏』46卷, 681a4-a7)

⁴⁹ 『法界次第』「道諦下四行。一道行者、觀五不受陰・三十七品等道、能通至涅槃、名道。二正行者、觀五不受陰三十七品等道、非顛倒法故名正。三跡行者、觀三十七品等道、是一切聖人去處故名跡。四乘行者、觀三十七品等道、能運行人、必至三解脱、愛見等煩惱不能遮故名乘。」(『大正藏』46卷, 681a8-a13)

している。詳細的な内容は次の通りである。

次に四諦十六行、而も生法二空を弁ずれば、正に声聞の人を明かす。三蔵教門に通じて道に入ると云うと雖も、而も三蔵教門、既に二空の不同有り。故に知りぬ四諦十六行を修するとは、亦た応に別有るべし。是を以て毘曇は有を見て道を得。成実は空を証して聖を成す。此れ皆二空教門に約して、斯の異有るなり。今分別する為に、四諦十六行を修すること不同の故なり⁵⁰。

四諦十六行は、声聞に対して明らかにすることである。智顛の教相判釈の中では、声聞が三蔵教門の主体である。三蔵教門の声聞の二空は同様ではないから、四諦十六行を修することも異なっている。それゆえ、毘曇の人は四諦法を觀察して、「法有」をさとる。成実論の人は、四諦十六行の空行を觀察して衆生空をさとる、四諦十六行の無我行を觀察して法空をさとる⁵¹。

では、智顛は二空をどのように理解しているのだろうか。

⁵⁰ 『法界次第』「次四諦十六行而弁生法二空者。正明声聞之人。雖云通於三蔵教門入道。而三蔵教門。既有二空不同。故知修四諦十六行者。亦応有別。是以。毘曇見有得道。成実証空成聖。此皆約二空教門。有斯之異也。今為分別。修四諦十六行者不同故。」(『大正蔵』46卷, 681a16-a21)

⁵¹ 「毘曇見有得道」には、毘曇が小乗有宗を指している。毘曇の人は三世実有を主張している、一切法で性が有ることを提唱している。「有」は四諦法であり、毘曇の人が四諦法を修して四果聖位に入る。「成実証空成聖」には浄影慧遠の『大乘義章』によると、成実法の中に、衆生空が空ということであり、法体空が無我ということであり、衆生空を觀察することが空行ということであり、法空を觀察することが無我行である。(『大正蔵』44卷, 485b) また、吉蔵の『三論玄義』の中にも、成実の宗は「四諦建章、五聚明義」と記している。(『大正蔵』45卷, 3b) 智顛の著作で多くの場合は「毘曇見有得道。成実証空成聖」という説を批判している、これについての詳しく説明が見られない。

一には衆生空、若し生死の苦果を觀じて、但だ名色を見る。陰入界の実法、因縁に従り生じて新々に生滅す。是れ実法中の空なり。我・人・衆生・寿者等無し。十六知見は龜毛兎角の如く畢竟して不可得なり。是れを衆生空と為すなり⁵²。

二には法空、若し生死の苦果を觀じて、但だ我・人・衆生等に非ず。十六知見は空にして、龜毛兎角の如く不可得なり。是の中の名色・陰入界の異法、一一に分別して、推析して破壊し、乃至微塵刹那、分分に細かく檢す。皆悉く空無所有なるを、即ち法空と名づく。是れ声聞人の經に明かす法空相と為す。若し摩訶衍の中に法空を弁ずれば、諸法は夢幻の如く、本来自ら空なり。推析破壊を以てせざるが故に空なり⁵³。

智顛の衆生空では、生死の苦果を觀察して、名色を見ることのみが得られる。陰入界などの実法は、因縁生滅から生起してくるので、実法も空であり、我・人・衆生・寿者などの相もなくなる。実法に対して起こした十六知見は、龜毛兎角のように存在していないものと同じであるから、不可得である。

智顛の法空では、生死の苦果を觀察して、我・人・衆生・寿者などの

⁵² 『法界次第』「一衆生空。若觀生死苦果。但見名色。陰入界実法。從因縁生。新新生滅。是実法中空。無我人衆生寿者等。十六知見。如龜毛兎角畢竟不可得。是為衆生空也。」(『大正藏』46卷, 681a24-a27)

⁵³ 『法界次第』「二法空。若觀生死苦果。非但我人衆生等。十六知見空。如龜毛兎角不可得。是中名色陰入界異法。一一分別。推析破壊。乃至微塵刹那。分分細檢。皆悉空無所有。即名法空。是為声聞人經明法空相。若摩訶衍中弁法空者。諸法如夢幻。本来自空。不以推析破壊故空也。」(『大正藏』46卷, 681a28-b5)

相がないだけではなく、十六知見も空ということである。亀毛兔角のように存在していないものと同様に不可得である。また、名色・陰入界など異なる法を一々に分別して、微塵刹那の程度までに深く検討して、全て「空無所有」をさとする。これは、声聞の法空相である。

さらに、智顛は声聞の法空を述べ終わった後、大乘の法空に言及している。大乘の法空は、諸法が夢・幻であるように、本来は空の状態である。一々に分析しなくても、本来的に存在していないということである。

ここにおいて、智顛の衆生空は、名色・陰入界などの実法を觀察して、空ということを獲得する。智顛の法空は、名色・陰入界などの実法が本来よりそのまま空である⁵⁴。さらに、智顛は法空において、二乗と大乘の法空を明確に区分している。智顛には「析空觀」と「体空觀」という考えがある。「析空觀」は分析法から得られる空觀である。「体空觀」は、分析と推測という手段を使わずに、諸法がそのまま空の状態ということがわかる空觀である。『次第禪門』と『法界次第』の中には、いずれも「析空觀」と「体空觀」の用例はない。しかし、『法界次第』の法空において、二乗と大乘の法空の意味はそれぞれ「析空觀」と「体空觀」の意味に対応させることができる。すなわち、『法界次第』において智顛は、「析空觀」と「体空觀」という概念を立てていないが、「析空觀」と「体空觀」を意味する考えが完全にできている。これによって、智顛の大乘法空は、菩薩の「体空觀」と認められる。

⁵⁴ 『法華玄義』における七種二諦の実有二諦についている時、智顛が『大品般若經』「色を空ずると色は空である。以て俗を滅すが故に、謂く、空色と為す。色を滅せずの故に、謂く、色空と為す。病中に薬無し、文字中に菩提無し。」の經文に基づいて、名色・陰入界などの実法を俗諦と認めている。名色・陰入界などの実法が滅すことを真諦と認めている。(『大正蔵』33卷, 702c)

智顛の大乘法空である菩薩の「体空観」は、智顛の化法四教の中で、重要な役割を占めている。なぜなら、三蔵教以外の通教・別教・円教の教えは、すべて菩薩の「体空観」という前提条件を立てた後、展開した教えだからである。すなわち、菩薩の「体空観」がわからなければ、後の教・別教・円教の教えが語られない。

それでは、化法四教の四諦において、『法界次第』に沿ってさらに検討しよう。

3、四弘誓願における四諦

上記の四諦と四諦十六行は、声聞という修行者に対して説かれた四諦の教えである。今、菩薩・仏のための、四弘誓願に配当する四諦を説明する。この箇所では智顛は化法四教と四諦の関係を述べている。四弘誓願と関連づけながら菩薩の四諦を説くことは、『法界次第』の特徴ではなく、『次第禅門』の中で、智顛は同様に語っている。しかし、『次第禅門』より『法界次第』において、四諦と四弘誓願及び化法四教との関係が的確に説明されている。

・四諦と四弘誓願の関係

四弘誓願に四諦を配当することは、本来『菩薩瓔珞本業経』の教えである。この配当の仕方は、智顛以前の『大般涅槃経集解』の宝亮と、智顛後の吉蔵がいずれも自身の書物の中で扱っているため、本論の第一章で検討したように、当時の仏教学者たちが認めていたことと言える。そこで智顛はどのように考えているのであろうか。以下のように考察して

いく。

一に未だ度せざる者を度せしむ、此の弘誓は苦諦に縁りて起る。故に『瓔珞』に云く、未だ苦諦を度せざるものに苦諦を度せしむ。今苦を明かさば即ち是れ生死なり。生死に二種有り。一には分段生死なり。謂く六道の衆生稟ける所の陰入界身なり。果報既に粗なり。形質分段有るの成壊なり。二には変易生死なり。謂く羅漢辟支及び大力菩薩、三種の意生身なり。分段の粗報無しと雖も。猶お細微の因転果移有りて、変易生滅の所遷なり。若し一切未だ二種生死の苦を度せざれば、菩薩発心して、度を得せしめんと願う。故に未だ度せざる者を度せしむと云うなり⁵⁵。

第一の「未度者令度」という弘誓は、苦諦をめぐって起こした誓願である。『瓔珞経』に「未度苦諦令度苦諦」と説かれている。苦諦の苦は生死することを指している。生死には分段生死と変易生死という二種類がある。分段生死は六道衆生の生死である。六道衆生の生死状態は肉体（陰入身）を持ち、優れていない果報を持っている。変易生死は阿羅漢・辟支仏・大力菩薩のことである。阿羅漢・辟支仏・大力菩薩は、三種意生身を持ち、分段生死の優れていない果報はなくなったが、細微な因果及び変易の生滅法は破れていない。この二種類の生死の苦に対して、菩薩

⁵⁵ 『法界次第』「一未度者令度、此弘誓縁苦諦而起。故『瓔珞』云、未度苦諦令度苦諦。今明苦者即是生死也。生死有二種。一分段生死。謂六道衆生所稟陰入界身。果報既粗。有形質分段之成壊也。二変易生死。謂羅漢辟支及大力菩薩。三種意生身。雖無分段粗報。猶有細微因転果移。変易生滅之所遷也。若一切未度二種生死苦者、菩薩発心、願令得度故云未度者令度。」（『大正蔵』46巻, 685c5-c13）

は、「未度者令度」という誓願を起こす。

二に未だ解せざる者を解せしむ、此の弘誓は集諦に縁りて起る。故に『瓔珞經』に云く、未だ集諦を解せざるものに集諦を解せしむ。今集を明かさば即ち是れ煩惱の潤業なり。能く生死を招聚す。煩惱潤業に二種有り。一には四住地の煩惱なり。分段生死の業を潤わす。能く分段生死の苦果を招集するなり。二には無明住地の煩惱なり。変易生死の業を潤わせ、能く変易生死の苦果を招聚するなり。若し一切未だ此の二種の集を解せざれば、菩薩発心して、解を得せしめんと願う。故に未だ解せざる者を解せしむと云うなり⁵⁶。

第二の「未解者令解」という弘誓は、集諦をめぐって起こした誓願である。『瓔珞經』に「未解集諦令解集諦。」と説かれている。集諦の集は生死することを招き寄せる煩惱業である。煩惱業には四住地煩惱と無明住地煩惱という二種類がある。四住地煩惱は分段生死の苦果を招き寄せる煩惱業である。無明住地煩惱は変易生死の苦果を招き寄せる煩惱業である。この二種類の煩惱業に対して、菩薩は、「未解者令解」という誓願を起こす。

三に未だ安んぜざる者を安んぜしむ、此の弘誓は道諦に縁りて起る。故に『瓔珞』に云く、未だ道諦を安んぜざるものに道諦を安ん

⁵⁶ 『法界次第』「二未解者令解、此弘誓縁集諦而起。故『瓔珞經』云、未解集諦令解集諦。今明集者即是煩惱潤業。能招聚生死。煩惱潤業有二種。一四住地煩惱。潤分段生死業。能招集分段生死苦果也。二無明住地煩惱。潤變易生死業、能招聚變易生死苦果也。若一切未解此二種集者、菩薩發心、願令得解。故云未解者令解。」(『大正藏』46卷, 685c14-c21)

ぜしむ。今道諦を明かさば即ち是れ能く涅槃の正助道に通ずるなり。
二種の正助道有り。一には偏に真諦に縁りて、正助道を修するなり。
此の道は但だ小乗の尽苦の涅槃に至ること得。二には正しく中道実
相に縁りて、正助道を修するなり。此の道は能く大乘大般涅槃に到
るなり。若し一切未だ此の二種道に安んぜざれば、菩薩発心して、
安んずることを得せしめんと願う。故に未だ道を安んぜざる者を安
んぜしむと云うなり⁵⁷。

第三の「未安者令安」という弘誓は、道諦をめぐって起こした誓願で
ある。『瓔珞經』に「未安道諦令安道諦」と説かれている。道諦の道は涅
槃に至るためのものであり、修道方法である正道と助道ということであ
る。この正道と助道には、真諦を辺縁した正道と助道、中道実相を正縁
した正道と助道という二種類がある。真諦を辺縁した正道と助道によっ
て、苦しみがなくなる小乗（二乗）の涅槃に至ることができる。中道実
相を正縁した正道と助道によって、大乘の大般涅槃に至ることができる。
この二種類の正道と助道に対して、菩薩は、「未安道者令安」という誓願
を起こす。

四に未だ涅槃せざる者に涅槃を得せしむ、此の弘誓は滅諦に縁り
て起る。故に『瓔珞經』に云く、未だ滅諦を得ざるものに滅諦を得
せしむ。今滅諦を明かさば即ち是れ業煩惱の滅、生死苦果の滅なり。

⁵⁷ 『法界次第』「三未安者令安、此弘誓縁道諦而起。故『瓔珞經』云、未
安道諦令安道諦。今明即是能通涅槃之正助道也。有二種正助道。一偏縁
真諦、修正助道。此道但得至小乗尽苦涅槃。二正縁中道実相、修正助道。
此道能到大乘大般涅槃。若一切未安此二種道者、菩薩発心、願令得安。
故云未安道者令安也。」（『大正蔵』46巻, 685c22-c28）

二種の業煩惱生死有り。一には分段生死の業なり。四住地の煩惱滅すれば、則ち分段生死の苦果滅するなり。即ち二乗所得の滅諦なり。二には変易生死の業なり。無明住地の煩惱滅すれば、即ち変易生死の苦果滅するなり。諸仏及び大菩薩の所得の不共究竟の滅諦なり。若し一切未だ此の二種の滅諦を得されば、菩薩発心して、滅を得せしめんと願う。故に未だ涅槃を得ざる者に涅槃を得せしむと云うなり⁵⁸。

第四の「未涅槃者令得涅槃」という弘誓は、滅諦をめぐる起こした誓願である。『瓔珞經』に「未得滅諦令得滅諦。」と説かれている。滅諦の滅とは、煩惱業と生死の苦果がなくなることであり、二種類がある。第一は、二乗の滅諦であり、分段生死の業・四住地煩惱・分段生死の苦果がすべてなくなることである。第二は、諸仏と菩薩が所得する滅諦であり、二乗と同じではない滅諦である。この二種類の滅諦に対して、菩薩は、「未得涅槃者令得涅槃」という誓願を起こす。

ここで智顛は苦諦・集諦・道諦・滅諦という四諦に対して、小乗と大乘を区分しながら、説明している。苦諦と集諦において、智顛は生死である果から煩惱である因までの順番で述べている。道諦と滅諦において、智顛は修道方法である因から得られる涅槃である果まで述べている。菩薩は、このような四諦に沿って、四弘誓願を起こす。すなわち、四諦は

⁵⁸ 『法界次第』「四未涅槃者令得涅槃、此弘誓緣滅諦而起。故『瓔珞經』云、未得滅諦令得滅諦。今明滅諦者即是業煩惱滅、生死苦果滅也。有二種業煩惱生死。一分段生死業。四住地煩惱滅、則分段生死苦果滅。即二乗所得滅諦也。二變易生死業。無明住地煩惱滅、即變易生死苦果滅。諸仏及大菩薩所得不共究竟滅諦也。若一切未得此二種滅諦者、菩薩發心、願令得滅。故云未得涅槃者令得涅槃。」(『大正藏』46卷, 685c29-686a8)

菩薩が四弘誓願を起こす修行法門である。四弘誓願は菩薩が四諦を修する願心である。菩薩は四弘誓願を起こす時、四諦を具体的な法門として、菩薩の願行を支える。菩薩は四諦を修する時、四弘誓願を内在的な願心として、二乗の四諦と区別し、大乘涅槃の目的に導く。したがって、四諦と四弘誓願は、菩薩の大乘仏道への必要条件であり、相互に促進すれば、大乘の大般涅槃に行ける。

・ 四諦と化法四教の関係

同じ『法界次第』の四弘誓願において、智顛は初めて化法四教を扱って、二乗と菩薩の四諦を判別している。また、『法界次第』の文脈内容において、完全に蔵教・通教・別教・円教という化法四教を引き出す箇所は、四弘誓願における四諦のところしかない。その内容は次の通りである。

今の四種弘誓の所縁の四諦は、前に声聞中に四諦を明かすことと、半満の異なり有り。前は但だ半字の有作四聖諦を明かす。今は満字の無作四聖諦を明かす。所以に二種四聖諦を合して明かさば、菩薩の道は教門同じからず。若し是れ三蔵教通教の所明の弘誓なれば、但だ有作四聖諦に縁りて起る。若し是れ別教円教の所明の弘誓なれば、通じて有作無作二種の四聖諦に縁りて起る。故に弘誓に約して四諦を分別す。半満は前に異なるなり⁵⁹。

⁵⁹ 『法界次第』「今四種弘誓所縁四諦、与前声聞中明四諦、有半満異。前但明半字有作四聖諦。今明満字無作四聖諦。所以二種四聖諦合明者、菩薩之道教門不同。若是三蔵教通教所明弘誓、但縁有作四聖諦而起。若是別教円教所明弘誓、通縁有作無作二種四聖諦而起。故約弘誓分別四諦。

四諦に沿って起こした四弘誓願は、声聞に説いた四諦・四諦十六行と比較して、半字と満字の差異がある。前の声聞に説いた四諦・四諦十六行は、半字の有作四聖諦である。今、四弘誓願という願心を持っている四諦は、満字の無作四聖諦である。菩薩の四諦は、有作四諦と無作四諦を合せて明らかにすることである。判教の法門によって、四諦の半満の意味が異なっている。化法四教の三蔵教と通教が明かした四弘誓願によれば、有作四聖諦に関連して起こしたことである。化法四教の別教と円教が明かした四弘誓願によれば、有作と無作という二種の四聖諦に関連して起こしたことである。四弘誓願によって分別した四諦は、四諦・四諦十六行と半字と満字の異なりがある。

四諦・四諦十六行の箇所、智顛は二乗の四諦を示す以外、大乘菩薩の四諦を提示し、大乘四諦を修して得られた大乘涅槃までの話を言及したが、詳細に説明していない。ここで大乘菩薩の四諦にはついて詳しく説いている。

また、半字教と満字教は、『大般涅槃経』の教えであり、有作四聖諦と無作四聖諦は『勝鬘経』の教えである。智顛は『大般涅槃経』と『勝鬘経』の出典を出していないが、直接的に經典の教えを使用している。ここで智顛は三蔵教と通教の四諦を有作四諦に属している。別教と円教の四諦は有作と無作という二種四諦に属させている。これまでで智顛は初めて自身の教判思想によって四諦を説明している。化法四教に相応する四種四諦はまだできていない。しかし、ここで智顛は『勝鬘経』の二種四諦を受容して、自身の化法四教に対応させている。また、『法界次第』

半異於前也。」(『大正蔵』46巻, 686a8-a15)

の後の『四教義』では、智顛は部分的に『法界次第』の四諦説を保留しており、さらに新しい展開も見出される。以下、二例を取り上げて説明する。

第一例は、『四教義』にあり、『涅槃經』の半字教と満字教を使用している。『法界次第』と異なることは、『四教義』では半字教のみが三蔵教の教えであり、満字教は通教・別教・円教の三教の教えである。『法界次第』では、半字教は三蔵教と通教の教えであり、満字教は別教と円教の教えである。これによって、『法界次第』の智顛は二乗と菩薩の法を区別することが完全にできているが、菩薩法に対する分類がまだできていないことが推測される。

第二の例は、『勝鬘經』の四諦の採用である。『法界次第』において、智顛は三蔵教と通教の四諦を『勝鬘經』の有作四諦に属させている。『四教義』において、智顛は通教の無生四諦を説く時、自身の無生四諦が『勝鬘經』の有量四諦に相当すると言っている⁶⁰。元々『勝鬘經』の中に、「作聖諦とは有量四聖諦を説く」と語っている⁶¹。これによって、『法界次第』の時代、智顛は『勝鬘經』の有作と有量四諦を一種類の四諦と見做している。『四教義』の時、智顛は同様に『勝鬘經』の有作と有量四諦を一種類の四諦と見做しているが、『勝鬘經』の有作四諦を言及せず、有量四諦を自身の無生四諦に相当させた。

さらに、『法界次第』において、智顛は別教と円教の四諦をすべて『勝鬘經』の無作四諦に属させている。『四教義』において、智顛は円教の無作四諦を説く時、自身の無作四諦が『涅槃經』の一実諦と『勝鬘經』の

⁶⁰ 『四教義』における三蔵教の四諦は生滅四諦である。

⁶¹ 『勝鬘經』「何等為説二聖諦義。謂説作聖諦義、説無作聖諦義。説作聖諦義者、是説有量四聖諦。」(『大正蔵』12巻, 221b-b23)

無作四諦を合わせて成立すると言っている。元々『勝鬘經』の中で、「無作四聖諦をもって無量四聖諦を説く」と説かれている。これによって、『法界次第』の時代、智顛は別教と円教の四諦をすべて『勝鬘經』の無作四諦に属させており、『涅槃經』の無量四諦を完全に採用していない。『四教義』の時、智顛は『涅槃經』の無量四諦と一実諦の教えを完全に受容することができた。

第三節、小結

『法界次第』の「二種四諦」は、『次第禪門』と同様に小乗と大乘の四諦に区別されている。化法四教の使用は『法界次第』の「二種四諦」の新しい展開である。三蔵教・通教の四諦は有作四諦を名づけている。別教・円教の四諦は無作四諦を名づけている。有作四諦と無作四諦は、『勝鬘經』の教説である。したがって、『法界次第』の時期の智顛は、『勝鬘經』の四諦説を受容してから、自身の化法四教の四諦を判別している。後期時代の化法四教に相当する「四種四諦」は、『涅槃經』の四諦説を受容してから、「四種四諦」を成立させて、さらに、それぞれの化法四教に相応している。

つまり、四諦解釈については、前期時代の智顛は、まず小乗と大乘法を区分する考えの影響を受けて、小乗と大乘の四諦を分けている。さらに、『勝鬘經』の四諦説を受容した後、『勝鬘經』の四諦を持って、自身の化法四教に相応させている。この時代の智顛には『涅槃經』の四諦説を受け入れる点が見出せない。

また、『法界次第』に説かれた四諦・四諦十六行・四弘誓願の四諦解釈は、『勝鬘經』の經名を言っていないが、意味内容にあっては、『勝鬘經』

の教説が多く見られる。

第三章、『四教義』の「四種四諦」について

はじめに

天台智顛(538-597)の「四種四諦」説は、基本的に『勝鬘經』と『涅槃經』を根拠として「四種四諦」の教義を組織している⁶²。しかし、『勝鬘經』と『涅槃經』に説かれた四諦説は、四種類に分類されているわけではない。智顛が自身の「四種四諦」の考えを組織するに当たって『勝鬘經』と『涅槃經』とに依拠したのは何故であろうか。智顛以前、淨影慧遠(523-592)は『勝鬘經』によって「四種四諦」を立てている⁶³。前代の『涅槃經』注釈者たちは『涅槃經』によって四諦の意味を空と理解している。智顛はこれらの先蹤を踏まえ、『勝鬘經』と『涅槃經』にしたがって自身の「四種四諦」を形成するようになる。

本章は、『勝鬘經』と『涅槃經』に見られる四諦説に注目し、智顛がどのように両經に基づく自身の「四種四諦」を理解しているのか、という

⁶² 『四教義』卷二「有四種四諦。一生滅四諦、二無生四諦、三無量四諦、四無作四諦也。問曰：何處經論出此四種四諦。答曰：若散說諸經論趣緣處處有此文義、但不聚在一處耳。大涅槃經明慧聖行、欲為五味譬本。是以次第分別、明此四種四諦。勝鬘亦有四種四諦之文。所謂有作四諦、有量四諦、無作四諦、無量四諦。但涅槃勝鬘明無量四諦、詮次不同義意少異。」(『大正藏』46卷, 725b28-c7)『法華玄義』卷二下「四種四諦者。一生滅、二無生滅、三無量、四無作。其義出涅槃聖行品。」(『大正藏』33卷, 700c28-701a1)

⁶³ 淨影慧遠は、『大乘義章』の中で行ずることに約すれば、小乗の有作四諦と大乘の無作四諦があり、法に分別すれば、小乗の有量四諦と大乘の無量四諦があると述べている。(『大正藏』44卷, 515a)

問題を考察することを目的とする。

智顛の四諦解釈に関しては、すでにいくつかの先行研究において検討されてきた。例えば、鹽入（1964）は「四種四諦」の名称が『勝鬘經』から出ていると指摘している。さらに「四種四諦」の内容は『思益經』で説かれる天台の「四種四諦」に近いと指摘している⁶⁴。また、加藤（1990）は、智顛の「四種四諦」の教義内容が『涅槃經』の聖行品だけではなく、『思益經』や『中論』に説かれる四諦を拠り所にしてしているとする⁶⁵。斎藤（1991）は加藤の研究を踏まえて、『四教義』と『法華玄義』では、「四種四諦」という名称の典拠である『勝鬘經』の四諦の扱い方が違うと指摘している⁶⁶。

これまでの研究成果では、智顛自身の「四種四諦」の成立に与えた經典の影響について取り扱われているが、筆者はさらに、智顛自身が指摘した「四種四諦」の根拠である『勝鬘經』と『涅槃經』に見られる四諦説から、智顛がどのように両經を受容し、そして自身の「四種四諦」を形成しているかということについて検討していきたい。

智顛は『勝鬘經』と『涅槃經』の注釈書を書いてはいないが、両經を引用している。智顛は『勝鬘經』の四諦説を比較しながら、取り上げている。一方、智顛は、自分自身の「四種四諦」の所依としながら、『涅槃經』の四諦説を取り上げている。

以下、第1節では、『勝鬘經』の四諦説について、『勝鬘經』の經文に沿って、四諦の意味を考察する。第2節では、『涅槃經』の四諦説について考察するが、適宜智顛の四諦義に言及する。第3節では、『四教義』の

⁶⁴ 鹽入（1964）

⁶⁵ 加藤（1990）

⁶⁶ 斎藤（1991）

「四種四諦」を中心として、智顛がどのように両經の四諦義を理解しているかを明らかにする。

第一節、『勝鬘經』における四諦説の思想基盤

『勝鬘經』における四諦説に関する解説は、何箇所かあるが、基本的に如来蔵という課題のもとで説かれている。しかし、いずれも如来蔵の考えで四諦を説明しているが、如来蔵の功德によって、四諦についての説明の仕方は異なっている。基本的には三つの場面がある。第一に、如来蔵について説く前に、一乗思想に基づいて二乗が「聖義」を持っている四諦を説き、如来が「聖諦」を持っている四諦を説く（「一乗章」・「無辺聖諦章」・「如来蔵章」の内容）。第二に、如来蔵に対して、煩惱蔵があり、如来蔵と煩惱蔵によって、二種の四諦を説く（「法身章」の内容）⁶⁷。第三に、空如来蔵と不空如来蔵によって、四聖諦の中で滅諦だけ仏の第一義であることを説く（「空義隱覆真實章」・「一諦章」・「一依章」・「顛倒真實章」の内容）。

『勝鬘經』の「一乗章」は、一乗思想を前提に、二乗の涅槃を有余涅槃としている。二乗の涅槃は有余涅槃であるから、二乗が理解した四諦も完全な四諦ではない。これに対して、「一乗章」では完全な四諦もあることが指摘されている。『勝鬘經』の「一乗章」には、次のように説かれている。

阿羅漢、辟支仏、最後身菩薩は、無明住地の覆障する所と為るが

⁶⁷ 二種の四諦：作四諦と無作四諦。

故に、彼彼の法に於いて不知にして不覺なり。知見せざるを以ての故に、応に断すべき所をば、断ぜず究竟せず。断ぜざるを以ての故に、有余の過の解脱と名づく。一切の過を離れたる解脱には非ず、有余の清浄と名づく。一切の清浄に非ず、有余の功德を成就すと名づく。一切の功德には非ず。有余の解脱と、有余の清浄と、有余の功德とを成就するを以ての故に、有余の苦を知り、有余の集を断じ、有余の滅を証し、有余の道を修す。是れを少分の涅槃を得と名づく。少分の涅槃を得たる者は、涅槃界に向かうと名づく。若し一切の苦を知り、一切の集を断じ、一切の滅を証し、一切の道を修すれば、無常にて壞ある世間と、無常にて病ある世間とに於いて、常住の涅槃を得るなり。覆護無き世間と、依無き世間に於いて、護と為り、依と為る。何を以ての故にとならば、法に優劣無きが故に涅槃を得、智慧の等しきが故に涅槃を得、解脱の等しきが故に涅槃を得、清浄の等しきが故に涅槃を得るなり。是の故に、涅槃は一味にして等しき味なり、謂く解脱味なり⁶⁸。

ここで涅槃の観点から言えば、阿羅漢・辟支仏・最後身の菩薩は、無明住地の煩惱に覆われている。これらの三者が得た四諦は有余涅槃から得られる有余の四諦である。これらの三者が得た有余の四諦以外に完全

⁶⁸ 『勝鬘經』「阿羅漢、辟支仏、最後身菩薩、為無明住地之所覆障故、於彼彼法不知不覺。以不知見故、所應断者、不断不究竟。以不断故、名有余過解脱。非離一切過解脱、名有余清浄。非一切清浄、名成就有余功德。非一切功德。以成就有余解脱、有余清浄、有余功德故、知有余苦、断有余集、証有余滅、修有余道。是名得少分涅槃。得少分涅槃者、名向涅槃界。若知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道、於無常壞世間、無常病世間、得常住涅槃。於無覆護世間、無依世間、為護、為依。何以故、法無優劣故得涅槃、智慧等故得涅槃、解脱等故得涅槃、清浄等故得涅槃。是故、涅槃一味等味、謂解脱味。」(『大正藏』12卷, 220a25-220b12)

な四諦がある。すなわち、有余の四諦と完全な四諦という二種四諦が指摘されている。「無辺聖諦章」では、完全な四諦を目指そうとする、二乗の四諦は「聖義」と言えるが、「聖諦」と言えないとある⁶⁹。二乗の「聖義」を持っている四諦に対して、「聖諦」を持っている四諦は、如来が無明蔵世間に開現した四諦である。「聖諦」を持っている四諦は、「如来蔵章」によると、「如来は如来蔵の処に、聖諦の義を説く」ことである⁷⁰。

以上のように、如来が如来蔵のところから四諦を説くことは、「四聖諦」と言え、完全な四諦と言える。ここで「(如来)は如来蔵の処に、聖諦の義を説く」ということにしたがって、完全な四諦と不完全な四諦の二種の四諦があることを指摘している。さらに、如来蔵に対して、煩惱蔵があって、如来蔵と煩惱蔵の二面によって、二種の四諦を説く。

『勝鬘經』法身章で、仏は二種類の対象のため、二種四諦を説く⁷¹。第一に、無量煩惱蔵が所縛する如来蔵を疑惑しない対象のため、仏は作四諦を説く。第二に、無量煩惱蔵から出される法身に疑惑することがない対象のため、仏は無作四諦を説く。具体的に作四諦と無作四諦の説明は、次の通りである。

⁶⁹ 『勝鬘經』「初聖諦智、非究竟智、向阿耨多羅三藐三菩提智。世尊。聖義者、非一切声聞縁覚。声聞縁覚成就有量功德。声聞縁覚成就少分功德、故名之為聖。聖諦者。非声聞縁覚諦、亦非声聞縁覚功德。世尊。此諦如来応等正覚初始覚知。然後為無明蔵(殻)世間開現演説、是故名聖諦。」(『大正蔵』12卷, 221a29-211b7)

⁷⁰ 『勝鬘經』「聖諦者説甚深義、微細難知。非思量境界、是智者所知。一切世間所不能信、何以故。此説甚深如来之蔵。如来蔵者、是如来境界、非一切声聞縁覚所知。如来蔵処、説聖諦義。如来蔵処甚深故、説聖諦亦甚深。微細難知、非思量境界。是智者所知、一切世間所不能信。」(『大正蔵』12卷, 221b9-b15)

⁷¹ 『勝鬘經』「若於無量煩惱蔵所縛如来蔵、不疑惑者、於出無量煩惱蔵法身、亦無疑惑。於説如来蔵、如来法身不思議仏境界及方便説、心得決定者、此則信解説二聖諦。如是難知難解者、謂説二聖諦義。何等為説二聖諦義、謂説作聖諦義、説無作聖諦義。」(『大正蔵』12卷, 221b17-b22)

作の聖諦の義を説くとは、是れ有量の四聖諦を説くなり。何を以ての故にとならば、他に因りて、能く一切の苦を知り、一切の集を断じ、一切の滅を証し、一切の道を修するには非ず。是の故に、世尊、有為の生死と無為の生死と有り。涅槃も亦た是の如く、有余と及び無余とあり。無作の聖諦の義を説くとは、無量の四聖諦の義を説くなり。何を以ての故にとならば、能く自らの力を以て、一切の受の苦を知り、一切の受の集を断じ、一切の受の滅を証し、一切の受の滅の道を修す。是の如きの八聖諦、如来は四聖諦と説く。是の如きの四の無作の聖諦の義は、唯だ如来・応等正覚のみ、事として究竟せり、阿羅漢と辟支仏は事として究竟するには非ず、何を以ての故にとならば、下と中と上の法は、涅槃を得るに非ざればなり。何を以ての故にとならば、如来・応等正覚は、無作の四聖諦の義に於いて事として究竟せり。一切の如来・応等正覚を以て、一切の未来苦を知り、一切の煩惱上の煩惱を断じ、一切の集に摂受せられ、一切の意生身を滅し、一切苦を除いて滅を作証す。世尊、法を壊すに非ざるが故に、名づけて苦滅を為す。言う所の苦滅とは、無始・無作・無起・無尽・離尽・常住・自性清浄にして、一切の煩惱蔵を離れたるに名づく。世尊、恒沙を過ぎたる不離・不脱・不異・不思議なる仏法の成就するを、如来の法身と説く。世尊、是の如きの如来の法身は、煩惱蔵を離れざるを如来蔵と名づく⁷²。

⁷² 『勝鬘經』「説作聖諦義者、是説有量四聖諦。何以故、非因他、能知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道。是故、世尊、有有為生死無為生死。涅槃亦如是、有余及無余。説無作聖諦義者、説無量四聖諦義。何以故、能以自力、知一切受苦、断一切受集、証一切受滅、修一切受滅道。如是八聖諦、如來說四聖諦。如是四無作聖諦義、唯如来・応等正覚、事

作四諦とは、有量四聖諦を説くことである。有量四聖諦とは、阿羅漢・辟支仏・最後身の菩薩が知っている四聖諦である。なぜなら、不思議変易生死の意生身が残っている阿羅漢・辟支仏の涅槃は、有余涅槃であるので、「有量」だからである⁷³。無作四諦とは、無量四聖諦を説くことである。自身の力によって、受け取られた四聖諦は、「無量」である⁷⁴。無作四諦は、仏如来が如来蔵から究竟した四聖諦であり、阿羅漢辟支仏が究竟したものではないのである。これに対して、阿羅漢・辟支仏と最後身の菩薩は、仏に比べて、一切煩惱蔵を離れていないから、理解した作四諦以外に、無作四諦を理解していないのである。

一切煩惱蔵を離れてから如来法身があることにしたがって、如来蔵で理解している四諦は、一切の未来苦を知り（苦諦）、一切煩惱上の煩惱が摂受する一切集を断じ（集諦）、一切意生身を滅し（滅諦）、一切苦滅を除くことを証す（道諦）。如来蔵で理解している苦滅（滅諦）は、壊法の滅ではなく、一切煩惱蔵を離れて、不思議仏法を成就する如来法身ということである。後述の如来蔵の空智によれば、不思議仏法を成就する如

究竟、非阿羅漢辟支仏事究竟、何以故、非下中上法得涅槃。何以故、如来・応等正覚、於無作四聖諦義事究竟。以一切如来・応等正覚、知一切未来苦、断一切煩惱上煩惱、所摂受一切集、滅一切意生身、除一切苦滅作証。世尊、非壊法故、名為苦滅。所言苦滅者、名無始・無作・無起・無尽・離尽・常住・自性清浄、離一切煩惱蔵。世尊、過於恒沙不離・不脱・不異・不思議仏法成就、説如来法身。世尊、如是如来法身、不離煩惱蔵名如来蔵。」（『大正蔵』12巻, 221b23-221c11）

⁷³ 原文の「非因他、能知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道」の「因他」は、二乗が恐怖のため、仏の保護を求めるので、「因他」と言う。唐・菩提流志訳『大宝積経』で「由他護故、而不能得知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道」と訳していることと意味は同じである。

⁷⁴ 恐怖がない、保護を求めない心によって、四聖諦を理解することである。唐・菩提流志訳『大宝積経』に「能自護故、知一切苦、断一切集、証一切滅、修一切道。」とあると、意味が同じである。

来法身は不空如来蔵の特徴を持っている⁷⁵。

ここで注意すべきことは、一切煩惱蔵を離れて、不思議仏法を成就する如来法身の場合、無作四諦は仏の四諦の一部であり、完全な仏の四諦ではないということである。仏の四諦は何かという問題について、空如来蔵と不空如来蔵の二側面から論ずれば、四聖諦の中で滅諦だけが仏の第一義である。『勝鬘経』「空義隠覆真實章」は、次の通りである。

世尊、二種の如来蔵の空智有り。世尊、空なる如来蔵は、若し離、若し脱、若し異なる、一切の煩惱蔵なり。世尊、不空なる如来蔵は、恒沙を過ぐる、不離・不脱・不異・不思議の仏法なり。世尊、此の二空智は、諸の大声聞、能く如来を信ずることによる。一切の阿羅漢と辟支仏の空智は、四不顛倒の境界に於いて転ずるなり。是の故に、一切の阿羅漢と辟支仏は、本より見ざる所、本より得ざる所なり。一切の苦滅は、唯だ仏のみ証することを得。一切の煩惱蔵を壊し、一切の滅苦の道を修せり⁷⁶。

如来蔵の空智には二側面がある。第一に、一切の煩惱蔵を離れた空如来蔵である。第二に、恒沙より多くの不思議仏法を持っている不空如来

⁷⁵ 『勝鬘経』「法身章」で作と無作の四諦に説いている時、空と不空如来蔵には言及していないが、空と不空如来蔵について説いている「空義隠覆真實章」で恒沙より多くの不思議仏法を持っている不空如来蔵の意味と一致している。

⁷⁶ 『勝鬘経』「世尊、有二種如来蔵空智。世尊、空如来蔵、若離、若脱、若異、一切煩惱蔵。世尊、不空如来蔵、過於恒沙、不離・不脱・不異・不思議仏法。世尊、此二空智、諸大声聞、能信如来。一切阿羅漢辟支仏空智、於四不顛倒境界転。是故、一切阿羅漢辟支仏、本所不見、本所不得。一切苦滅、唯仏得証。壊一切煩惱蔵、修一切滅苦道。」(『大正蔵』12巻, 221c16-c23)

蔵である⁷⁷。二乗の空智は、凡夫と外道の常・楽・我・浄の四顛倒に対して、無常・苦・無我・不浄という四不顛倒に転化している。また、仏の常・楽・我・浄に対して、「本所不見、本所不得」ということになる。

如来は空如来蔵と不空如来蔵の智慧を持っている。一切の煩惱蔵を離れた空如来蔵においては、滅諦のみが仏の四諦（一切苦滅、唯仏得証、壊一切煩惱蔵）である。これに対して、二乗は如来蔵の二側面ある空智を持っていない。したがって、仏は二乗のため、如来蔵の二側面ある空智を指摘し、さらに、空如来蔵によって、滅諦のみが仏の四諦であることを示す。

以上によって、『勝鬘経』の四諦は、如来蔵の効能によって、作四諦（二乗の四諦）・無作四諦（不思議仏法を成就する如来法身である四諦）・第一義諦（滅諦のみ仏の四諦）の三種の四諦が見られる。

『勝鬘経』の無作四諦に対して、智顛は『四教義』で自身の無作四諦を説明する際、「『勝鬘経』に無作の四諦を明かす。一実の結成無し。『涅槃経』は無作と云わず、皆一実を用って四諦を結成す。義既に相関す。今両経を合して名を立つ。故に無作の四実諦と言うなり⁷⁸」と示している。さらに、智顛は『法華玄義』で『涅槃経』の第一義諦と実諦によって、自身の無作四諦の根拠とするが、『勝鬘経』の「滅諦のみが仏の第一義諦である」という考えを批判している。次に『涅槃経』の四諦説を検討する。

⁷⁷ 唐・菩提流志訳『大宝積経』に「不空如来蔵、具過恒沙仏解脱智不思議法。」とあることと、意味が同じである。

⁷⁸ 『大正蔵』46巻, 726a13-a15。

第二節、『涅槃經』における四諦説の思想基盤

智顛の「四種四諦」に、影響を与えた『涅槃經』の四諦説は、「聖行品」に散見されている。南本の『涅槃經』の「聖行品」は、「聖行品第十九之一」・「聖行品之二」・「聖行品之下」という三つに分かれている。智顛は、「聖行品之二」に基づいて自らの四諦説を組織した。そこで以下、「聖行品之二」の四諦説に注目して、『涅槃經』の四諦説について論じることにはしたい。

「聖行品之二」において、二つの面で四諦を説いている。第一に、凡夫・二乗・菩薩・仏に対して、それぞれに四諦を觀察した後、得た真理が異なることを示している。第二に、『涅槃經』で説かれる二種智によって、四諦の相が異なっている。まず、四諦を觀察する主体に対して、四諦の真理は何かということについて、『涅槃經』「聖行品之二」には、次のようにある。

諸の凡夫の人は苦有りて諦無く、声聞と縁覚は苦有り苦諦有りて、而も真実無し。諸の菩薩等は、苦を解して無苦なり。是の故に無苦にして、而も真諦有り。諸の凡夫の人は集有りて諦無し。声聞と縁覚は集有り集諦有り。諸の菩薩等は集を解して無集なり。是の故に無集にして、而も真諦有り。声聞と縁覚は滅有るも真に非ず。菩薩摩訶薩は滅有り真諦有り。声聞と縁覚は道有るも真に非ず。菩薩摩訶薩は道有り真諦有り⁷⁹。

⁷⁹ 『涅槃經』「諸凡夫人有苦無諦、声聞縁覚有苦有苦諦、而無真実。諸菩薩等、解苦無苦。是故無苦、而有真諦。諸凡夫人有集無諦。声聞縁覚有集有集諦。諸菩薩等解集無集。是故無集、而有真諦。声聞縁覚有滅非真。菩薩摩訶薩有滅有真諦。声聞縁覚有道非真。菩薩摩訶薩有道有真諦。」(『大

『涅槃經』における「苦諦」は、「苦」が苦しみということであり、「諦」が真理ということである⁸⁰。凡夫は苦しみだけを受け、苦しみの真理である「苦諦」を知らない。凡夫に対して、二乗は苦しみの真理である「苦諦」を知っている。しかし菩薩に対して、二乗は真実の「苦諦」を知らない⁸¹。凡夫・二乗に対して、菩薩は苦しみがなく、「苦諦」の真実が知られる。

『涅槃經』における「集諦」は「集」が「還りて有を愛するなり」ということである⁸²。凡夫は集があり、「集諦」の諦理を知らない。凡夫に対して、二乗は集があり、「集諦」の諦理も知っている。二乗に対して、菩薩は集がなく、「集諦」の真諦も知っている⁸³。

『涅槃經』における「滅諦」は、無漏果ということである⁸⁴。二乗には「滅諦」がある。菩薩に対して、二乗の「滅諦」は、無漏果であるが、真実の「滅諦」ではない。二乗に対して、菩薩の「滅諦」は真実を持っている。

正蔵』12巻, 441a11-a17。)

⁸⁰ 『涅槃經』の「苦諦」の「苦」は八苦ということで概説している。原文「復次、善男子。八相名苦、所謂生苦老苦病苦死苦愛別離苦怨憎会苦求不得苦五盛陰苦。能生如是八苦法者、是名為集。」(『大正蔵』12巻, 435a3-a5。)

⁸¹ 『涅槃經』の論理で二乗は、凡夫に比べて苦諦の真理があるが、菩薩に比べて、このような真理が真実の真理ではない。智顛は「諦」を空と理解している。二乗が理解した空は析空ということである。菩薩が理解した空は、体空ということである。

⁸² 『大正蔵』巻12, 440a22。

⁸³ 菩薩の愛(集)は、実諦ということである。なぜなら、菩薩は衆生のため、三有に生まれ、凡夫と同じな愛(集)ではない。(『大正蔵』12巻, 440a22。)

⁸⁴ 『涅槃經』「無漏果者則名為滅。」(『大正蔵』12巻, 435a2。)

『涅槃經』における「道諦」は、無漏因ということである⁸⁵。二乗には「道諦」がある。菩薩に対して、二乗の「道諦」は真実の「道諦」ではないが、菩薩の「道諦」は真実である。

二乗に対して、菩薩の「滅諦」と「道諦」の真実は何かということについて、『涅槃經』には以下のようにある。

善男子、云何が菩薩摩訶薩は、大乘大般涅槃に住して、滅を見、滅諦を見るや。所謂一切煩惱を断除するなり。若し煩惱断たば則ち名づけて常と為す。煩惱の火を滅せば則ち寂滅と名づく。煩惱滅するが故に、則ちに受樂を得。諸の仏菩薩は因縁を求むるが故に、故に名づけて淨と為す。更に復た二十五有を受けざるが故に、出世と名づく。出世を以ての故に、故に名づけて我と為す。常に色声香味触等、若しは男、若しは女、若しは生・住・滅、若しは苦、若しは樂、不苦不樂に於いて相貌を取らざるが故に、畢竟寂滅なる真諦と名づく。善男子よ、菩薩は是の如く大乘大般涅槃に住して滅聖諦を觀ずるなり。

善男子よ、云何が菩薩摩訶薩は、大乘大般涅槃に住して道聖諦を觀ずるや。善男子よ、譬えば闇中に燈に因りて麤細の物を得るが如し。菩薩摩訶薩は亦た復た是の如く、大乘大般涅槃に住して、八聖道に因りて一切法を見る、所謂常・無常、有為・無為、有衆生・非衆生、物・非物、苦・樂、我・無我、淨・不淨、煩惱・非煩惱、業・非業、実・不実、乘・非乘、知・無知、陀羅驪・非陀羅驪、求那・非求那、見・非見、色・非色、道・非道、解・非解なり。善男

⁸⁵ 『涅槃經』「無漏因者則名為道。」(『大正藏』12卷, 435a2。)

子よ、菩薩は是の如く大乘大般涅槃に住して道聖諦を觀ずるなり⁸⁶。

菩薩の眞實の「滅諦」は、大乘大般涅槃の教えによって、常（一切煩惱を断じること）・樂（煩惱がなくなった後、樂を得ること）・我（二十五有を受けず、出世することを我と名付く）・淨（諸仏・菩薩が因縁を求めることを淨と言う）ということである。相貌に執着しない畢竟寂滅ということである。

菩薩の眞實の「道諦」は、眞實の「道諦」を求めるため、一切法を常無常・苦樂・我無我・淨不淨というように見ず、これらの不二の相を觀察することである。

以上のように、『涅槃經』に見られる四諦説は、有漏と無漏によって、凡夫と二乗の四諦を区分している。眞實であるかどうかによって、二乗・菩薩・仏の四諦が異なる眞理を持っていると示される。二乗に対して、眞實である菩薩・仏の四諦は、『涅槃經』の独自展開であろう。智顛にとって、眞實である仏・菩薩の四諦は、智顛自身の無生・無量・無作という四諦に関わっている。

ところで、『涅槃經』は四諦の中に、二乗の中智と仏・菩薩の上智があ

⁸⁶ 『涅槃經』「善男子、云何菩薩摩訶薩、住於大乘大般涅槃、見滅、見滅諦。所謂断除一切煩惱。若煩惱断則名為常。滅煩惱火則名寂滅。煩惱滅故、則得受樂。諸仏菩薩求因縁故、故名為淨。更不復受二十五有故、名出世。以出世故、故名為我。常於色聲香味触等、若男、若女、若生・住・滅、若苦、若樂、不苦不樂不取相貌故、名畢竟寂滅眞諦。善男子、菩薩如是住於大乘大般涅槃觀滅聖諦。善男子、云何菩薩摩訶薩、住於大乘大般涅槃觀道聖諦。善男子、譬如闇中因燈得覓細之物。菩薩摩訶薩亦復如是、住於大乘大般涅槃、因八聖道見一切法、所謂常・無常、有為・無為、有衆生・非衆生、物・非物、苦・樂、我・無我、淨・不淨、煩惱・非煩惱、業・非業、實・不實、乘・非乘、知・無知、陀羅驪・非陀羅驪、求那・非求那、見・非見、色・非色、道・非道、解・非解。善男子、菩薩如是住於大乘大般涅槃觀道聖諦。」（『大正蔵』12卷, 441a18-441a27。）

ることが示される。仏・菩薩の上智には、四諦に対する無量の相が見られる。智顛は、この部分の『涅槃經』教説に基づいて、自分自身の無量四諦を説く。智顛の無量四諦を理解するために、以下、仏・菩薩の上智に観察される四諦が無量の相を持つことを『涅槃經』から検討する。

善男子よ、四聖諦を知るに二種の智有り、一には中、二には上なり。中とは声聞と縁覚の智なり。上とは、諸仏と菩薩の智なり⁸⁷。

善男子よ、世諦を知る者、是れを中智と名づく。世諦を分別するに無量無辺にして不可称計なり、諸の声聞と縁覚の知る所に非ず、是れを上智と名づく。是の如き等の義は、我れは彼の経に於いて亦た之を説かず。善男子よ、一切行無常、諸法無我、涅槃寂滅なるは、是れ第一義なり、是れを中智と名づく。第一義は無量無辺にして、不可称計なると知るは、諸の声聞と縁覚が知る所に非ず、是れを上智と名づく⁸⁸。

四諦における中智は、二乗の智慧であり、世諦を知ることである。四諦における上智は、仏・菩薩の智慧であり、世諦を分別して無量無辺の相があることが見られる。すなわち、四諦は無量の相を持っている。また、仏・菩薩の上智に対して、二乗の中智は、「一切行無常、諸法無我、

⁸⁷ 『涅槃經』「善男子、知四聖諦有二種智、一者中二者上。中者声聞縁覚智。上者、諸仏菩薩智。」(『大正蔵』12巻, 442b22-b24。)

⁸⁸ 『涅槃經』「善男子、知世諦者、是名中智。分別世諦無量無辺不可称計、非諸声聞縁覚所知、是名上智。如是等義、我於彼経亦不説之。善男子、一切行無常、諸法無我、涅槃寂滅、是第一義、是名中智。知第一義無量無辺、不可称計、非諸声聞縁覚所知、是名上智。」(『大正蔵』12巻, 442c29-443a5。)

涅槃寂滅」を第一義と考えている。仏・菩薩の上智は「第一義無量無辺不可称計」ということが知られる。

智顛の『四教義』の無量四諦は、「世諦を分別するに無量無辺にして不可称計なり、諸の声聞と縁覚の知る所に非ず」という説を採用して、自身の別教の無量四諦とする。この説を別教の無量四諦とする重要な理由は、智顛の別教の教えが単純な菩薩法であり、二乗が理解できない法だからである。この点から見れば、『涅槃経』の二乗が分からない「無量相の四諦」は、智顛自身の別教の無量四諦と一致している。

また上記の通り、仏・菩薩の上智は「第一義無量無辺不可称計」ということが知られる。仏・菩薩の上智が知られる第一義は何であろうか。智顛は仏・菩薩の上智が知られる第一義に関する『涅槃経』の文脈によって、自分自身の無作四諦の意味を引き出している。このため、以下『涅槃経』の経文に沿って、検討する。

① 世諦とは、即ち第一義諦なりと。世尊よ、若し爾らば則ち二諦無けん
と。仏言わく、善男子よ、善方便有りて、衆生に随順して二諦有りと
説くのみ。善男子よ、若し言説に随わば則ち二種有り、一には世法、
二には出世法なり。善男子よ、出世の人の知る所の如きは、第一義諦
と名づく。世人の知るは、名づけて世諦と為すなり。(中略) 善男子
よ、名有り実無しとは、即ち是れ世諦なり。名有りて実有りとは、是
れ第一義諦なり⁸⁹。

⁸⁹ 『涅槃経』「世諦者、即第一義諦。世尊、若爾者則無二諦。仏言、善男子、有善方便、随順衆生説有二諦。善男子、若随言説則有二種、一者世法、二者出世法。善男子、如出世人之所知者、名第一義諦。世人知者、名為世諦。(中略) 善男子、有名無実者、即是世諦。有名有実者、是第一義諦。」(『大正蔵』12巻, 443a11-a15。)

- ② 実諦とは、一道清浄にして、二有ること無きなり。善男子よ、常有り樂有り我有り浄有る。是れ則ち名づけて実諦の義と為すと。文殊師利は仏に白して言さく、世尊よ、若し真実を以て実諦と為さば、真実の法は即ち是れ如来・虚空・仏性ならん。若し是くの如しとせば、如来・虚空、及び仏性と差別有ること無けん。仏は文殊師利に告げたまわく、苦有り諦有り実有り。集有り諦有り実有り。滅有り諦有り実有り。道有り諦有り実有り。善男子よ、如来は苦に非ず諦に非ず、是れ実なり。虚空は苦に非ず諦に非ず、是れ実なり。仏性は苦に非ず諦に非ず、実なり⁹⁰。
- ③ 文殊師利よ、言う所の苦とは無常相と為し、是れ可断の相なり、是れ実諦と為す。如来の性は、苦に非ず無常に非ず可断の相に非ず、是の故に実と為す。虚空・仏性も亦た復た是の如し。復た次に善男子よ、言う所の集とは、能く五陰和合にして生ぜしむれば、亦た名づけて苦と為し、亦た無常と名づけ是れ可断相なり、是れを实諦と為す。善男子よ、如来は是れ集性なるに非ず是れ陰因なるに非ず可断の相に非ず、是の故に実と為す。虚空・仏性も亦た復た是の如し。善男子よ、言う所の滅とは煩惱滅と名づけ、亦た常・無常なり。二乗の所得を名づけて無常と曰い、諸仏の所得、是れ則ち常と名づけ、亦た証法と名づけ、是れを实諦と為す。善男子よ、如来の性は名づけて滅と為さず、能く煩惱を滅し、常・無常に非ざれば、証知と名づけず。常住にして無変

⁹⁰ 『涅槃経』「実諦者、一道清浄、無有二也。善男子、有常有樂有我有浄。是則名為実諦之義。文殊師利白仏言、世尊、若以真実為実諦者、真実之法即是如来・虚空・仏性。若如是者、如来・虚空、及与仏性無有差別。仏告文殊師利、有苦有諦有実。有集有諦有実。有滅有諦有実。有道有諦有実。善男子、如来非苦非諦、是実。虚空非苦非諦、是実。仏性非苦非諦、是実。」(『大正蔵』12卷, 443b25-c4。)

なり、是の故に実と為す。虚空・仏性も亦た復た是の如し。善男子よ、道とは、能く煩惱を断ち、亦た常・無常にして是れ可修の法なり、是れを実諦と名づく。如来は、道にして能く煩惱を断つに非ず、常・無常にして、可修の法に非ず、常住不変に非ず、是の故に実と為す。虚空・仏性も亦た復た是の如し⁹¹。

- ④ 復た次に善男子よ、真実と言うは、即ち是れ如来なり、如来とは、即ち是れ真実なり。真実とは即ち是れ虚空なり、虚空とは即ち是れ真実なり。真実とは即ち是れ仏性なり、仏性とは即ち是れ真実なり。文殊師利よ、苦有り苦因有り苦尽有苦対有り。如来は苦に非ず、乃至、対に非ず、是の故に実と為し、名づけて諦と為さず。虚空・仏性も亦た復た是の如し。苦とは、有為・有漏・無楽なり。如来は有為に非ず、有漏に非ず、湛然安楽なり。是れ実にして、諦に非ず⁹²。

①は、世諦がすなわち第一義諦ということである。仏は衆生のため、二諦を説く。出世人が知られることは第一義諦である。世人が知られる

⁹¹ 『涅槃經』「文殊師利、所言苦者為無常相、是可断相、是為実諦。如来之性、非苦非無常非可断相、是故為実。虚空・仏性亦復如是。復次善男子、所言集者、能令五陰和合而生、亦名為苦、亦名無常是可断相、是為実諦。善男子、如來非是集性非是陰因非可断相、是故為実。虚空仏性亦復如是。善男子、所言滅者名煩惱滅、亦常無常。二乘所得名曰無常、諸仏所得、是則名常、亦名証法、是為実諦。善男子、如来之性不名為滅、能滅煩惱、非常無常、不名証知、常住無變、是故為実。虚空・仏性亦復如是。善男子、道者、能断煩惱、亦常無常是可修法、是名実諦。如来、非道能断煩惱、非常無常、非可修法、常住不変、是故為実。虚空・仏性亦復如是。」(『大正蔵』12卷, 443c5-c19。)

⁹² 『涅槃經』「復次善男子、言真実者、即是如来、如来者、即是真実。真実者即是虚空、虚空者即是真実。真実者即是仏性、仏性者即是真実。文殊師利、有苦有苦因有苦尽有苦対。如来非苦、乃至、非対、是故為実、不名為諦。虚空・仏性亦復如是。苦者、有為・有漏・無楽。如来非有為、非有漏、湛然安楽。是実、非諦。」(『大正蔵』12卷, 443c 19-c25。)

ことは世諦である。世人の世諦は名があり、実がない。出世人の第一義諦は名があり、実もある。すなわち、第一義諦は実諦を持っている。

②は、実諦とは常楽我浄ということである。もし真実を実諦であると言えば、真実の法は如来・虚空・仏性である。菩薩の四諦で諦理と真実があることに對して、仏の真実は、如来が非苦非諦であり、虚空が非苦非諦であり、仏性が非苦非諦である。以上のように、仏の四諦は如来・虚空・仏性という概念に轉換した。

③は、二乗の四諦が「無常」を実諦とすることに對して、如来・虚空・仏性は、「常」を実諦とする。

④は、如来・虚空・仏性は、すべて真実ということである。二乗と菩薩の実諦に對して、仏の実諦は「楽」であり、二乗と菩薩の諦理ではない真実である。

智顛の無作四諦は上記の引用文を取り込んで理解されている。具体的引用箇所の『涅槃經』のどの内容を無作四諦とするのか、智顛は説明していない。しかし、智顛の『四教義』で四諦を仏性・如来蔵という教説に轉換することが見られる。

智顛は、『四教義』の中に、以上のような『勝鬘經』と『涅槃經』の四諦を把握して、「四種四諦」説を展開している。以下には、智顛がどのように両經を背景として自身の「四種四諦」を形成しているかを検討していきたい。

第三節、智顛における「四種四諦」説

智顛の後期著作の中に、「四種四諦」に関する文がよく見出される。その中、『四教義』と『法華玄義』は「四種四諦」について詳細に説明して

いる。『四教義』には、主に『勝鬘經』と『涅槃經』の四諦説によって、「四種四諦」が理解されている。『法華玄義』には、『涅槃經』の四諦説に基づいて、自身の「四種四諦」が表明されている。その『法華玄義』では、『勝鬘經』の四諦を用いずに論じていることが注目される⁹³。しかし、智顛の「四種四諦」については『勝鬘經』の四諦説を離れて議論することが難しい。なぜならば、智顛は『法界次第初門』で『勝鬘經』の有作四諦を藏教と通教の四諦と理解し、『勝鬘經』の有作と無作の二種四諦を別教と円教の四諦と理解しているからである⁹⁴。さらに、『四教義』で『勝鬘經』の無作四諦と『涅槃經』の実諦を合わせて、自身の無作四諦と解釈している⁹⁵。

以下、『四教義』巻第二の「四種四諦」を取り上げて、智顛がどのように両經によって自身の「四種四諦」を形成しているかを考察したい。

① 生滅四諦

初めに生滅四諦の理に約して、所詮を明かさば、即ち是れ因縁生滅にして以て諦理を明す。故に『法華經』に云く、昔波羅奈に於い

⁹³ 『法華玄義』「有師解。勝鬘無辺聖諦。(中略)雖唱四名但成二義。非今所用。」(『大正藏』33卷,700c18。)

⁹⁴ 『法界次第初門』「若是三藏教通教。所明弘誓。但緣有作四聖諦而起。若是別教円教。所明弘誓。通緣有作無作二種四聖諦而起。」(『大正藏』T46,686a12。)

⁹⁵ 『四教義』「四明無作四諦者、如涅槃經明、約一実諦而辨四諦、即是無作四実諦。明四実不作四、故名無作。觀四即得実故名四実諦也。涅槃經云、所言苦者、為無常相、是可断相。是為実諦如来之性。非苦、非無常、非可断相、是故為実。虚空仏性亦復如是。無作集滅道諦、在下当具引涅槃經。此文即無作四実諦之明説也。若能依經、解此四諦即一実諦。是為円教所詮之理。勝鬘經明無作四諦。無一実結成。涅槃經不云無作、皆用一実結成四諦。義既相関、今合兩經立名、故言無作四実諦也。」(『大正藏』46卷,726b5-b16。)

て四諦の法輪を転じ、分別して諸法五衆の生滅を説く。生滅は即ち是れ作を起す、故に『勝鬘經』に有作の四聖諦を明かすなり。言う所の四諦とは、一に苦諦、二に集諦、三に滅諦、四に道諦なり。言う所の苦とは、逼切を義と為す。無常の三相、色心を逼切す、故に名づけて苦と為す。審実にして虚ならず、之を名づけて諦と為す。言う所の集とは、招聚を義と為す。煩惱業合して、能く生死の苦果を招聚す、故に名づけて集と為す。審実にして虚ならず、之を名づけて諦と為す。言う所の滅とは、滅無を義と為す、子果二縛有ること無し、故に名づけて滅と為す。審実にして虚ならず、之を名づけて諦と為す。言う所の道とは、能通を義と為す、戒、定、智慧、能く通じて涅槃に至る、故に名づけて道と為す。審実にして虚ならず、之を名づけて諦と為す。此れは是れ生滅の四諦なり。故に『涅槃經』に云く、声聞に苦有り苦諦有り、集有り集諦有り、滅有り滅諦有り、道有り道諦有るなり⁹⁶。

② 無生四諦

二に無生四諦を明かすとは、『思益經』に云うが如し、苦の無生を知るを苦聖諦と名づけ、集の和合相無きを知るを集聖諦と名づけ、不二の相を以て観ずるを道聖諦と名づく。法は本より生せず、今は

⁹⁶『四教義』「初約生滅四諦之理。明所詮者、即是因縁生滅以明諦理。故法華經云、昔於波羅奈轉四諦法輪。分別説諸法五衆之生滅。生滅即是起作、故勝鬘經明有作四聖諦也。所言四諦者、一苦諦、二集諦、三滅諦、四道諦也。所言苦者、逼切為義。無常三相逼切色心、故名為苦。審実不虛、名之為諦。所言集者、招聚為義。煩惱業合、能招聚生死苦果、故名為集。審実不虛、名之為諦。所言滅者、滅無為義。無有子果二縛、故名為滅。審実不虛、名之為諦。所言道者、能通為義。戒定智慧、能通至涅槃、故名為道。審実不虛、名之為諦。此是生滅四諦。故涅槃經云、声聞有苦有苦諦。有集有集諦。有滅有滅諦、有道有道諦也。」(『大正藏』46卷, 725 c14-c27)

即ち滅無し、是れを滅聖諦と名づく。即ち苦集滅道の四法は、名字事相は是れ同じなるも、而れども諦の義に異なり有り。前は生滅の理を以て諦と為し、今は不生不滅の真空の理を明かして諦と為す。亦た四真諦と名づくるなり。故に『涅槃經』に云く、菩薩は苦を解して苦無し、是の故に苦無くして真諦有り。集を解して集無し、是の故に集無くして真諦有り。滅有り真有り道有り真有り。故に四真諦と名づくるなり。三乗は共に觀じて第一義を得、二種の涅槃を証す。亦た是の『勝鬘經』に有量の四諦を明かすなり⁹⁷。

③ 無量四諦

三に無量四聖諦を明かすとは、『大涅槃經』に説くが如し、諸陰の苦を知るを名づけて苦諦と為す。諸陰に無量の相有りて悉く是れ諸苦なりと分別す、是れを無量の苦諦、無量の集滅道と名づく。至下に當に經文を具出すべし。是の如き四諦の理は、『涅槃經』に云く、悉く声聞緣覺の知る所に非ず⁹⁸。

④ 無作四諦

四に無作四諦を明さば、『涅槃經』に明かすが如し、一実諦に約して四諦を辨ず、即ち是れ無作の四実諦なり。四実を明すも四と作らず、故に無作と名づく。四を觀じて即ち実を得、故に四実諦と名づ

⁹⁷『四教義』「二明無生四諦者。如思益經云、知苦無生名苦聖諦、知集無和合相名集聖諦、以不二相觀名道聖諦。法本不生、今即無滅、是名滅聖諦。即苦集滅道四法、名字事相是同、而諦義有異。前以生滅之理為諦、今明不生不滅真空之理為諦。亦名四真諦也。故涅槃經云、菩薩解苦無苦、是故無苦而有真諦。解集無集、是故無集而有真諦。有滅有真有道有真、故名四真諦也。三乘共觀得第一義、証二種涅槃。亦是勝鬘經明有量四諦也。」(『大正藏』46卷, 726a5-a15)

⁹⁸『四教義』「三明無量四聖諦者、如大涅槃經説、知諸陰苦名為苦諦、分別諸陰有無量相悉是諸苦、是名無量苦諦。無量集滅道、至下自當具出經文。如是四諦之理、涅槃經云、悉非声聞緣覺所知。」(『大正藏』46卷, 726a21-a25)

くるなり。『涅槃經』に云く、言う所の苦とは、無常の相と為し、是れ可断の相なり。是れを実諦の如来の性と為す。苦に非ず、無常に非ず、可断相に非ず、是の故に実と為す。虚空仏性も亦た復た是くの如し。無作の集滅道諦は、下に在りて当に『涅槃經』を具引すべし。此の文は即ち無作四実諦の明説なり。若し能く經に依り、此の四諦は、即ち一実諦なりと解すれば、是れを円教所詮の理と為す。

『勝鬘經』に無作の四諦を明かすも一実の結成無し。『涅槃經』は無作と云わず、皆一実を用って四諦を結成す。義既に相関す。今両經を合して名を立つ。故に無作の四実諦と言うなり⁹⁹。

『四教義』における「四種四諦」の解釈では、智顛は四種において『涅槃經』の經文を引用している。また、無量四諦以外の生滅四諦・無生四諦・無作四諦について述べる際には、『勝鬘經』の經文を引用している。さらに、智顛は『勝鬘經』の有作四諦を自身の生滅四諦に対応させ、『勝鬘經』の有量四諦を自身の無生四諦に対応させ、『勝鬘經』の無作四諦と『涅槃經』の一実諦を合わせて取り上げ、自身の無作四諦の意味に配当する。『四教義』に、智顛は『勝鬘經』の四諦の名称だけ取り上げて、自身の「四種四諦」に配当した説明をしている。『四教義』で『勝鬘經』の有作四諦と有量四諦は、智顛自身の生滅四諦と無生四諦に関係すること

⁹⁹『四教義』「四明無作四諦者、如涅槃經明、約一実諦而辨四諦、即是無作四実諦。明四実不作四故名無作。觀四即得実、故名四実諦也。涅槃經云、所言苦者、為無常相、是可断相。是為実諦如来之性。非苦、非無常、非可断相、是故為実。虚空仏性亦復如是。無作集滅道諦、在下当具引涅槃經。此文即無作四実諦之明説也。若能依經、解此四諦、即一実諦、是為円教所詮之理。勝鬘經明無作四諦、無一実結成。涅槃經不云無作、皆用一実結成四諦。義既相関。今合両經立名。故言無作四実諦也。」(『大正藏』46卷, 726b5-b16)

が説明されていない¹⁰⁰。しかし、智顛は『勝鬘經』の如来蔵を『涅槃經』の仏性と同じように理解している。『勝鬘經』では、如来蔵によって無量四諦があるとされている。『涅槃經』では、仏性を理解している仏・菩薩は無量相の四諦が見られる。これにしたがって、『勝鬘經』の無量四諦と『涅槃經』の「無量相の四諦」、及び智顛自身の無量四諦は、同様に如来蔵・仏性を認識できる。『四教義』で智顛は問答の形で次の通り説明している。

問うて曰く、若し爾らば、『涅槃經』に四諦の無量相を明す。何んぞ定めて是れ別教所詮の無量の四諦と知ることを得るや。

答えて曰く、若し仏性を明かさずして無量を説かば、即ち是れ前の二教所詮の無量なり。若し仏性を明して無量の相を説かば、即ち任運に自ら成じ、後の両教の明す所の無量なり。若し円教も亦た無量の四聖諦と名づくるとは、即ち是れ無作の四実諦の異名なり¹⁰¹。

設問は次のとおりである。

もし『涅槃經』は「四諦無量相」を明らかにするのであれば、いかに、別教で説かれる無量四諦のことであると明確に知ることができるであろうか。

智顛の返答は、次の通りである。

¹⁰⁰ 『勝鬘經』の有作四諦と有量四諦は、三界外の二乗と最後身菩薩が知っている四諦である。智顛の生滅四諦と無生四諦は、三界内の二乗と菩薩の四諦である。

¹⁰¹ 『四教義』「問曰、若爾涅槃經明四諦無量相。何得定知是別教所詮無量四諦。答曰、若不明仏性而説無量、即是前二教所詮之無量也。若明仏性説無量相者、即任運自成、後兩教所明無量也。若円教亦名無量四聖諦者、即是無作四実諦之異名也。」(『大正蔵』46巻, 726a28-b4)

もし仏性ということ明かさずに、無量であると説けば、これは前の二教に説かれる無量である。もし仏性ということ明かして、無量ということ説けば、これは後の二教に説かれる無量である。もし円教を無量四諦と名づければ、すなわち、これは無作四諦の異名である。

以上のように、智顛は『涅槃經』の仏性ということによって、無量四諦を定義する。智顛の無量四諦では、如来蔵と仏性が見えることは、重要である。さらに、元々智顛の「四種四諦」において、円教の四諦は無作四諦であるが、何故ここで智顛は円教の無量四諦を言及しているのだろうか。次の問答で智顛の考え方をみよう。

問うて曰く、『勝鬘經』に無量の四聖諦、無作の四聖諦を明す。『涅槃經』も亦た是の説有り。二処の經文は、同じと為すや異なると為すや。

答えて曰く、無量の四聖諦有り、蔵識に依ると雖も無作に非ず。無量の四聖諦有り、亦た蔵識に依り即ち是れ無作なり。所以は何ん、若し無明恒沙に約さば、四諦の法事、数論は無量なり。即ち是れ別教所詮の無量にして無作に非ず。若し法性に約して四諦の無量を明かさば、即ち是れ円教所詮の無量なり。無量は即ち無作なり。『大涅槃經』に迦葉に答えて、無量の四諦を明かさば、正しく事数無量に約す。此れ別教の所詮なり。若し文殊に答えて四諦を明かさば、即ち是れ無作の四実諦を明かすなり。『勝鬘經』に二種四諦を明かすは、一異未だ定めて判ずべからず¹⁰²。

¹⁰²『四教義』「問曰、勝鬘經明無量四聖諦、無作四聖諦。涅槃經亦有是説。二処經文、為同為異耶。答曰、有無量四聖諦、雖依蔵識非無作。有無量四聖諦、亦依蔵識即是無作。所以者何、若約無明恒沙四諦法事、数論無量。即是別教所詮無量非無作。若約法性明四諦無量、即是円教所詮無量。

設問は、次の通りである。

『勝鬘經』の中に、無量四諦と無作四諦を明かしており、『涅槃經』にも同様の説がある。両經の文は同じかどうかということである。

智顛の返答は、次の通りである。

如来蔵によって、無作四諦と無量四諦がある。無明恒沙の煩惱という点によって、四諦を論じると、無量四諦である。これは別教の無量四諦であり、無作四諦ではない。法性によって、四諦を明かすことは、円教の無量四諦である。法性から明かした円教の無量四諦は、無作四諦と言える。『涅槃經』において、仏の迦葉への返答は、四諦の「正しく事数無量に約す」に対して、別教の無量四諦を明かしている。仏の文殊への返答は、無作四実諦であり、すなわち円教の無作四諦である。

智顛の理解は、『涅槃經』の中、如来蔵によって無作四諦と無量四諦があり、無明煩惱によって四諦を明かす無量四諦は、別教の無量四諦である。法性によって、四諦を明かす無量四諦は、円教の無作四諦である。こうして、智顛は『涅槃經』の無量四諦を二種の四諦と理解している。『涅槃經』で文殊菩薩に答えた無量四諦は智顛が考えている無作四諦である。智顛は『勝鬘經』の無作四諦を自身の無作四諦とはしていない。

智顛は『勝鬘經』の無作四諦に対して、その四諦の部分的な意味を取り上げて、自身の無作四諦に相当させる。言い換えれば、『勝鬘經』の無作四諦は、完全に、智顛自身の無作四諦を顕すには不十分と言える。『四教義』に、智顛は『勝鬘經』の無作四諦の意味を用いていたが、智顛自

無量即無作也。大涅槃經答迦葉、明無量四諦、正約事数無量、此別教所詮也。若答文殊明四諦、即是明無作四実諦也。勝鬘經明二種四諦、一異未可定判。」(『大正蔵』46卷, 726b16-b26)

身の無作四諦としては理解し難い。

『四教義』を智顛が著した時代に、智顛の教相判釈が円融に完成した頃であり、化法四教の藏教・通教・別教・円教の教理を完成させるため、「四種四諦」を創立させたことが分かる。『涅槃経』の経文は智顛の「四種四諦」の意味に対応している。また、「四種四諦」の名称は『勝鬘経』の四諦を参照していると言える。しかし、『勝鬘経』の四諦は智顛の「四種四諦」に完全に当て嵌めることができず、『勝鬘経』の中に、智顛の「四種四諦」に相当する経文もない。そのため、智顛は『勝鬘経』と『涅槃経』の両経の四諦説を取り入れて自身の「四種四諦」としている。

第四節、小結

『勝鬘経』の四諦説は、如来藏思想の上で二乗・最後身の菩薩・仏の四諦を区分している。二乗・最後身の菩薩の四諦は、有作と有量四諦である。仏の四諦は、二面がある。一面は空如来藏が究竟した無作四諦である。一面は不空如来藏が顕した無量四諦である。

『涅槃経』の四諦説は、仏性思想の上で凡夫・二乗・菩薩・仏の四諦を区分している。凡夫は有漏の苦と集があり、諦理がない。二乗の四諦は有漏の苦諦と集諦があり、無漏の滅諦と道諦があり、仏・菩薩の真実がない。菩薩の四諦は、有漏の苦と集がなくなった、無漏の滅諦と道諦があり、諦理と真実もある。仏の四諦は、常楽我浄である仏性を意味する。

結論すると、智顛は『勝鬘経』の四諦説を理解した上で、『涅槃経』の仏性思想の四諦説を受けて自身の「四種四諦」を形成している。

智顛の生滅と無生四諦は、『勝鬘経』の有作と有量四諦に相応し、『涅槃経』の二乗と菩薩の四諦に相応していると理解できる。

『勝鬘經』は如来藏思想にしたがって、無作四諦と無量四諦を一種四諦と認めている。『涅槃經』では、二乗の中智は無量の相がある四諦としていないが、仏・菩薩の上智については、言及している。智顛は『勝鬘經』の無作・無量四諦と『涅槃經』の無量四諦をすべて自身の無量四諦にまとめている。智顛の無作四諦は『勝鬘經』の無作四諦を用いずに、『涅槃經』の仏性の立場から説かれた四諦を採用して、自身の無作四諦とする。

『勝鬘經』には、智顛の「四種四諦」に相応する経文が見られない。また『涅槃經』の中には、「四種四諦」の名称が見られない。そこで智顛は『四教義』において、『涅槃經』と『勝鬘經』の両經を用いて、自身の「四種四諦」を説明している。つまり、『四教義』では、『勝鬘經』の四諦の名称を取り上げて、藏教・通教・別教・円教の四教が所詮する四諦を説明している。このように、智顛は自身の「四種四諦」を創出したと言えよう。

第四章、『涅槃經集解』と天台智顛の四諦解釈

はじめに

智顛（583-597）は「四種四諦」を『涅槃經』「聖行品」の四諦説に基づいて解釈している。智顛にとって、「四種四諦」は『涅槃經』と関係の深い教学であった。しかし、智顛以前から『涅槃經』の研究は盛んになされており、智顛がそれらの思潮から影響を受けたかどうかについて疑問を持っている。そして、智顛に先立つ『涅槃經』研究の一端を知ることができる『涅槃經集解』を取り上げ、『涅槃經集解』の解釈を智顛のものと比較検討する。具体的には、『涅槃經』「聖行品」の四諦に対する『涅槃經集解』に収められた諸師の説と智顛の解釈との同異を確認したい。これによって、智顛の「四種四諦」説の特徴が明らかになるであろう。

本稿では、最初に『涅槃經』「聖行品」の四諦を参照しながら、『涅槃經集解』を用いて天台智顛以前の諸師の解釈を含めて考察する。そして、『法華玄義』の「四種四諦」の取り扱いを確認する。最後に『涅槃經集解』に収められた諸師の説と智顛の解釈を比較しながら、智顛の「四種四諦」説の特徴を検討していく。

第一節、『涅槃經』「聖行品」と『涅槃經集解』「聖行品」における四諦の解釈

本論の第三章では『涅槃經』「聖行品」の四諦を検討した。しかしなが

ら、諸師はさまざまな視点から『涅槃経』「聖行品」の四諦を説明している。四諦という問題を明確に理解するため、異なる角度から検討する。

まず、『涅槃経』「聖行品」の四諦は次のように示される。

復た次に迦葉。又た聖行有り。所謂る四聖諦、苦・集・滅・道なり。迦葉。苦は逼迫の相。集は能く生長する相。滅は寂滅の相。道は大乗の相なり。復た次に善男子。苦は現相なり。集は転相なり。滅は除相なり。道は能除の相なり。復た次に善男子。苦は三相有り。苦苦相・行苦相・壊苦相なり。集は二十五有り。滅は二十五有を滅するなり。道は戒・定・慧を修するなり¹⁰³。

まず苦・集・滅・道の四聖諦という「聖行」を示し、苦・集・滅・道のそれぞれの特徴を定義する。ここにおいて、「道とは大乗の相なり」というように、『涅槃経』は四諦を独自に展開している。つまり、『涅槃経』の四諦は初転法輪から説かれる四諦に基づきつつ、異なる意味を持たせているのである。

さらに、『涅槃経』の四諦について説明している重要な箇所を参照する。

諸の凡夫の人は苦有りて諦無く、声聞・縁覚は苦有り苦諦有りて真実無し。諸の菩薩等は苦を無苦なりと解す、是の故に苦無くして而も真諦有り。諸の凡夫の人は集有りて諦無く、声聞・縁覚は集有

¹⁰³ 『涅槃経』「復次迦葉。又有聖行。所謂四聖諦苦集滅道。迦葉。苦者逼迫相。集者能生長相。滅者寂滅相。道者大乘相。復次善男子。苦者現相。集者転相。滅者除相。道者能除相。復次善男子。苦者有三相。苦苦相行苦相壊苦相。集者二十五有。滅者滅二十五有。道者修戒定慧。」(『大正蔵』12巻, 676b8-b14)

りて集諦有り。諸の菩薩等は集を無集なりと解す、是の故に集無くして而も真諦有り。声聞・縁覚は滅有るも真に非らず。菩薩摩訶薩は滅有り真諦有り。声聞・縁覚は道有るも真に非らず。菩薩摩訶薩は道有り真諦有り¹⁰⁴。

凡夫の人は苦と集のみ持っており、四諦の諦理と真実を持っていない。しかし、声聞・縁覚は苦・苦諦と集・集諦を持つのに対して、菩薩は苦・集を持たず四諦の真諦を持っている。滅・道に関しては、声聞・縁覚にも、滅・道はあるが真実ではない。それに対して、菩薩は滅・道を持ち、真実を持つとされる。

ここで『涅槃經』の四諦の特徴は「真諦」と「真実」という語を用いて、凡夫、声聞・縁覚、菩薩の四諦の意味深淺を区別している。「真諦」は、凡夫には分からず、二乗はわかっている。「真実」は二乗にはわからず、菩薩はわかっている。

この箇所については、『涅槃經集解』に僧亮と宝亮の解釈が示されている。

まずに僧亮の解釈は以下の通りである。

案ずるに僧亮曰く、觀を不同と為す。而るに昔の苦集を説くに、唯だ三人有り。論に因れば四人の觀の差別有り。次を語るに之に及ぶなり。菩薩、能く苦を觀じ、愛無上八患を觀ず。論に因れば人を

¹⁰⁴ 『涅槃經』「諸凡夫人有苦無諦。声聞・縁覚有苦有苦諦而無真実。諸菩薩等解苦無苦。是故無苦而有真諦。諸凡夫人有集無諦。声聞・縁覚有集有集諦。諸菩薩等解集無集。是故無集而有真諦。声聞・縁覚有滅非真。菩薩摩訶薩有滅有真諦。声聞・縁覚有道非真。菩薩摩訶薩有道有真諦」(『大正藏』12卷, 682c7-c14)

観じて差別す。顛倒を以って苦と為す。三人、皆、倒る。苦有るなり。苦を見るを以って諦と名づく。三人、皆、苦を見るが故に諦有るなり。下、須く之を跋む。欲界の無常を観ずること病の如くにして色界に出づるを得。是、凡夫の見苦なり。三人、仏に於いて苦有りと倒するを以っての故に、諦に於いて真に称うことを得ざるなり。「苦を解く」とは生死なり。「苦無きこと」とは涅槃なり。二に於いて倒れず。是を「苦無く而も真諦有り」と謂う。苦は麤、集は細なり。凡夫は集を見ざるが故に「無諦」なり。「集諦有り」とは、仏に於いて倒有ることなり。変易の苦を受けるが故に是、集なり。分段の因を識るが故に「有諦」なり。上、但だ凡夫の是れ集を言い、変易之苦を説かざるなり¹⁰⁵。

僧亮の解釈によれば、苦の意味は顛倒であり、凡夫・声聞・縁覚は皆、顛倒している。対して、菩薩に苦は無い。苦を見ることが苦諦である。声聞・縁覚・菩薩は苦を見るから「有諦」である。ただし、凡夫・声聞・縁覚は「仏に苦がある」という顛倒があるから、諦は「真」ではない。「真」を持つのは菩薩だけである。

集諦に関しても同様である。声聞、縁覚は分段生死¹⁰⁶の原因を知ると

¹⁰⁵ 『集解』「案僧亮曰、為観不同。而説昔之苦集、唯有三人。因論四人観有差別。語次及之也。菩薩、能観苦観、愛無上八患。因論観人差別、以顛倒為苦。三人、皆、倒。「有苦」也。以見苦名諦。三人、皆、見苦故「有諦」也。下、須跋之。観欲界無常如病得出色界。是、凡夫見苦也。以三人、於仏有苦倒故、於諦不得称真也。「解苦」者生死也。「無苦」者涅槃也。於二不倒。是謂「無苦而有真諦」。苦粗、集細。凡夫不見集故、「無諦」也。「有集諦」者、於仏有倒。受變易之苦故是、集也。識分段因故「有諦」也。上、但言凡夫是集、不説變易之苦也。」(『大正藏』37卷, 484c11-c22)

¹⁰⁶ 分段生死：身体とその寿命とに分段（限界）がある生死であり、『勝鬘經』によると、三界内の生死状態である。変易生死：分段生死に対す

いう点で「諦が有る」と言えるものの、やはり仏に対して顛倒があるので「真諦がある」とはいえず、「集諦がある」と説かれる。つまり、僧亮は、仏に対する顛倒がない完全な諦を「真諦」とであると解釈する。

次に宝亮の解釈を確認する。

宝亮曰わく、上に既に苦集諦を説き竟りぬ。今、且に諦用を結成す。諦用を成ぜずとは、凡夫の識を課するに、而るに離過に非ず。「凡夫の人、苦有り諦無く」と云うは、凡愚は但だ粗く逼惱事の苦を知るのみにして、苦の所以を諦解せず。故に諦用無し。二乗の「有苦諦」とは、逼惱事の苦有り。苦因を解除すること粗からざるに非ず、所以に諦用有りと言うことを得るなり。「無真実」とは、仏に苦無きことを知らず、仏に合して苦観を作すに由るが故に「無真実」なり。「諸菩薩解苦無苦」とは、昔日、苦・無苦を性空なると解す。今日、金剛を解すを以て苦有るに還り、仏果は是れ苦無きことを解す¹⁰⁷。

宝亮は、「諦用」の語を用いて解釈するが、「真諦」や「真実」と言うことに関して、概ね僧亮と同じ解釈をしていると考えられる。諦用を完成していない凡夫は苦だけあって諦がない。そして、苦がどのようなものかを漠然と知るが、苦の原因を詳細に理解していないので、諦用がな

る生死であり、『勝鬘經』によると、三界外の大阿羅漢と意生身菩薩の生死状態である。

¹⁰⁷ 『集解』「宝亮曰、上既説苦集諦竟。今且結成諦用。不成諦用者、課凡夫識非而離過。云「凡夫人有苦無諦」者。凡愚但粗知逼惱事苦。不諦解苦之所以。故無諦用也。二乗有苦諦者。有逼惱事苦。非不粗解除於苦因、所以得言有諦用也。「無真実」者。不知仏無苦。由合仏作苦観。故無真実也。「諸菩薩解苦無苦」者。昔日解苦無苦性空。今日解金剛以還有苦。仏果は無苦。」（『大正蔵』37巻, 484c22-485a1）

い。声聞・縁覚という二乗は、苦の原因を詳しく知っているので、諦用を備える。しかし、仏に苦がないことを知らずに、仏に対して苦があるという観念をなすことから、真実がないという。菩薩は、かつて苦が性空であることを理解し、今、仏は果として苦がないと知る。つまり、宝亮も僧亮と同様に、「仏に苦がある」というような顛倒がない菩薩の「真実」であると解釈する。

では、四諦の「真実」を理解するとはどういうことか。『大般涅槃經』には以下のように説かれる。

善男子、復た中に入ると雖も、猶お説と名づけず。何を以ての故に。善男子、四聖諦を知るに二種の智有り、一には中、二には上なり。中とは声聞・縁覚の智なり。上とは諸仏・菩薩の智なり。善男子、諸陰の苦を知るを名づけて中智と為す。諸陰を分別するに無量の相有るも、悉く是れ諸苦なるは、諸もろの声聞・縁覚の知る所に非ず、是れを上智と名づく。善男子、是くの如き等の義は、我れ彼の經に於て竟に之を説かず¹⁰⁸。

四諦を理解する上で、二種類の智慧があると示す。一つは中智であり、もう一つは上智である。中智とは声聞・縁覚の智慧であり、五蘊の苦の道理を知ることである。諸仏・菩薩は、ただ五蘊が苦であると知るだけでなく、その五蘊に無量の特徴があることをふまえてそれらが全て苦で

¹⁰⁸ 『涅槃經』「善男子、雖復入中猶不名説。何以故。善男子。知四聖諦有二種智。一者中二者上。中者声聞・縁覚智。上者諸仏菩薩智。善男子、知諸陰苦名為中智。分別諸陰有無量相悉是諸苦。非諸声聞・縁覚所知、是名上智。善男子、如是等義我於彼經竟不説之。」(『大正藏』12卷, 684a22-b6)

あると理解する点で、声聞・縁覚の理解と異なり、上智と示される。

この箇所について、『涅槃經集解』において僧亮と僧宗は次のように解釈する。

案ずる。僧亮曰く、生滅の聚積を陰と名づく。亦た是れ苦の義なり。四諦は本、声聞の為、総相にして苦を説く。別相に知るとは、彼の經の所説に非ざるなり。僧宗曰く、若し『勝鬘經』に依りて論を為さば、八諦有り。昔、但だ四を説くのみにして、而れども無作聖諦は未だ明かさざる所なり。今、此の經に就いて但だ無作のみならず、未だ作の義も説かず、亦た未だ究竟ならず。何となれば、陰相を説くが如きは、色は則ち十四の種有り、心は則ち想受行なり、と。此れは是れ総相なり。粗分別の中、智の知る所なり。若し細相に就いて弁明せば、則ち一色陰は、幾の塵の所成と為し、幾の行業の所感にして、心は則ち念念に生滅し、幾の刹那の習の相を起こすが如し。乃ち是れ八住九住の知る所なり。故に「彼の經に未だ弁ぜざる所なり」と¹⁰⁹。

僧亮の解釈によれば、生滅するものの集まりが「陰」であり、これが苦の意味である。また、經典において四諦全てに共通する特徴として「苦」と説かれるのは、声聞のためである。

¹⁰⁹ 『集解』「案。僧亮曰。生滅聚積名陰。亦是苦義。四諦本為声聞。総相説苦。別相知者。非彼經所説也。僧宗曰。若依勝鬘經為論者、有八諦。昔但説四、而無作聖諦者所未明。今就此經。不但無作。未説作義。亦未究竟。何者。如説陰相。色則有十四種。心則想受行也。此是総相。粗分別之中。智所知也。若就細相弁明者。則如一色陰。為幾塵所成。幾行業所感。心則念念生滅。幾刹那習起相。乃是八住九住所知。故彼經所未弁也。」（『大正蔵』37卷, 486b22-c2）

僧宗は『勝鬘經』¹¹⁰を根拠としてこの『涅槃經』の上智を無作聖諦であると解釈する。『大般涅槃經』を参照すれば、『勝鬘經』は無作と作の四諦の意味をすべて明確にしてはいない。なぜなら、総相とは、色に十四種類があり、心が受想行であるという五蘊理解である。対して、もし詳しく明晰すれば、塵所成や行業縁起、心の生滅などの計り知れない特徴を知ることができるのは、八住、九住の菩薩だけである。

この他、智顛が『法華玄義』の四種四諦の解説で引用する『涅槃經』は以下の箇所である。これは諸仏、菩薩の四諦を説明した後、文殊師利菩薩と仏の対話により、第一義と世諦の関係が示される部分である。

善男子、世諦とは即ち第一義諦なり。(中略)善方便有りて、衆生に随順して二諦有りと言くのみ。(中略)出世の人の知る所の如きは第一義諦と名づけ、世人の知ることは名づけて世諦と為すなり¹¹¹。

世諦とはつまり第一義諦であるが、衆生のために、二諦にわけて説かれた。諸仏・菩薩という出世の人の知るものを第一義諦と名づけ、それ

¹¹⁰ 『勝鬘經』「若於無量煩惱藏所纏如来藏不疑惑者。於出無量煩惱藏法身亦無疑惑。於説如来藏。如来法身不思議仏境界及方便説。心得決定者此則信解説二聖諦。如是難知難解者。謂説二聖諦義。何等為説二聖諦義。謂説作聖諦義。説無作聖諦義。説作聖諦義者。是説有量四聖諦。何以故。非因他能知一切苦断一切集証一切滅修一切道。是故世尊。有有為生死無為生死。涅槃亦如是。有余及無余。説無作聖諦義者。説無量四聖諦義。何以故。能以自力。知一切受苦断一切受集証一切受滅修一切受滅道。如是八聖諦。如來說四聖諦。如是四無作聖諦義。唯如来応等正覚事究竟。非阿羅漢辟支仏事究竟」(『大正蔵』12卷, 221b17-c2)

¹¹¹ 『涅槃經』「世諦者即第一義諦。世尊。若爾者則無二諦。仏言。善男子。有善方便随順衆生説有二諦。善男子。若随言説則有二種。一者世法。二者出世法。善男子。如出世人之所知者名第一義諦。世人知者名為世諦。」(『大正蔵』12卷, 684c14-c18)

以外の衆生の知るものを世諦という。

この箇所『涅槃經集解』における竺道生と僧亮、僧宗の解釈は以下の通りである。

案ずる。道生日く、五陰和合は非即非離にして、定相有ること無し。聖人は其の如き相性あるを知る。世人に勝るが故に、第一義と名づくなり。

僧亮曰く、世法とは、世間八法と謂うなり。之に反せば即ち出世なり。出世の知る所は、三仮及び空なり。皆、第一義なり。世人は有を知る、決定にして有相なり。牛は定めて牛にして、馬と為す可からざるが如く亦た実義を得るも、是れ世諦なり。

僧宗曰く、此れ第一重なり。五陰和合して称して某甲と言うは、此れ凡夫の知る所を挙げて、以て惑を明かすなり。陰を解するに無なり。此れ聖人の知る所を挙げて、以て解を明かすなり¹¹²。

竺道生の第一義の解釈は、五陰和合は定まった相がないものであると知ることである。僧亮は、世法は世間八法であり、三仮および空が第一義と理解する¹¹³。僧宗によれば、五陰が和合して某かの人であるというような理解の仕方は、煩惱を明らかにするものである。そして、それは

¹¹² 『集解』「案。道生日、五陰和合、非即非離、無有定相。聖人如其相性而知。勝世人故、名第一義也。僧亮曰、世法者、謂世間八法也。反之即出世矣。出世所知者、三仮及空。皆第一義。世人知有、決定有相。如牛定牛、不可為馬、亦得実義、是世諦也。僧宗曰、此第一重。五陰和合、称言某甲者、此挙凡夫所知、以明惑也。解陰無。此挙聖人所知、以明解也。」（『大正蔵』37巻, 487c9-c16）

¹¹³ 三仮：『大品般若経』によると、般若波羅蜜を行ずる時、名仮施設・受仮施設・法仮施設を学ぶべきであると説かれる。また『成実論』は因成仮・相続仮・相對仮という三仮説が説かれる。

凡夫の理解の仕方である。一方で、五陰が無であると理解するのは聖人の仕方であり、解脱を明らかにしたものであるとする。

智顛の『法華玄義』に同じく上記の『涅槃経』の経文を引用して、自分自身の四種四諦の拠り所にしている。さらに、智顛は自分自身の「四種四諦」において、どのように上記の『涅槃経』の教説を理解しているかを検討する。

第二節、『法華玄義』における「四種四諦」

『法華玄義』の「四種四諦」は、同じくその出典を『涅槃経』「聖行品」と指摘している。また「偏円事理」の異なりによって、生滅四諦・無生四諦・無量四諦・無作四諦の「四種四諦」をまとめている。『法華玄義』の「四種四諦」は、天台判教を円熟した後の化法四教に基づいて形成された智顛の四諦解釈である。以下、『法華玄義』が示した「四種四諦」を確認する。

・ 生滅四諦

生滅四諦は、四諦の真諦に深く迷っている声聞人のために説かれたものである¹¹⁴。

言う所の生滅とは、真に迷うこと重きが故に、事に従って名を受く。然るに苦集は是れ一法なれども、因果を分ちて両と成す。道滅

¹¹⁴ 智顛の教学において、生滅四諦は主に三蔵教の声聞教である。また『法界次第』の中に、智顛は声聞人が真諦を偏縁して修道することと指摘している。

も亦た然り。『雑心』の偈に云く、「諸行の果性、是を苦諦と説き、因性を集諦と説く。一切の有漏法究竟にして滅することを滅諦と説く。一切の無漏の行を道諦と説く。『大経』に云く、「陰・入の重擔、逼迫し繫縛すれば、是れ苦諦なり。見愛の煩惱能く果を招来するは是れ集諦なり。戒・定・慧・無常・苦・空の能く苦の本を除くは、是れ道諦なり。二十五有の子・果・縛を断ずるは是れ滅諦なり」と。

『遺教』に云く、「集は真に是れ因にして更に別の因無し。滅苦の道は即ち是れ真道なり」と。此れ皆生滅の四聖諦の相を明す¹¹⁵。

生滅四諦は、「事理」の事から名称をつけ、事が現象状態ということである。すなわち、声聞人は諸法生滅の現象から四諦を認識する。苦と集は、一つの因果法であり、苦が苦しみの果であり、集が苦しみの因である。道と滅は、もう一つの因果法であり、道が出世の因であり、滅が出世の果である。『雑阿毘曇心論』に「諸行の果性は苦諦と説き、因性を集諦と説く。一切の有漏法が究竟して滅したことを滅諦と説き、一切の無漏行を道諦と説く」と説かれている¹¹⁶。『涅槃経』に「五陰・十二入の重

¹¹⁵ 『法華玄義』「所言生滅者、迷真重故、従事受名。然苦集是一法、分因果成兩。道滅亦然。雑心偈云、諸行果性、是説苦諦、因性説集諦。一切有漏法究竟滅説滅諦。一切無漏行説道諦。大経云、陰・入重擔、逼迫繫縛、是苦諦。見愛煩惱能招来果是集諦。戒・定・慧・無常・苦・空能除苦本是道諦。二十五有子・果・縛断是滅諦。遺教云、集真是因更無別因。滅苦之道即是真道。此皆明生滅四聖諦相也。」(『大正蔵』33卷, 701a1-a10)

¹¹⁶ 『雑阿毘曇心論』「問。諦有何相。答。謂性果諸行有漏是説苦。因性則為集。滅諦衆苦尽。謂性果諸行有漏是説苦者、一切有漏行有因及縛性故説苦。因性則為集者、此有漏行是因性者説集諦。是故苦集是一物。因果故立二諦。滅諦衆苦尽者、一切有漏法究竟寂滅、是説滅諦。若無漏諸行是説為道諦、此二因縁故粗細次第現、若無漏諸行是説為道諦者、一切無漏行説道諦。」(『大正蔵』28卷, 936b23-c4)

なることから逼迫して繫縛すれば、これは苦諦である。見愛などの煩惱が能く苦果を招き来ることは、集諦である。戒・定・慧・無常・苦・空ということは、能く苦の原因を除き、道諦である。二十五有の子・果・縛を断ずるということは滅諦である」と言っている。これらはすべて生滅の四諦の相を明らかにしている。

智顛が引用した『涅槃經』は、『涅槃經』の原文ではなく、『涅槃經』の二乗の四諦を取意している。智顛が理解した意味は、『涅槃經』と違くない。ここでよく見られることは、諸經論の中に、四諦の諦の意味が特殊に説明されている。智顛は『法華玄義』にも『涅槃經』の經文を採用して、諦の意味を三つに理解している。以下に検討しよう。

諦とは三解有り。謂く自性虚ならず故に称して諦と為す。又此の四を見て不顛倒の覺を得るが故に称して諦と為す。又能く此の法を以て他に顯示するが故に名づけて諦と為す。『大經』に「凡夫は苦有りて諦無し。声聞縁覺は苦有り苦諦有り」と。当に知るべし、凡夫は聖理を見ざる。智を得ず説くことを能わず。但だ苦にして諦無し。声聞は三義を具すの故に称して諦と為す。此の釈經と合す¹¹⁷。

諦には三解がある。第一には、自性が不虛ということである。第二には、四諦を観察してから、不顛倒のさとりを得ることである。第三には、四諦の教えを他人に正しく示すことである。『涅槃經』に「凡夫は苦があり、苦の諦理がない。声聞・縁覺には苦があり、苦諦もある」と言っている。これに

¹¹⁷ 『法華玄義』「諦者有三解。謂自性不虛故稱為諦。又見此四得不顛倒覺。故稱為諦。又能以此法顯示於他故名為諦。大經凡夫有苦無諦。声聞縁覺有苦有苦諦。当知、凡夫不見聖理不得智不能説。但苦無諦。声聞具三義故稱為諦。此釈与經合也。」（『大正藏』33卷, 701a14-a20）

よって、凡夫は諦理が見えず、四諦の智慧も得られていないため、説くことができない。それゆえ、凡夫には苦のみ諦がない。声聞・縁覚は、四諦の諦理の三解をすべて備えているので、諦と言われる。

智顛の理解は、凡夫に対して、二乗は四諦の諦理を持っている。凡夫は苦諦の苦だけ持っている。これについては、智顛の解釈を元々『涅槃経』の経意と同様である。さらに、諦理の三解は、『涅槃経』の中に説かれておらず、智顛独自の見解と認められる。

・ 無生四諦

無生四諦は四諦の真諦に浅く迷っている声聞（大乘法を学ぶ声聞）・菩薩のために説かれたものである。

無生とは、真に迷うこと軽きが故に、理に従って名を得る。苦は逼迫の相無く。集は和合の相無く。道は二相ならず。滅は生相無し。又苦・空を習応す。三も亦た是の如し。又た無生とは、生は集道を名く。集道は即ち空なり。空なるが故に集道を生ぜず。集道生ぜれば、則ち苦滅無し。事に即して而して真なり。滅して後に真なるに非らず。『大経』に云く、「諸の菩薩等は苦を解す苦無し」と。是の故に苦無くして而も真諦有り。三も亦た是の如し。是の故に名づけて無生の四聖諦と為す。聖諦の義は前に説くが如し¹¹⁸。

¹¹⁸ 『法華玄義』「無生者迷真輕故。従理得名。苦無逼迫相集無和合相。道不二相滅無生相。又習応苦空三亦如是。又無生者生名集道。集道即空。空故不生集道。集道不生則無苦滅。即事而真。非滅後真。大経云。諸菩薩等解苦無苦。是故無苦而有真諦。三亦如是。是故名為無生四聖諦。聖諦義如前説。」（『大正蔵』33巻, 701a20-a26）

無生四諦は、「事理」の理から名称をつけ、理が深い真理ということである。四諦の深い真理によれば、苦は逼迫の相がなく、集は和合の相がなく、道は二相ではなく、滅は生相がない。なぜなら、苦・空ということ修習するからである。さらに、苦・空によって説明すれば、無生の生は集・道という名前をつけることである。集・道は空になってから、集・道を生起しない。集・道を生起しなければ、苦・滅ということもない。現象そのままに真諦である。滅した後、真諦が見えることではない。『涅槃経』に「諸菩薩は苦を解して無苦をさとる」と説かれる。これによって、大乘菩薩の苦諦は、苦がないが、空の真諦がある。無生四諦では、苦がないため、集・道・滅もなく、空の真諦がある。

智顛における生滅と無生の四諦は、生滅四諦が単に声聞の四諦であり、無生四諦が智顛の大乘菩薩の四諦である。諸法生滅の現象を認識する(事)声聞の四諦は生滅四諦である。現象の法をそのままに認識する(理)菩薩の四諦は、無生四諦である。無生四諦は主に大乘菩薩に対して説いている教えのため、『涅槃経』の「諸の菩薩等は苦を解す苦無し」を採用する。さらに、四諦法に対して、菩薩が現象そのままに空の真諦を見ることには、智顛の「体空観」の意味が見られる。

・無量四諦

無量四諦は四諦の中道の理に深く迷っている菩薩のために説かれたものである。

無量とは、中に迷うこと重きが故に、事に従って名を得る。苦に無量の相有り、十法界の果同じからざるが故に。集に無量の相有り、五住の煩惱同じからざるが故に。道に無量の相有り、恒沙の仏法同

じからざるが故に。滅に無量の相有り、諸々の波羅蜜同じからざるが故なり。『大経』に云く、「諸陰を苦なりと知るを名づけて中智と為し、諸陰を分別するに無量の相有り、諸々の声聞・縁覚の知る所に非ず。我れ彼の経に於て竟に之を説かず。三も亦た是の如し。是を無量四聖諦と名づく¹¹⁹。

無量四諦は、「事理」の事から名称をつける。十法界の果ということは、異なっているから、苦が無量の形相をもっている。五住地の煩惱は異なっているから、集が無量の形相をもっている。恒沙の仏法は異なっているから、道が無量の形相をもっている。諸々の波羅蜜は異なっているから、滅が無量の形相をもっている。『涅槃経』に「諸陰を苦なることを知ることは、中智である。諸陰を分別して無量の相があることは、声聞・縁覚が知ることはない、我（仏）はほかの經典に説かない」と説かれている。これによって、苦だけではなく、集・滅・道は無量の相をもっている。

『涅槃経』には、二乗の中智と菩薩の上智が説かれている。二乗の中智は四諦の無量の相が見えない。諸仏・菩薩の上智は四諦の無量の相が見える。智顛は『涅槃経』のこの教説によって、自身の無量四諦を定義する。無量四諦は位が高い菩薩という主体に対して説かれる四諦の意味である。智顛の教えによれば、三界外の菩薩及び大阿羅漢のため、無量四諦を説く。

¹¹⁹ 『法華玄義』「無量者迷中重故從事得名。苦有無量相。十法界果不同故。集有無量相。五住煩惱不同故。道有無量相。恒沙佛法不同。故滅有無量相。諸波羅蜜不同故。大経云、知諸陰苦名為中智。分別諸陰有無量相非諸声聞縁覚所知。我於彼経竟不説之。三亦如是。是名無量四聖諦。」（『大正蔵』33巻, 701a27-b4）

・無作四諦

無作四諦は四諦の中道の理に浅く迷っている菩薩のために説かれたものである。

無作とは、中に迷うこと軽きが故に、理に従って名を得る。理に迷うを以ての故に、菩提是れ煩惱なるを集諦と名づく。涅槃是れ生死なるを苦諦と名づく。能く解するを以ての故に、煩惱即ち菩提なるを道諦と名づく。生死即ち涅槃なるを滅諦と名づく。事に即して而して中なり。思無く念無く誰か造作すること無し。故に無作と名づく。『大経』に云く、「世諦即ち是れ第一義諦なり。善方便有って衆生に随順して二諦有りと説く。出世の人知れば、即ち第一義諦なり。一実諦とは虚妄無く顛倒無く常樂我淨等なり。是の故に名づけて無作四聖諦と為す¹²⁰。

無作四諦は、「事理」の理から名称をつける。中道の理を迷っているから、菩提が煩惱になるは集諦である。涅槃が生死になるは、苦諦である。このような苦諦と集諦を解することができると、煩惱が菩提なることは道諦であり、生死が涅槃になるは滅諦である。現象のそのままに中道である。思惟・思い・作る人はすべてないから、無作と言う。『涅槃経』は「世諦はすなわち第一義諦」である。衆生に随順するため、善方便にして

¹²⁰ 『法華玄義』「無作者。迷中輕故從理得名。以迷理故菩提是煩惱名集諦。涅槃是生死名苦諦。以能解故煩惱即菩提名道諦。生死即涅槃名滅諦。即事而中。無思無念無誰造作故名無作。大経云。世諦即是第一義諦。有善方便隨順衆生説有二諦。出世人知即第一義諦。一実諦者無虚妄無顛倒。常樂我淨等。是故名為無作四聖諦。」（『大正蔵』33卷, 701b4-b12）

二諦があることを説く。出世の人が知られる第一義諦は、一実諦であり、虚妄・顛倒ということがなく、常・楽・我・浄ということである。このため、無作四諦と言う。

元々『涅槃經』の中に、第一義諦から一実諦及び常・楽・我・浄という文脈の内容は、非常に多く記されている。智顛は、重要なポイントのみ引用している。『涅槃經』の内容を参照すれば、智顛の理解は『涅槃經』の教説を外れていないが、この段落の『涅槃經』の内容を四諦に相応することが智顛の独自の考えである。

智顛における無量と無作という四諦は、すべて中道を目指している教えであり、純粋な大乘諸仏・菩薩法である。無量四諦は現象法（事）から無量の形相があることから、中道を認識することである。無作四諦は、現象法そのままに中道である（理）ことから、四諦を常・楽・我・浄という仏の功德である中道と認識することである。

第三節、小結

以上の考察によって、『涅槃經』の四諦を理解するには、「真諦」・「真実」・「第一義諦」という概念が重要であることがわかった。『涅槃經集解』の諸師と智顛の四諦解釈も、この三つの概念を中心にしてそれぞれの見解を展開している。以下、「真諦」・「真実」・「第一義諦」について、『涅槃經集解』の諸師と智顛の差異をまとめる。

「真諦」については、『涅槃經集解』の諸師と智顛の理解はおおよそ同様である。二乗と菩薩は分かっているものであり、「真諦」の意味は空ということである。しかし、智顛において「真諦」の空の意味は、二乗が「析空」（分析されてきたこと）であり、菩薩が「体空」（現象のままに空

が見えること)である。

「真実」については、諸仏・菩薩のみ分かっているものである。『涅槃經集解』の僧亮・宝亮は、「真実」を「仏に苦がある」という顛倒がないものと理解している。智顛は『涅槃經』の「諸の菩薩等は苦を解す苦無し」を扱って、「真実」を菩薩の空と理解している。「真諦」の空より、「真実」の空は単純な菩薩の空を指している。

「第一義諦」については、『涅槃經集解』の竺道生・僧亮・僧宗は、凡夫と聖人という二つの対象に関して、凡夫が五陰和合などの煩惱法をもっており、聖人が三仮・空など解脱法を明らかにしていると理解している。「第一義諦」は三仮・空などの解脱法である。智顛は、「第一義諦」を中道の意味と理解している。智顛は『涅槃經』の「第一義諦」が「一実諦」と同じ意味であり、「一実諦」は虚妄・顛倒・不二という意味であり、虚妄・顛倒・不二は、中道の意味であると理解している。

『涅槃經』の四諦から空の意味を見出すことは、『涅槃經集解』の諸師と智顛の共通の見解である。智顛には『涅槃經集解』の諸師の影響が見出せない。しかし、智顛は諸師の四諦解釈を理解していないわけではなく、当時の仏教の知識を背景として受け継いでいる。なぜなら、『法華玄義』の中で、異なる視点で『勝鬘經』の四諦説と三仮の空に関説しているからである。

第五章、天台智顓における「如来蔵」思想

はじめに

本来「仏性」の同義語として使用している「如来蔵」という概念は、衆生心の中における潜在的な「仏性」と「如来」である。換言すれば、「如来蔵」は仏果位に向かっている衆生の心に、存在している如来である。「如来蔵」と「仏性」の間に、意味内容は通じ合っているが、経典及び経典の訳出時期にしたがって、表現形式が異なっている¹²¹。智顓における「如来蔵」の用例と展開は、池田氏が以下のように指摘している。前期時代の著作では、「如来蔵」を「仏性」・「諸法実相」・「第一義諦」として取り上げ、後期時代の著作では、『法華玄義』において、心性に万行を具すという証果の意味を担う「如来蔵」に、性徳として一切諸法を含蔵するという役割を与える¹²²。確かに、智顓の著作は前期と後期とで主旨は変わらないが、表現方法が大きく異なっている。それゆえ、全体的に智顓の「如来蔵」思想を把握することは非常に困難なことである。そのため、智顓の「如来蔵」思想を研究する際、具体的な着手点を考えなければならない。

本論では、まず智顓の「如来蔵」思想に関するこれまでの研究成果を確かめて、どのような視点から智顓の「如来蔵」思想が研究されていた

¹²¹ 印順法師『如来蔵の研究』には初期如来蔵経典の七部を取り上げている。それによれば、それぞれの経典において如来蔵の法門は繋がっているが、如来蔵の内容は多少の差異があるとされる。

¹²² 池田（2005）

かを見ていく。その上で智顛の「如来蔵」思想に関する今後の研究の方向性を検討していく。次に、智顛の『四教義』を考察対象として、「四種四諦」の意味内容から、智顛の「如来蔵」思想がどのように表れているのかを明らかにする。さらに、先行研究が指摘した智顛の別教の「如来蔵」思想を考察していく。

第一節、智顛の「如来蔵」思想に関する先行研究

智顛の仏教思想の中に、「如来蔵」を単独の課題として論じる事例は見えない。基本的にはほかの仏教教理と関連づけながら、「如来蔵」思想を適用している例が多い。現在まで、智顛の「如来蔵」思想に対する研究は、概観的な研究が多い。以下に代表的な先行研究を整理しつつ、それぞれの研究視点に注目していく。

・「如来蔵」を中道仏性とした研究

「如来蔵」を中道仏性とした研究は、藤井の三つの研究が挙げられる。

第一に、藤井（1981）は以下のように述べている。智顛の「如来蔵」思想は「如来蔵」の一般的な教説の上に、「如来蔵」を実相の異名として使用している。また智顛は諸法を含備している不空「如来蔵」の意義から、「如来蔵」を空仮中という三諦として展開している。

第二に、藤井（1985）は、智顛の前期時代で中道によって仏性如来蔵の理を見ると述べ、中道を捉えている点に対して仏性如来蔵に注目し、智顛の後期時代で四教の範囲と三諦円融の思想理論によって、仏性如来蔵を扱っていると指摘している。その内、別教について関説する際に、

智顛は「如来蔵」が多用されている。円教について闡説する際に、智顛は『涅槃経』の影響で「仏性」を中道の理と捉えている。また、『涅槃経』の「仏性」を三種に分けて説いている。このような三種仏性は、円教の三諦円融の思想を実践面から補う意義を持つものであると藤井は推測する。

第三に、藤井(2000)は智顛における中道と仏性に関する研究である。この研究は、「如来蔵」について直接的に考察した論説ではなく、中道と仏性の関係から「如来蔵」を問題としたものである。具体的には、智顛の「中道仏性」は、中道に関する「仏性」の意味内容であるのか、「仏性」に関する中道の意味内容であるのかという問題を考察したものである。そこで智顛の中道は単に二辺を遠離することではなく、「仏性」に裏付けられた中道であり、智顛の「仏性」は『涅槃経』の教説と『般若経』の空思想を承け、「仏性」を実相の異名とすると藤井は示している。さらに、藤井は智顛が中道と仏性を結びつけ、融合させた中道仏性を持って、化法四教の教理深淺を詮釈していると結論づけている。

・ 智顛の心具論における「如来蔵」義の研究

智顛の心具論における「如来蔵」義の研究は、池田(2005)「天台大師智顛の如来蔵義一心具論における「含蔵」義の役割一」である。この論文は、筆者にとって、深く興味を持っているが、非常に難解と感じられる。以下に、筆者の理解の限りでこの論文の内容をまとめてみる。

池田の研究は、智顛の前期から後期までの著作に、「諸法実相」の追求ということが一貫するテーマとして見ている。その「諸法実相」の追求とは「心性を追求する」・「心の実相」ということである。こうした心の

追求の過程において「如来蔵」が智顛の新しい心論を支える論拠として採用されていると池田は指摘する。さらに、池田は「如来蔵」思想について、凡夫が菩薩として悟りを求めて修行をすることの根拠を与える理論であるとしている。

また池田は、智顛の著作における「如来蔵」の用例と展開を前期と後期に分けている。智顛の前期著作では、「如来蔵」の語をあまり使用せず、「仏性」の語を多用している。前期の禅観を中心とする著作には、「心性空」から「心の実相」・「仏性」までの展開がある。智顛の後期著作では、「一念心具」が明確に主張され、衆生が迷悟する過程で一切法を備えることにしたがって「如来蔵」義が展開されていく。このような「如来蔵」義には、「如来蔵」の「含蔵」義がよく見られる。智顛の「如来蔵」の「含蔵」は衆生の迷悟という課題を越えて、心性上の問題に展開した。

以上、智顛の「如来蔵」思想に関わる主要な先行研究をまとめてきた。智顛が「如来蔵」あるいは「仏性」を実相の異名として扱うことは、藤井と池田との間に共通して見出される見解である。智顛の「如来蔵」の意味については、藤井は智顛の中道仏性に着目して、智顛の「如来蔵」思想を探究している。池田は智顛の「心具論」に注目して、「心具論」で「如来蔵」の「含蔵」義の役割を解析している。両者の研究は、智顛の「如来蔵」思想を全体的に把握することが主となっている。全面的に智顛の「如来蔵」思想を見ることは、最も重要なことであるが、一方では詳細で具体的な考察点を絞る必要もあるであろう。以下、先行研究を踏まえて、智顛の「四種四諦」という新しい切り口から、智顛の「如来蔵」の意味を考察していく。

第二節、四種四諦における「如来蔵」の意味

智顛における四種四諦は、常に天台の特別な判教である化法四教と関連して説明される¹²³。しかし、この四種四諦は、単にそれぞれを化法四教に配当するだけではなく、所依の經典によって、異なった四種四諦の名称を使用している。智顛の『四教義』における四種四諦は、基本的に『涅槃経』と『勝鬘経』の經文にしたがって解釈している。「仏性」という言葉で蔵教・通教の無量四諦と別教・円教の無量四諦を区別し、さらに「蔵識」という言葉で別教の無作四諦と円教の無作四諦を区別する。「仏性」という語は『涅槃経』の影響が考えられる。また、「蔵識」という語は『涅槃経』と『勝鬘経』の中には出てこないが、「如来蔵」と関係があると考えられる。智顛は『四教義』において、「如来蔵」と「仏性」という用語を常に別教の無量四諦と円教の無作四諦との内容と関連させながら論じている。

ところで智顛の四種四諦についての先行研究には、「如来蔵」と「仏性」ということがあまり触れられていない。また四種四諦の意味内容を考察すると、四諦以外の仏教教理がかなり含まれている。このため本節では、このような智顛の四種四諦の中で「如来蔵」と「仏性」という言葉が、何を表しているのかを検討してみたい。

四種四諦において「如来蔵」と「仏性」に関わる記述は、小乗と大乘の四諦を区別する上で立てられているものである。従ってまず、智顛が

¹²³ 四種四諦は、一般的に三蔵教・通教・別教・円教という化法四教に配付して、蔵教が生滅四諦であり、通教が無生四諦であり、別教が無量四諦であり、円教が無作四諦である。

どのような理論で小乗と大乘の四諦を明らかにしており、さらに、智顛が理解した大乘四諦における「如来蔵」と「仏性」との関係を考察する。

・ 智顛における大乘小乗の四諦義

四諦に対して小乗と大乘の区分は、智顛の前後期著作によく見られる。『四教義』時代に至った後、智顛は大乘四諦については、經典引用や意味深淺にかかわらず、全て前期よりいっそう広がっている。『四教義』の中で、智顛は主に『涅槃經』の教説を重視している。智顛は『涅槃經』の五味教判に基づいて四種四諦の意味を順次に定義している。また智顛は『涅槃經』に説かれる四諦義に基づいて自身の四種四諦を説明している¹²⁴。さらに、小乗四諦より、大乘四諦の特徴を表すために、智顛は『涅槃經』の半満教判によって、問答の形式で四種四諦を大乘と小乗の四諦に区別している。該当箇所は次の通りである。

問うて曰く、前に生滅四諦を明す。是れ三蔵教の半字の義なり。此の事然るべし。次に無生・無量・無作を明す。云何が分別するや。

答えて曰く、若し満字にして義を明すと作さば、三種四諦は同じく是れ満教なり。須らく分別すべからず。若し五味にして義を明かさば、三種の四諦の義は即ち不同なり。無生四諦は此れ大乘と雖も、猶お二乗に通ず。無量四諦は但だ是れ菩薩の所行の道なり。無作四実諦は乃ち是れ仏の境界なり。此を異と為すなり¹²⁵。

¹²⁴ 『四教義』「問曰何処經論出此四種四諦。答曰若散說諸經論赴縁处处有此文義。但不聚在一処耳。『大涅槃經』明慧聖行。欲為五味譬本。是以次第分別。明此四種四諦。」（『大正藏』46卷, 725c1-c4）

¹²⁵ 『四教義』「問曰、前明生滅四諦。是三蔵教半字之義。此事可然。次

設問は次の通りである。

先に生滅四諦を三蔵教（二乗）の四諦義と明かし、次に無生・無量・無作という四諦を明かすということはどういうことなのだろうか。これに対して智顛の答えは次の通りである。

もし『涅槃經』の半満教から理解すれば、生滅四諦が『涅槃經』の半字声聞教の知ることであり、無生・無量・無作の四諦が『涅槃經』の満字大乘菩薩教の知ることである。もし『涅槃經』の五味教から解説すれば、無生・無量・無作の四諦には、無生が大乘菩薩と二乗声聞の共通教であり、無量がただ大乘菩薩教であり、無作が仏の世界である。

智顛の四諦説で無生・無量・無作の四諦は大乘教の範囲であるが、無生が菩薩と二乗の共通教であるから無生四諦を通教の教えとする。すなわち、二乗は小乗の人であるが、大乘教に転入することができる。四種四諦はそれぞれに化法四教に対応している教えである。つまり、智顛が大乘教の上で通教・別教・円教を立てることは、智顛独自の大乘思想の展開である。また、本来智顛の通教には「通前通後」という言い方がある。大乘法を憧れる二乗（回小向大）は、通教の教えを通して、大乘法に入られる。すなわち、通教は大小乗の教えを効果的に接続している作用と言えよう。

以上のように、無生・無量・無作の四諦は大乘教である。しかし、同様な大乘四諦であるが、なぜ三種類に分けられているのかが問題である。智顛は無生・無量・無作の四諦について説く時、「如来蔵」と「仏性」と

明無生無量無作。云何分別。答曰、若作満字明義、三種四諦同是満教。不須分別。若五味明義、三種四諦義即不同。無生四諦此雖大乘、猶通二乗。無量四諦但是菩薩之所行之道。無作四実諦乃是仏之境界。此為異也。」（『大正蔵』46卷, 725c7-c13）

いう用語を取り上げている。三種類の大乗四諦は、「如来蔵」と「仏性」が見えるかどうかにしたがって、四諦の趣意が異なっている。次に、無生・無量・無作の四諦における「如来蔵」と「仏性」の用法を考察していきたい。

・無生・無量・無作の四諦に見られる「如来蔵」と「仏性」

同様に『四教義』のテキストで、智顛は『涅槃経』の「如来蔵」と「仏性」を理解する上で、無生・無量・無作の四諦が重なる意味内容を示している。重なる意味を持っている四諦ということは、例えば、同じ無生四諦を呼んでいるが、『般若経』『勝鬘経』『涅槃経』各々の經典内容によって、四諦の意味が変わっている。また、『四教義』の四諦義については、智顛が『勝鬘経』の四諦説に沿わないが、『勝鬘経』の四諦説をよく言及している。当時『勝鬘経』思想は非常に盛んであり、この影響を考慮すると、智顛が『勝鬘経』思想を避けることは難しい¹²⁶。そのため、智顛は、異なる大乗經典を参照しながら、それぞれの四諦の意味を明かす。特に『涅槃経』の「仏性」と「如来蔵」の使用、及び『勝鬘経』の「如来蔵」の判別は注目しなければならない。『四教義』の該当箇所は、簡潔に示すにとどめる。

問うて曰く、若し是の三乗は涅槃を通学すれば、何の故に滅諦は

¹²⁶ 智顛の『四教義』でよく『涅槃経』の四諦義を『勝鬘経』の四諦義と比較しながら、自身の四諦義を明かしている。（『大正蔵』46巻, 725c）また智顛の『法華玄義』で浄影慧遠の『大乘義章』に理解した『勝鬘経』四諦義を批判している。同じ『法華玄義』で智顛は『勝鬘経』の無作四諦の滅諦が仏の究竟であることを批判している。（『大正蔵』33巻, 700c）

常樂我淨を明すと解すや。

答えて曰く、若し方等・般若の所明なれば、無生真諦は三乗共に見る。而も二乗の通教菩薩は仏性を見ず。滅諦は是れ常住なることを明かさず。大涅槃に至って、三乗人の為に、同じく仏性を説く。故に無生四真諦は通別なり通円なり。故に滅諦の四徳を明かす¹²⁷。

設問は次の通りである。

『勝鬘經』の中、三乗が同じく涅槃に入る目的を持って修学している、なぜ滅諦が常樂我淨の涅槃四徳を持つのか¹²⁸。これに対して智顛の答えは次の通りである。

方等般若經典から見られる無生四諦は、三乗共通であるが、ここで無生四諦を学んでいる通教菩薩が「仏性」を見ないから、『勝鬘經』の滅諦で常樂我淨の涅槃四徳をわからない。しかし、『涅槃經』に至って、仏は「三乗に仏性について語る」ということがある。自身の無生四諦は『涅槃經』から定義されるので、三乗が「仏性」を見ないけど、『涅槃經』より知ることができる。

これによって、智顛が方等・般若・勝鬘の經典の意味を合わせ並んで、通教菩薩の無生四諦は別教の無量四諦と円教の無作四諦つながりの作用があることが分かる。また、注意すべきことは、『勝鬘經』は、「仏性」

¹²⁷ 『四教義』「問曰、若是三乗通学涅槃、何故解滅諦明常樂我淨耶。答曰、若方等・般若所明、無生真諦三乗共見。而二乗通教菩薩不見仏性。不明滅諦是常住也。至大涅槃、為三乗人、同説仏性。故無生四真諦通別通円。故明滅諦四徳。」（『大正蔵』46巻, 726a15-a20）

¹²⁸ 『勝鬘經』無作四諦の中に、滅諦は常であり、諦であり、依である。（『大正蔵』12巻, 221c27）『四教義』で智顛はこれらの『勝鬘經』の常・諦・依を常・樂・我・淨と理解している。元々『勝鬘經』は仏が涅槃四徳を持つことと示している。（『大正蔵』12巻, 725b14）

という言葉を使っておらず、「如来蔵」という言葉を一貫して使っている。ここで智顛は『勝鬘經』の「如来蔵」を「仏性」という言葉で使用している。すなわち、『四教義』時期の智顛は「如来蔵」と「仏性」を等しく理解している。

さらに、通教菩薩はどのように「仏性」が見える別円の無量無作四諦がわかるかについて、智顛は直接説明していないが、『四教義』の無量四諦について説くところで、その理由が見られる。以下の原文によって検討する。

問うて曰く、若し爾らば、『涅槃經』に四諦の無量相を明す。何んぞ定めて是れ別教所詮の無量の四諦と知ることを得るや。

答えて曰く、若し仏性を明かさずして無量を説かば、即ち是れ前の二教所詮の無量なり。若し仏性を明して無量の相を説かば、即ち任運に自ら成じ、後の兩教の明す所の無量なり。若し円教も亦た無量の四聖諦と名づくるとは、即ち是れ無作の四実諦の異名なり¹²⁹。

設問は次の通りである。

どんな理由で『涅槃經』の「四諦無量相」を別教の無量四諦と認めるのかである。これに対して智顛の答えは次の通りである。「仏性」を分かなければ、無量四諦を説くことは、蔵通教の菩薩に対して、「仏性」を分かれば、別円の菩薩に対して¹³⁰。

¹²⁹ 『四教義』「問曰、若爾涅槃經明四諦無量相。何得定知是別教所詮無量四諦。答曰、若不明仏性而説無量、即是前二教所詮之無量也。若明仏性説無量相者、即任運自成後兩教所明無量也。若円教亦名無量四聖諦者、即是無作四実諦之異名也。」（『大正蔵』46巻, 726a28-726b5）

¹³⁰ 二乗は「仏性」が見えない。「仏性」が見えるかどうかは、全て菩薩という対象にして、三種類の大乗四諦が説かれる。

ここでなぜ蔵通教の中に、無量四諦が言われるのかは、智顛は説明していない。しかし、前述の通りによって、方等般若の通教菩薩は「仏性」を分らないが、『涅槃経』の「四諦無量相」から「仏性」を知ることができ、別教の無量四諦もわかることができ、「通別」と言える。果から因を説く円教から見れば、『涅槃経』の「四諦無量相」は、円教の無作四諦であり、「通円」と言える。

次に、智顛は自分自身が理解した『涅槃経』の「如来蔵」によって、自身の無量無作四諦を『勝鬘経』の無量無作四諦と区別する。

問うて曰く、『勝鬘経』に無量の四聖諦、無作の四聖諦を明す。『涅槃経』も亦た是の説有り。二処の経文は、同じと為すや異なると為すや。

答えて曰く、無量の四聖諦有り、蔵識に依ると雖も無作に非ず。無量の四聖諦有り、亦た蔵識に依り即ち是れ無作なり。所以は何ん、若し無明恒沙に約さば、四諦の法事、数論は無量なり。即ち是れ別教所詮の無量にして無作に非ず。若し法性に約して四諦の無量を明かさば、即ち是れ円教所詮の無量なり。無量は即ち無作なり。『大涅槃経』に迦葉に答えて、無量の四諦を明かさば、正しく事数無量に約す。此れ別教の所詮なり。若し文殊に答えて四諦を明かさば、即ち是れ無作の四実諦を明かすなり。『勝鬘経』に二種四諦を明かすは、一異未だ定めて判ずべからず¹³¹。

¹³¹ 『四教義』「問曰、勝鬘経明無量四聖諦無作四聖諦。涅槃経亦有是説。二処経文、為同為異耶。答曰、有無量四聖諦、雖依蔵識非無作。有無量四聖諦、亦依蔵識即是無作。所以者何、若約無明恒沙、四諦法事、数論無量。即是別教所詮無量非無作。若約法性明四諦無量、即是円教所詮無量。無量即無作也。大涅槃経答迦葉、明無量四諦、正約事数無量。此別

設問は次の通りである。

『涅槃経』と『勝鬘経』が同様に無量無作四諦を説いている、両経の異なることは何であろうか。

これに対して智顛の答えは次の通りである。

『涅槃経』の中に、同じく「如来蔵」に依って説かれる無量四諦は、迦葉菩薩に答えることが無量四諦であり、文殊菩薩に答えることが無作四諦である¹³²。これについては、本論の第二章ですでに説明したから、本章では復唱しない。

ここで、智顛が「如来蔵」の空と不空義を明確に理解していることが見られる。しかし、『涅槃経』における四諦義は「仏性」が多用している、「如来蔵」空と不空の両義が特に見えない。以上のように、智顛が『勝鬘経』の空不空の「如来蔵」義を理解した後、『涅槃経』の教説を受容すると考えられる。

また、智顛は『涅槃経』の「如来蔵」に依って、二種類の無量四諦を仮説している。ある無量四諦は自身の別教の無量四諦である。ある無量四諦は自身の円教の無作四諦である。それでもなお、『勝鬘経』の無量と無作四諦は同じであるかどうかを言っていない。教えを説く対象や場合によって同じ言葉でも異なる意味を持っている。

以上の考察にしたがって、智顛にとって、「如来蔵」「仏性」に関わる

教所詮也。若答文殊明四諦、即是明無作四実諦也。勝鬘経明二種四諦、一異未可定判。」(『大正蔵』46巻, 726b16-b26)

¹³² 『四教義』の原文で「蔵識」という言葉を使っているが、この「蔵識」は唯識のアーラヤ識ではなく、「如来蔵」によって分別することを指している。『四教義』の四種四諦で唯識に関する経典と論典を言及していない。また、後の文脈は、『涅槃経』の「如来蔵」の使用で自身の無作四諦を定義している。

問題は、別円教の無量四諦・無作四諦と深く関係がある。先行研究にも同様に指摘されている。次節では、「如来蔵」あるいは「仏性」に対して、智顛の別教においてどのような取り方があるかを明らかにしていく。

第三節、『四教義』における別教の「如来蔵」

『四教義』巻九、巻十の中に、智顛は別教の修行次第を説明している。別教が所詮するものを総括して言えば、因縁仮名と如来蔵仏性の理ということである¹³³。さらに、智顛は別教の修行段階を有門・空門・亦有門・亦空門・非有非空という四門の入道方法を示し、多くの経論で亦有門亦空門によって別教の修行段階について説明している¹³⁴。別教で修行する主体は特に菩薩という対象を限定している。經典によって菩薩の修行順序が異なっている。智顛は『瓔珞経』・『大品般若経』・『涅槃経』の教説に基づいて菩薩の修行段階を明らかにしている。智顛は『瓔珞経』の菩薩修行の五十二位説を採用して、自身の別教菩薩の修行の「位数」とし、『大品般若経』の三観を採用して、別教菩薩の伏惑を明らかにし、『涅槃経』の五聖行を採用して、別教菩薩の法門の「位数」を弁別している。智顛の別教菩薩の「位数」は、十信・十住・十行・十回向・十地という五十段階である。智顛は『涅槃経』の五聖行を四種四諦と五十段階に対応させ、別教菩薩の意味合いを説明している。ここで「如来蔵」に関する記述は、あまり多くない。基本的に五聖行・四種四諦・五十段階とい

¹³³ 『四教義』「別教詮因縁仮名、如来蔵仏性之理。菩薩稟此教門、修行得証必有浅深。」（『大正蔵』46巻, 751c23）

¹³⁴ 『四教義』「此別教入道亦有四門。一有門。二空門。三亦有亦空門。四非有非空門。別教雖有四門。而尋經論意。多用亦有亦空門明行位也。」（『大正蔵』46巻, 751c24-c28）

う問題点にまとめて述べている。以下、まず智顛において、『涅槃經』の五聖行・四種四諦・五十段階の間に、どのように対応しているかを整理し、さらに、五十段階に沿って、「如来蔵」はどのような概念に転換しているか、どのような意味を持っているかを検討する。

・五聖行・四種四諦・五十段階の対応

『四教義』巻九は、次の通りである。

三には『涅槃經』に約して五行合位を明さば、初め戒聖行・定聖行は生滅四諦、慧聖行は即ち是れ十信位なり。次に無生四真諦聖行は即ち是れ十住位なり。次に無量四聖諦は即ち是れ十行位なり。次に一実諦・無作四聖諦を修することを明す。即ち是れ十回向位なり。次に若し真見の一実諦を発さば、無作四聖諦を証す。即ち是れ聖行の満位なり¹³⁵。

本来『涅槃經』の五聖行は、聖行・梵行・天行・嬰兒行・病行である。智顛は『涅槃經』の聖行の内容にしたがって、聖行を含んでいる他の四行を加え、五行としている。智顛が理解した五行は、戒聖行・定聖行・慧聖行・四諦聖行・聖行ということである。戒聖行・定聖行・慧聖行は、四種四諦に対応すると、生滅四諦であり、五十段階に対応すると、十信位である。四諦聖行とは、特に無生・無量・無作の四諦を指すというこ

¹³⁵ 『四教義』「三約涅槃經明五行合位者、初戒聖行・定聖行生滅四諦、慧聖行即是十信位。次無生四真諦聖行、即是十住位。次無量四聖諦、即是十行位。次明修一実諦・無作四聖諦。即是十迴向位。次若発真見一実諦、証無作四聖諦。即是聖行満位。」（『大正蔵』46巻, 753a6-a11）

とである。五十段階に対応すれば、無生四諦が十住位であり、無量四諦が十行位であり、無作四諦が十回向位である。さらに、『涅槃経』の「一実諦」を見て無作四諦を証することは、聖行が円満であると言える。

智顛の五行は、『涅槃経』の聖行品の内容によれば、間違いが見られないが、四諦を十信・十住・十行・十回向に対応することは、『涅槃経』の聖行品に見出せない。『四教義』における別教の五十段階の文脈によれば、智顛は『瓔珞経』の五十段階の名称をそのままに使用しているが、五十段階の意味内容が『涅槃経』の教説に沿って解説されている。また智顛の『四教義』において、地論師の「通宗判位」ということを言及している¹³⁶。異なる経論の教説を会通することは、中国の南北朝時代の仏教特色であると言える。

・五十段階における「如来蔵」

別教の五十段階における「如来蔵」は、別教菩薩の修行核心として説いている。五十段階のあらゆる教説内容は、すべて「如来蔵」を目指している。五十段階でのそれぞれの証得も「如来蔵」から証明される。しかし、「如来蔵」はどういう意味かを説明しない。様々な仏教法門によって、「如来蔵」の意味を求める傾向が強いのである。以下、五十段階に散見する「如来蔵」の例文を列举する。

¹³⁶ 『四教義』「地論師。通教判位云。初地断見。二地断欲愛。三地断色愛。四地断無色愛。地論師通宗判位。有用三地断見名須陀洹。從四地至六地名斯陀含。第二依法師。七地名阿那含。第三依法師。十地等覺名阿羅漢。是第四依法師。有三地断見。四地名斯陀含。五地名阿那含。六地名阿羅漢。有用仁王經。四地断見五地名斯陀含。六地名阿那含。七地名阿羅漢。如是等異説不同。難可定依。今以義推作此对四果也。一往似解便。既無的文仏意難知。不須苟執也。」（『大正蔵』46卷, 759b11-b21）

- ① 如来蔵の無量四諦の理を觀じ、即ち是れ無作に非ずと雖も、而も二乗は亦た其の名を聞かず¹³⁷。
- ② 若し菩薩は無量・無作四諦觀を学ばば、如来蔵は無量にして生死の種子無しと觀知す。恒沙の仏法は恒沙の下品の煩惱を断じ。無明を伏す、相似中道を別見するの外、更に轉増にして法界の願行事理和融するを明かす。別教の一切智を成じ、六根清淨を得。即ち是れ別教の忍法・世第一法位なり¹³⁸。
- ③ 次に種々の三昧は梵王の有を破する。王は三千大千に主たり。大千の品類は既に多し、故に種々の号有り。其の種々を破するが為の故に種々の空を修し、種々の仮に入り、種々の中道を見る。如来蔵の多く含蔵するところ、種々の三昧と名づくるなり¹³⁹。

用例①には、別教菩薩は「如来蔵」を觀察して無量四諦の理を理解することが無作四諦ではないが、二乗は「如来蔵」と無作四諦という名前すら聞くことがない。ここで智顛は二乗と別教菩薩の四諦を区別するため、「如来蔵」の語を用いている。

¹³⁷ 『四教義』「觀如来蔵無量四諦之理、雖非即是無作、而二乗亦不聞其名。」(『大正蔵』46卷, 753b18-b19)

¹³⁸ 『四教義』「若菩薩学無量・無作四諦觀、觀知如来蔵無量無生死種子。恒沙仏法断恒沙下品煩惱。伏無明、別見相似中道之外、更轉増明法界願行事理和融。成別教一切智、得六根清淨。即是別教忍法・世第一法位也。」(『大正蔵』46卷, 755b24-b29)

¹³⁹ 『四教義』「次種種三昧破梵王有者。王主三千大千。大千品類既多、故有種種之号。為破其種種故修種種空、入種種仮、見種種中道。如来蔵多所含蔵、名種種三昧也。」(『大正蔵』46卷, 757c-c10)

用例②には、もし菩薩は無量・無作四諦を学べば、「如来蔵」を観察して、「如来蔵」の中に、無量の意味があり、生死の種子がないことを知ることができる。また恒沙の仏法が恒沙の下品の煩惱を断じることができ、無明煩惱を伏して、特に相似中道が見える以外で、さらに「法界の願行事理和融する」ということを明確にできる。別教の一切智を成就し、六根清浄を得て、別教の忍法・世第一法位になる。ここで智顛は『勝鬘経』の空・不空「如来蔵」を言っていないが、空・不空「如来蔵」の意味が見られる。相似中道が見えることも、「如来蔵」によって得られるものと言える。

用例③には、種々な三昧を持って、梵王の「有」ということが破れる。印度仏教では、梵王が三千大千世界の王であるとされる。三千大千世界の中に存在している万物は多くて様々な名称がある。種々の「有」ということを破するため、種々の空観を修して、種々の仮観に入って、種々の中道を見る。「如来蔵」の「含蔵義」によるから、種々の三昧と名づける。ここで智顛は明確に「如来蔵」の「含蔵義」に基づいて三観から得られる種々の三昧があると示している。

上記の用例によって、これまで智顛の「如来蔵」は、別教の十信位で「如来蔵の無量四諦の理」という用法を示している。十住位・十行位・十回向位において、智顛は「如来蔵」を「中道」に関わる「相似中道」（円教の場合、「中道第一義諦」になる）というような天台特有の観法概念に関連させて説いている。十地位に至った時、智顛は「如来蔵」の「含蔵義」を使用して、空仮中という三観を修して、種々の三昧になると示している。

第四節、小結

智顛の「四種四諦」における「如来蔵」の読解は、『涅槃経』と『勝鬘経』の解釈に基づいており、主に『涅槃経』の「如来蔵」に従って理解されている。生滅四諦は単純な二乗の四諦であり、「如来蔵」「仏性」の問題に関わらない。無生四諦は、智顛が「如来蔵」という言葉を使わずに、「仏性」という言葉を使用している。そこで智顛は特に『勝鬘経』の「如来蔵」を「仏性」として使っている。また智顛は、『涅槃経』の「三乗に仏性を語る」という立場によって、二乗が「仏性」を知ることができるとする。さらに『涅槃経』の「如来蔵」の意味は、智顛が考えている無量・無作四諦である。

智顛の別教における「如来蔵」は、三つの考えがある。第一には、二乗の四諦と区別するため、菩薩の無量四諦は「如来蔵」を観察してから得られることである。第二には、「如来蔵」の意味に対して、智顛は、「空不空の如来蔵」と「如来蔵の含蔵義」という知識背景を持っているが、智顛が理解した「空不空の如来蔵」と「如来蔵の含蔵義」は、どのような如来蔵經典から受け入れたのかは不明である。もし智顛の『勝鬘経』の受容から言えば、『勝鬘経』の可能性が高いが、智顛が明確に指示していないので、断定することができない。第三には、智顛の「如来蔵」は、三観と関連していることである。智顛は「空不空の如来蔵」によって、相似中道が見えることを示し、「如来蔵の含蔵義」によって、三観から得られる種々の三昧があることを表している。

結論

智顛の四諦解説については、以下の二面から整理してきた。

第一には、中国の南北朝時代の教相判釈から言えば、智顛の前期時代の「二種四諦」は、当時の時代に盛んであった大小乗教の教相判釈の影響を受けてから大小乗の四諦を区別することが見られる。智顛は大小乗教の区分によって、四弘誓願を持つ菩薩の四諦と四弘誓願を持たない二乗の四諦を指摘している。また智顛は四弘誓願を持つ大乘菩薩の四諦を重視するために、『勝鬘經』の四諦説を援用して、自分自身の化法四教に配当する。『勝鬘經』の「有作四諦」は、藏教と通教の修行者が知られる四諦である。別教と円教の修行者は『勝鬘經』の「有作四諦」と「無作四諦」という二種四諦を知っている。

智顛の後期時代の「四種四諦」は、『涅槃經』「聖行品」の教説にしたがって、大小乗の四諦を区別した後、智顛自身の判教系統である化法四教によって、「四種四諦」の見解を形成された。智顛の前期時代において化法四教に配当する四諦と同様ではない、後期時代で化法四教に対して、それぞれの四諦の名称は明確に定義している。藏教は、主に二乗に対して、生滅四諦の意味を説く。通教は、主に菩薩に対して、無生四諦の意味を説く。別教は、単純な大乘菩薩のため、無量四諦の意味を説く。円教は、別教よりもっと位が高い諸仏・菩薩のため、無作四諦の意味を説く。

第二には、智顛の四諦解釈の意味展開から言えば、まず『次第禪門』における四弘誓願を持つ菩薩の四諦に対して、『法華經』の四句を四弘誓

願として、『瓔珞經』の四諦と四弘誓願の關係を用いた。また『次第禪門』の菩薩四諦は、菩薩が禪中に四諦を觀察する時、四弘誓願を起さなければならぬ。四弘誓願を実現するために、菩薩道を歩みながら、禪波羅蜜を修することに結論する。すなわち、菩薩の四諦は四弘誓願を受けてから、菩薩道である禪波羅蜜へ展開するのである。

また四諦から空の意味を見出すことは、二乗の「析空觀」から觀察された四諦が「生滅四諦」であり、菩薩の「体空觀」から觀察された四諦が「無生四諦」である。ただ智顛の前期著作で「析空觀」と「体空觀」の概念が見出せない。『法界次第』の「四諦十六行を持って二空を弁ずる」ところで、「析空觀」と「体空觀」の考えが見られる。智顛の後期時代は『涅槃經』の四諦を扱って自分自身の「四種四諦」を系統化する。『涅槃經』の四諦説では、二乗の四諦に「真諦」があり、菩薩の四諦に「真実」がある。仏になる時、四諦を「第一義諦」・「一実諦」という意味に転換した。智顛は「真諦」がある二乗の四諦を「無生四諦」と考え、「真実」がある菩薩の四諦を「無生四諦」と考え、「第一義諦」・「一実諦」の意味を持っている四諦を「無作四諦」と考えている。さらに智顛は『涅槃經』の「四諦の無量相」によって自身の「無量四諦」を定義する。

智顛以前の南地涅槃宗の諸師は、『涅槃經』の「真諦」を空と解釈し、「真実」を「仏に転倒がある」と解釈し、「第一義諦」を三仮・空と解釈している。智顛は『涅槃經』の「真諦」を二乗の空と解読し、「真実」を菩薩の空と解読し、「第一義諦」を中道と解読している。智顛の「四種四諦」は南地涅槃宗の諸師の影響が見出せない。しかしながら、智顛は諸師の四諦解説を理解していないのではなく、その時代の仏教知識が背景になる。例えば、涅槃宗の僧亮は「第一義諦」を三仮と理解している。智顛の空仮中という三觀思想において、仮と中の意味は常に「第一義諦」

の問題をめぐって論述している。

さらに、『法界次第』の「二種四諦」は、智顛の「四種四諦」になる前の接点と言える。なぜなら、『法界次第』の中に、智顛は『涅槃經』と『勝鬘經』の出典を指示していないが、直接に『涅槃經』の半満字教と『勝鬘經』の四諦説を使用している。それは後期時代の『四教義』の「四種四諦」で似たような記述がある。しかし、『涅槃經』の半満字教及び『勝鬘經』の四諦説の採用に対して、『四教義』は新しい展開が見られる。『法界次第』で蔵教と通教の四諦は半字教であり、別教と円教は満字教である。『四教義』で蔵教のみ半字教であり、通教・別教・円教は満字教である。また『法界次第』における化法四教に配当する「二種四諦」はすべて『勝鬘經』の四諦説である。『四教義』における化法四教に配当する「四種四諦」は、『勝鬘經』の四諦説に所依せず、すでに『涅槃經』「聖行品」の四諦説に所依するようになる。

智顛の「二種四諦」から「四種四諦」までの展開は、智顛の判教思想とよく関係するが、それを展開することが可能な理論は「仏性」と「如来蔵」の思想である。具体的に見られるところは、智顛の「無生四諦」・「無量四諦」・「無作四諦」の意味上である。『四教義』で智顛は自身の「無生四諦」を『勝鬘經』の「有量四諦」に相当している。元々『勝鬘經』の「有量四諦」は「如来蔵」を知らない二乗の四諦である。智顛の「無生四諦」は『涅槃經』から形成された四諦であり、「仏性」を見ないが、知ることができる。「仏性」と「如来蔵」が見える四諦の真理は、智顛が考えている「無量四諦」である。「無作四諦」については、智顛は直接に『大般涅槃經』の「如来蔵」の意味を援用して、自身の「無作四諦」を表している。

以上から、智顛の「四種四諦」に対して、教相判釈と意味展開という

二面から検討したが、智顛の「四種四諦」に関する課題はまだ残っている。特に智顛の『法華玄義』は『法華経』の円融思想の上に「四種四諦」を説いている。そこで智顛は『涅槃経』の四諦義に基づいて「四種四諦」を形成するという見方が変わらない。「四種四諦」に関わる論述視点は新しく展開していることが見出される。『法華経』思想と関係があると考えられる。『法華玄義』の中に、依然に智顛の『涅槃経』の受容が見える。『四教義』より、智顛が『法華経』の思想を持って、他の経典思想をすみずみまで総合したい意図を見出す。これらの問題は、今後の研究課題としたい。

参考文献

参考文献の順番は、経論・著作集・雑誌論文集とする。また上記略号で示した経論と智顛の著作は略する。

龍樹菩薩造 鳩摩羅什訳『大智度論』『大正蔵』第 25 卷。

法救造 僧伽跋摩訳『雜阿毘曇心論』『大正蔵』第 28 卷。

隋・智顛撰『四教義』『大正蔵』第 46 卷。

隋・智顛撰『維摩經玄疏』『大正蔵』第 38 卷。

隋・吉蔵選『法華義疏』『大正蔵』第 33 卷。

隋・灌頂選『隋天台智者大師別伝』『大正蔵』第 50 卷。

青木隆

1995 「天台智顛における誓願思想」、『日本佛教学会年報』60, 205-219。

池田晃隆

2008 「天台における四諦と四弘誓願」、『天台学報』51, 95-103。

池田宗讓

2005 「天台大師智顛の如来蔵義一心具論における「含蔵」義の役割一」『大乘佛教思想の研究：村中祐生先生古稀記念論文集』, 87-119。

小川弘貫

1976 『中国如来蔵思想研究』、中山書房。

大嶋孝道

2020 「天台教学における六波羅蜜の一考察－天台大師の前期著作を中心に－」『天台学報』63, 181-189。

横超慧日

1970 『北魏仏教の研究』平樂寺書店。

1986 『法華思想の研究』平樂寺書店。

大野榮人

1994 『天台止観成立史の研究』、法蔵館。

大野榮人、伊藤光壽、武藤明範

2004 『天台小止観の譯註研究』山喜房佛書林。

大野榮人、武藤明範

2012 『天台次第禪門の研究』第一卷、山喜房佛書林。

大野榮人、伊藤光壽

2012 『天台法華玄義の研究』第一卷、山喜房佛書林。

大松久規

2018 「『法界次第初門』に見られる禅観」『曹洞宗総合研究センター－学術大会紀要』19, 175-179。

2019 「智顛前期時代の講説について－『积禅波羅蜜次第法門』を中心として」『曹洞宗総合研究センター－学術大会紀要』20, 79-83。

2019 「『积禅波羅蜜次第法門』所説の禅観：『法界次第初門』との比較」『東海印度学仏教学会』64, 63-77。

関口真大

1969 『天台止観の研究』岩波書店。

1983 『摩訶止観』上、岩波書店。

加藤 勉

1983 「『法界次第初門』に関する一考察」『天台学報』25, 163-168。

1990 「四種四諦の成立過程について」『多田厚隆先生頌寿記念 天台教学の研究』山喜房佛書林, 197-210。

菅野博史 訳注

2010 『法華文句』Ⅲ、第三文明社。

2011 『新国訳大蔵経』法華玄義Ⅰ、大蔵出版。

清田 寂天

1995 「天台智顛と法華経の本願」、『日本仏教学会年報』60, 221-234。

斎藤 章光

1991 「四種四諦における問題点について」『印度学仏教学研究』39(2), 604-606。

佐藤 哲英

1961 『天台大師の研究』百華苑。

积印 順

2009 『空之探究・如来藏之研究』、中华书局。

鹽入 良道

1964 「天台義における四諦について」『印度学仏教学研究』12(2), 583-591。

多田 孝正

1975 「慧思の菩薩観—四弘誓願を中心として—」、『印度学仏教学研究』23(2), 806-809。

新田 雅章

1981 『天台実相論の研究』、平樂寺書店。

野本覚成

2001 「「四弘誓願」成句の初出」、『天台学報』44, 51-62。

ロバート F・ローズ

2013 「天台思想における四聖諦と四弘誓願—天台智顛の菩薩思想
覚書—」、『仏教学セミナー』98, 1-16。

平井俊榮

1981 「吉蔵と智顛—経典註疏をめぐる諸問題—」『東洋学術研究』
20(1), 101-116。

藤井教公

1981 「天台智顛における「如来蔵」の語の意味」『印度学仏教学研究』
30(1), 339-343。

1982 「『勝鬘経』の世界—中国如来蔵思想史研究の手がかり—」『横
浜市立大学論叢』34(1), 25-49。

1985 「天台智顛の如来蔵思想」『印度学仏教学研究』33(2), 166-
169

1988 「天台智顛における『涅槃経』の受容とその位置づけ-1-」『大
倉山論集』23, 41-74。

1988 「天台智顛における『涅槃経』の受容とその位置づけ-2-」『大
倉山論集』24, 145-189。

2000 「天台智顛における中道と仏性」『印度学仏教学研究』49(1),
29-35。

1990 「天台智顛における『涅槃経』の受容とその位置づけ-3-」『大
倉山論集』27, 165-195。

2013 「天台智顛と大乘『涅槃経』」『叡山学院研究紀要』35, 108-
126。

福田雅人

1991 「天台智顛の二諦説の特色」－特に三諦説との関連において
－」『天台思想と東アジア文化の研究：塩入良道先生追悼論
文集』，27-38。

若杉見竜

1981 「法華玄義成立についての一考察」『棲神』53, 61-70。